
イビル・アイ 邪眼再臨

丸天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イビル・アイ 邪眼再臨

【Nコード】

N7369D

【作者名】

丸天

【あらすじ】

三十年前に『アルカディア』と呼ばれる別世界で起きた二つの一族による大戦争。その戦争で敗北した一族の長は『邪眼』という眼を持っていたが、長は戦争中、己の全てを未来へ繋ぐために転生魔法を使い、その姿を消した……。そして三十年後の現在、高校生のキョウスケはテロリストに誘拐された妹を追ったが、テロリストの凶弾に倒れた。その時、彼の右目が漆黒の闇色に染まり……。・！？コメディを織り交ぜながら繰り広げられるアクションファンタジー小説！※近々タイトルを変更予定。

プロローグ（前書き）

新連載です。どうぞ可愛がってやってください。

ギャグも入れてみようと思いますが、笑えるかどうかは、アナタ次第！

ってなレベルだと思います。みんながみんな、笑えるわけではないと思います。

そんな作品ですが、どうか最後までお付き合い下さい。

追記 自分で読み返して気づきましたが、最初の方はおもしろくないです。

できれば十話くらいまではお付き合い下さい。

プロローグ

——『邪眼^{じやがん}』と呼ばれる眼がある。

悪意を持って相手を睨みつける事によって、対象となった被害者に呪いや魔術を掛ける事が出来ると言われる。

そのためその眼を持った人間は、他人どころか、身内の人間にさえ畏怖され、世の中から迫害されてきた。

邪眼は国によって『魔眼^{まがん}』、または『邪視^{じやし}』と呼ばれることもある。

だがこれは迷信の一つであり、実際には存在しないとされてきた。

自分も———思っていた。

———存在しない———モノだと———そう思っていた。

———全てが変わる———その時が来るまでは———
.....

三人の男達は長い長い廊下を風のように駆ける。やがて、辿り着いた白い扉の前で立ち止まり、

「失礼します！」

そう言い放った後、扉の向こうへ進んだ。そこは広間だった。それもあり広い。

三人の男達は横に並び、床に片膝をついて真ん中の男が言った。

「帝様^{みかど}！報告いたします！我が一族は『————』の魔導兵器により、ほぼ壊滅状態にあります！」

『————』はいずれもこちらへ進行中！このままでは、ここも崩壊するのは時間の問題です！！」

巨大な広間に男の叫び声が大きく響き渡る。その広間の奥には帝様と呼ばれた男の背が見える。

「魔導兵器……あの大炮か？」

帝は左窓の向こうを指さす。そこに男達は窓へ目を向け、

「「「う、うわあああああ————！！！」」」

三人同時に絶叫を上げた。その瞬間、轟音が鳴り、粉々になった壁が広間に降り注いだ。

帝が指さした窓の辺りは大穴が空いており、暗雲の広がる大空、そして真っ赤な炎が埋め尽くしている灰色の大地がよく見えている。

「くそ！！もうこんなところまで攻めてきたのか！！」

右にいた男がそう言って広間を飛び出していった。

「……………帝様……………どうなさいますようか……………?」

帝は背を向けたまま何も言わなかった。広間内は静かだが、大穴からは悲鳴が絶えることなく聞こえてくる。

「我が一族は……………」

帝が突然口を開いた。残っていた二人は息をのみ、耳を澄ました。だが帝はすぐには続きを言わなかった。そしてしばらくの静寂が流れた後、続きを言った。

「……………負けるな……………皆に撤退命令を出せ」

左の男が目を見開いて叫ぶ。

「な、何を仰います!? まだそうと決まった訳では……………」

だが真ん中の男がそれを目の前に手を出して止めた。

「……………帝様は撤退命令を出せと仰ったのだ! 仰せの通りにしろ!」

左の男は沈痛な面持ちでいた。しかし、帝の後ろ姿を一度見て言った。

「承知致しました……………」

そして広間を駆け足で出ていった。

広間に残ったのは帝と真ん中の男のみ。帝は何も言わずにただ黙っていた。

「帝様も．．．．．早くお逃げに．．．．．」

「フン．．．．．部下だけに戦わせ、自分だけは生き延びようとするほど俺は臆病ではない」

男は、はい？と首を傾げる。

「あの程度の軍勢など、俺一人で十分だ」

そう言って振り向こうとしたが、背後に殺気に似た気迫を感じ、動きを止めた。

背後には、ついさっき言葉を交わしていた男が、自分に剣の切っ先を向けている。

「．．．．．何のマネだ？」

「い、行かせません．．．．．帝様も、仰ったではありませんか．．．．．」

私達は、ま、負けたのです．．．．．ですから早く、ここから逃げなければ．．．．．！」

男の声は恐怖で震えているが、その目には強い意志を秘めている。帝は、はあ、とため息を漏らす。

「奴らに勝てなければこの一族は終わりだ。お前も解らんわけではないだろう」

「帝様が立ち向かって勝てたとしても……帝様が居なくなられてしまつては、我が一族も終わったのと同然です……ですから……行かないでください」

酷く弱々しいその言葉は帝の心にすつと沈み込んでいった。

背後の男も震えているが、帝を行かせないという意志はとてつもなく強大なものであつた。

帝はフ、と口元を歪める。

「……良いだろう！俺は逃げる、お前達を見捨てな！だが、俺に集ってくれた者達に誓いを立てよう！俺がこの世に再び舞い戻ったとき、必ずヤツらを叩き潰し！貴様等を救つてやる！！何があろうともな！！」

帝はそう強く叫んだ。その叫びはこの世界全てに響き渡る程大きかった。

「皆に伝えろ！例え誇りを傷つけられようとも！身内や友に刃を向けられようとも！必ず生き延びろとな！」

背後の男は剣を下げ、

「はい！！」

帝に負けないほど強く返事を返し、広間を出て行った。

広間に残った帝は一度、名残惜しそうに世界を見渡した。

そして広間の中央へ移動して、両手を胸の前で組んだ。その瞬間、帝の体から蒼い光が放たれ、広間を照らした。

「――――」
リ・インカーネーション
『輪廻転生』
「――――」

プロローグ（後書き）

まだプロローグです。

この先どうなるのかはまだ言えませんが、
楽しみにしてください。
それでは。

第一話 夢から覚めて (前書き)

初めに言っておきますが、あらすじを読んだ方、この先どうなるか分かってしまいましたよね？

というわけで、あらすじにかいてある場面まで、一気に行きたいと思います。

なので、他の連載途中の小説はしばらくの間、放置します。
どうかご了承ください。

第一話 夢から覚めて

ここは、とある部屋の中。

部屋の中は綺麗に整頓され、パツと見では汚れやゴミは見あたらない。

その部屋には勉強机が二つ、そして二段ベッドがある。

クローゼットやタンスがないところを見ると、着替えは別の部屋で行われることが伺える。

そして前述した二段ベッド。その一段目には誰も寝ていない。だが二段目には誰かが……寝ているかどうかは解らないが、誰かが壁の方を向いて寝転んでいた。

「……………はあ……………何度も同じ夢を見せやがって……………
・何なんだよ……………」

男性の声だった。それも中学、高校生ぐらいの年齢の声だ。

少年はゆっくりと起き上がった。寝癖のついた黒髪を気にする様子もなく、枕元にある時計に目をやった。

「あと五分は寝ていられるな……………おやすみ……………」

誰も居ないことを良いことに、再び寝転んで布団をかぶった。

と、その瞬間に部屋のドアが勢いよく開かれ、誰かが入ってきた。

その者は二段ベッドの二段目に跳び乗り、少年の耳元で叫んだ。

「お兄ちゃんっ!!!! いい加減に早く起きなさいっ!!!!」

「あゝ・・・・・・・・まだ耳鳴りがするう・・・・・・・・」

学生服に着替え、イスに座った少年はダラダラと机に並べられた朝食を口に運ぶ。

「早く食べちゃってよね。後片付けしなくちゃならないし、私も学校に遅れちゃうかも知れないんだから」

エプロン姿の机の向かい側にいる女性は、どうやら妹らしい。露骨に不機嫌そうな顔をして兄に愚痴をぶつける。

「だったら先に行けばいいだろ。こんなだらしない兄をおいてさ」

皮肉気味な兄の声言葉に、妹は反論する。

「ダメ！毎日ちゃんと兄妹で一緒に通学するのが、我が家の掟なの！」

それに負けじと兄も反論する。

「オレはそーゆー決まりとか掟とかは嫌いなんだよ。なんか縛られているみたいでな」

「喋ってないでさっさと食べる！」

ヤレヤレと兄は呟き、味噌汁をすすった。

「ほら、急いで！学校遅れちゃうよ！」

外に出ている妹に急かされるが、兄はまったく急がずに靴を履き、玄関を出る。

そして靴から鍵を取りだし、ドアを閉めて鍵をかける。

「大丈夫だって。これぐらいでも間に合うだろ」

一度ドアノブを回してドアを開けようとするが、当然鍵をかけているので開かない。

「よし……ちゃんとかかってるな」

「それじゃあ行くよ」

確認し終えた兄の腕を引いて、妹は走り出す。兄も転ばぬようにスピードを合わせて走る。

家を出て数分後、いつものように同じ学校へ通う生徒達と出会う。

「アイちゃん、毎日毎日ご苦労さん」

「あ、おはようございます、エイジさん」

妹————アイは一旦止まり、追い抜きかけた細身の男子生徒、エイジに挨拶をする。

「そして毎日毎日お疲れさん、キョウスケよ」

「ようエイジ、今日も余裕だな……学校遅れるぞ？」

兄のキョウスケの言葉に、はっはっはと笑い声を上げ、こう返す。

「案ずるな。この世は何事もうまくいくようにできている。物語の主人公は決して死ぬことがないのと同じなのだ」

「いやいや、死んでから生き返る主人公もいるぞ？　というか、そんなマンガや小説みてーな話、有り得んだろ」

と、キョウスケが言えば、エイジが奇妙なことを言い放った。

「この世界は小説だぞ？　我々やこの世の全てはフィクションであり、実在の人物、団体、事件などには、いっさい関係ありませんという世界なのだ。」

故にワシもお前も実際には存在しな———」

「うん、もう何言ってるのかよく分かんねーから無視するわ。行くぞ、アイ」

「はい。それじゃ、エイジさん。学校遅れないようにねー」

再び走り出す兄妹にエイジは軽く手を振り、歩き出す。

アイは中学二年生、キョウスケは高校一年生で、彼女の通う中学校とキョウスケの通う高校は、向かい合うように建てられている。

「お兄ちゃん、授業中は寝ちゃダメだよ」

「はいはい、もういいから行け。お前も遅れるかも知れんしな」

「うん。じゃ、行ってきまーす」

兄の忠告を素直に感謝し、妹は中学校の校舎へ駆けていった。

「さて俺も行くかな・・・ん？」

キョウスケは背後から何かが高速で近づいてくる音に気づいた。振り向くと、丁度それはキョウスケの真横で止まった。

「おうキョウスケ。今日も寝癖直さずに来るとは、だらしないヤツめ。ちゃんと直してから来いよな」

自転車に乗ったまま少年は挑発する。だがキョウスケは軽く言い返す。

「万年癖毛のお前が言っても説得力ゼロなんだよ。ナオキ」

すると今度は自転車の後ろに乗っていた金色の短髪で背の高い男が話しかけてきた。

「オラ、とつとと行くぞ。これ以上遅刻したらバツ当番なんだからよ」

「お、ユウイチ。おはよう」

ユウイチに挨拶したが、今言ったように急いでいるらしく、

「あいよ」

とナオキが言って、校門をくぐり抜けていった。

「・・・・俺も急がないとヤバいな」

キヨウスケも駆け足で校舎へと向かっていった。

第二話 屋上会議（前書き）

キョウスケ

成績 中の下 特技 足が速い 好物 コーヒーゼリー

この物語の主人公。特に頭が良いわけではなく、

いつもダラダラとしていたので、妹のアイにいつもどやされているが、邪険に振る舞うことはない。

父親はどこか遠い職場で働いているので滅多に家に帰ってこない。

帰ってきてても稼いだお金を置いてすぐにまた出かけていくので、だらしない親父だと思っている。

そして自分のだらしなさは父親の遺伝だと考えている。

第二話 屋上会議

昼休み

アイに毎朝作ってもらっている弁当を食べ終えたキョウスケは屋上に足を運んでいた。

屋上には落下防止用に金網が張ってあるが、それなりに広い。そして屋上にはいつも同じメンバーがそろう。

それは登校中に会ったエイジ、ナオキ、ユウイチ、そしてマオ。全員中学からの幼なじみの男子であり、自分を含めた五人でいつも遊んでいた。

マオがキョウスケの姿を見た途端口元をニヤリと歪ませた。

「はっは、顔色悪そうだなキョウスケ。さてはまたアイちゃんにどやされたな？」

キョウスケは一度ため息を吐く。

「それはもう慣れてるさ……でもそうじゃねえんだよ」

その言葉に皆が疑問を抱く。一人を除いて。

「なるほど……ついに殺^やってしまったのか……自首するか？ 怖いならワシもついて行ってやるぞ？」

涙目でそう言いつつ、キョウスケの肩に手をポンとおくエイジ。その手を煩わしそうに払いのけ、キョウスケは続けた。

「どうもここ最近、同じ夢ばかりを見てるんだ……それも妙

にリアルなのが……」

僅かに視線を落とす。

「それって自分の前世じゃねえのか？よくあるだろ、自分の前世の記憶が夢として出てくるっつーのがよ」

ユウイチの言った話は自分も聞いたことがある。しかし、それは間違っていると思った。

「あー……だけど、夢が非現実的って言うのかな？とにかく、実際にはあり得ない事が起きてる。なんか変なんだよ」

「変？コイツみたいに？」

そう言ってナオキはエイジを見る。

「殴るぞコラ。それとワシは変なんかじゃない！この世の秘密、裏側、真実を知っているだけだ！」

力説するエイジは放っておき、四人で話を進める。

「変って言うのは……どうも戦争が起きてるみたいなんだよ。それも歴史に無いような感じの戦争が……」

マオも顎に手を当てて話す。

「ん口……まあ精神的に疲れてるんだろうな。前の中間テストの影響か、それとも別の何かか……」

キョウスケは顔を上げてマオを見た。

「別の何かってなんだよ」

そう問い詰めるが、もうすぐ昼休みは終わる。

「知らねーよ。自分で思い当たる節でも探してみろ。原因はそこにあるんだろうしな」

携帯電話で時刻を確認しながら答えていた。マオはもう昼休みが終わることに気づき、錆び付いたドアへ向かっていく。

「ナオキ、戻るぞ」

「へーい。今日もお疲れ様でしたーっと」

続いてナオキ、ユウイチも校舎内へ歩いていく。残っているのはエイジとキョウスケのみ。
だが……

「悩め悩め、少年よ。真実はきつと姿を現す。それまで――――」

またエイジがポンと手を置き、

「負けるなよ、主人公^{ヒーロー}」

そう言っただけでマオ達に続いた。

「……………うっせーよ。言ってる意味も分かんねーし」

と言った矢先に、ドアに手をかけたマオが不意にキョウスケへ視線を向けた。

「あ、キョウスケ、お前放課後予定あるか？」

キョウスケは方眉を上げてボソツと言った。

「いや、無いよ……多分」

マオはそれを聞いてニヤリとした。

「じゃあさ、今日キョウスケん家^ちに行っていていいよな？」

「ん、別にいいけど……何でオレんところなんだ？」

マオはにやけた顔のまま答える。

「キョウスケんここに一度行ってみたかったんだよ。オレは行ったことないし、お前がどれだけ妹の尻に敷かれているか、気になったんだな」

少し声を強くして言い返す。

「どうでも良いことを気にすんなっ」

「はは、すまんすまん。じゃ、授業終わったらすぐ行くからな」

マオはドアの向こうへ姿を消した。

「…………マオがいいならオレ等もいいよな？キョウスケの家行

くの久しぶりだし」

マオに続いてナオキも尋ねてきた。

「あ?・・・まあいいけど・・・」

彼に戸惑いながらも、一応許可した。ナオキとユウイチも姿を消し、その後は思った通り、

「ワシもいいやなどうもサンキューありがとさんじゃ放課後になー」

ドアを通った先でエイジが返事を待たずに言い切り、ドアが閉じられた。

誰も居なくなつた屋上に残されたキョウスケは、怒りや悔しさや苛立ちを見せることはなかった。

なぜなら唐突にみんなが屋上から去っていくのは、いつものことでもあるのだから。

「……………」とは言っても……………やっぱりなんかむかつかない……………

結局キョウスケも、皆と同じように校舎へと戻っていった。

第二話 屋上会議（後書き）

修正

誤字脱字などを数多く発見。

自分の事ながら大変恥ずかしい。

第三話 家庭内搜索（前書き）

アイ

成績 上 特技 家事全般 好物 リンゴ

キョウスケの妹。成績が良く、友達も多い。

兄の生活を規則正しくしようと毎日奮戦している。

髪は肩に触れる程度の長さ。

兄、キョウスケの友達はほとんど皆、アイの事を知っているため彼らとも互いに仲が良い。

第三話 家庭内搜索

紫野葉町しのばちようとは日本の海沿いの某所にあり、緑の自然が多くて住みやすい小さな町。

この町に観光名所と言えるものは無く、目立たない町。それが紫野葉町だった。

そしてその紫野葉町内のある家の前に集まった四人の学生達。彼らの内の一人は、これが目的の家であることを確認した。

「この家にキョウスケが住んでんのか？」

マオがその家を見上げて言った。その言葉に周りの三人は頷く。それをマオが見た後、玄関の側に取り付けられてあったインターホンを押した。

「キョウスケー、来てやったぞー、早く出て来ーいっ！」

そうユウキが叫ぶと、エイジが合いの手を入れた。

「貴様は完全に包囲されているっ！！おとなしく正義のお縄に付けーいっ！！」

まるでその言葉を待っていたかのようにドアが開いた。

「どこが包囲されてんだよ……ホラ、入るんだったら早く入れ」

ドアを開けたキョウスケが、露骨に嫌そうな顔をして手招きをする。その直後、小規模な雪崩のように四人が家へ突入する。エイジの台

詞のせいなのか、それが警察官の強行突破に見えなくなかった。

皆を自宅に入れた後にキョウスケも家内に戻ったのだが、そこで見たのは室内を探索する同級生達。

これでは本当に彼らが警察官になったようだ。

「で、何やってんだお前等」

大方予想はつくが、一応そう問うてみた。すると、イスの下に潜り込んだナオキが予想していた言葉をそのまま口にした。

「エロ本探し」

「やっぱりかい。先に言っておくが、そんなくだらんモンは家にねーぞ。」

「……つか、前にお前が来た時も探してなかったか？」

そこへエイジが肩を落としたように呟く。

「そうなのか………実に残念だ」

そう言いつつ、片手に持ったコーヒーズリーを口へ運ぶ。

「……そのコーヒーズリー……どっから持ってきた？」

エイジは目でその位置を示した。視線の先には————冷蔵庫。もちろんエイジの物ではない。

「————それは俺のコーヒーズリーだあああつ!!!勝手に
人ん家の冷蔵庫開けて中の物を食ってんじゃねええええつ!!!
」

その時のキョウスケの顔は、まさに鬼神のようであった。

そしてエイジに飛びつくが、エイジはそれをヒラリと避けた。しかもコーヒーズリーをこぼさずに。

キョウスケはそのままソファに突っ込んでしまったが、怯むことなく再びエイジに飛びかかった。

それをまたエイジは避け、またコーヒーズリーを食う。もう既に半分は、エイジの腹の中へ消えてしまっている。

「これ以上食うなああああつ!!!俺のコーヒーズリーイイイイ
イイツ!!!!」

その時、キョウスケの視界にゴミ箱が入った。それだけなら無視していただろう。ゴミ箱の中にあったそれを発見しなければ……。

「おっ、お前つ!!!いつの間に二つも食ってんだあああああつ
!!!!」

ゴミ箱の中には、空になったコーヒーズリーの容器が二つ。ほんの
ついさっきまでは入っていなかった物だ。

キョウスケの怒りのボルテージは最高潮に達した。この状態なら、
フルマラソンも完走できるだろう。

世界記録を破ることさえ、容易いだろう、多分。

結局、冷蔵庫に保存されていたコーヒージェリー三つは全てエイジに食された。

キョウスケはその事実を受け止めたのか、もうエイジを襲うことはなかった。

が、エイジに対するコーヒージェリーの恨みは消えしまっているわけではない。

この恨みはいつか晴らす時が来るだろうと考え、今は大人しくしているのである。

しかしあくまでも、『今は』である。時が来るまでの間だ。

……まあ、その『時』がいつ来るのかは、誰にも分からないが……。

マオ達は搜索を打ち切り、まるで我が家のようにくつろいでいた。本を読む者、雑談を交わす者。皆、することはバラバラであった。そこへ突然、家の電話がけたたましく鳴った。

「…………はいはい、今出るよっと」

キョウスケは鳴り続ける電話へ近づき、ゆっくりと受話器を手にとって耳に当てる。

「も—————」

もしもと言いかけたとき、低い男の声がそれを遮った。そして思いもよらぬことを言った。

「何も喋るな。こちらに余計な言葉が聞こえたら、即座に妹を殺す」

「――――っ!？」

言葉が喉で止まった。開いた口がふさがらず、耳を疑った。そしてそのまま、ただ受話器から流れる低い声を、啞然としながら聞いていた。

「妹は我々が誘拐した。返して欲しければ、金を用意するんだ。金をこの町の港にある第十番倉庫まで一人で持ってこい。なるべく早く持ってくるんだ。あまり遅すぎると……妹がどうなるか分からんぞ? それから、このことを警察や身内や知人に話した場合も……言わなくても分かるよな?」

男はそれだけ言って、電話は切れた。同時にキョウスケの全身にとつもない悪寒が走った。

第三話 家庭内搜索（後書き）

キヨウスケのコーヒーゼリーに対する愛は相当なものですな（笑）。
書いていて楽しかったです（?）。

ちなみにキヨウスケの家の冷蔵庫には必ずコーヒーゼリーが入っています。

別に深い意味はありません。ストーリーにも関係ないです・・・・・・

それでは。

第四話 テロリスト（前書き）

エイジ

成績？ 特技 立ったまま寝られる 好物 自分の味覚が上

手いと感じた食物

紫野葉高校七不思議の一つにも数えられるほど謎が多い人物。

何から何まで謎だらけ。彼がどこに住んでいるのかを知る者はいない。

自称、『この世の裏を知り尽くしている男』。

そのため、闇組織に狙われている……らしい。

修正

アタッシュケースに五百万とかいう馬鹿にもほどがあるミスを修正。
指摘してくださったあう様に大感謝。ホント馬鹿だなあ、自分。

第四話 テロリスト

午後十時

今、彼は港前の倉庫の前にまで来ていた。

彼の片手には銀色のアタッシュケース。かなりの重量がある。

中には、札束が詰められている。彼は重い足取りで倉庫へ一歩、また一歩と、ゆっくり歩み寄る。

覚悟を決めたのか、鋭い目つきをしている。まるで戦の地へと向かう兵士だ。

そして、ついに倉庫の目の前まで来た。それと同時に、錆び付いたシャッターが上げられた。

中から現れたのは目出し帽をかぶり、全身黒づくめの男。手には拳銃が握られている。

「まさか今夜に来るとは思わなかったよ……それより、ちゃんと金を持ってきたのか？」

電話の時に聞こえた声だ。電話の相手はコイツだったと、一瞬で気づいた。男の問いに、彼は首を縦に振る。

「このことは誰にも口外してないか？」

もう一度首を縦に振る。

「そっちこそ金を渡したら……ちゃんと妹を返してくれるんだろうな？」

キョウスケは凄みのある低い声で聞いた。

午後九時

今家にいるのはキョウスケ一人だけだった。

テロリストからの電話の後、みんなはそのことを悟ったかのように、用事を思い出したと言って帰ってしまった。

それを初めに言いだしたのは、意外にもエイジだった。

彼の行動を見た途端、他のみんなにも何か意志が伝わったかのように、家を出て行った。

こちらとしてはありがたかった。

ちなみにマオは最後に、名残惜しそうに家内を携帯電話のカメラに納めたのだが、すぐさまそれを消去させた。

高校生にとにかく大金を用意させるといえるのは難しいが、用意しなければアイが殺される。

何か良い案がないかしばらく模索したが、これと言っていない案は見つからなかった。

そこで、親父に頼ることにした。誘拐されたことを喋らなければ大丈夫だろう。

そう思い、携帯電話から親父へ電話をかける。

親父を頼るのは、一体いつ以来だろうか。だらしないと思い続けた親父に、自分から電話をかけるのはいつ以来だろうか。

そして思ったより早く電話は繋がり、親父の声が聞こえた。

「おうキョウスケ。珍しいな、お前からかけてくるなんて、いつ以来だろうか？」

自分と同じ事を考えるところを見ると、やっぱり親子なんだなと感じた。

「……………あ、あのさ……………今すぐ大金がいるんだけどさ……………む、無理かな？」

変に声が詰まってしまう。自覚はないが、緊張しているのだろうか。親父は考え込んでいるのか、しばらく声を出さなかった。今聞こえるのは、時計の針が進む音のみ。それだけだ。

「……………俺のベッドの下の引き出しを開けてみる」

「あい、え？」

不意に親父の声が聞こえ、思わず奇妙な声を出してしまった。

「無駄遣いすんなよ」

それだけ言って、電話が切れた。

言われたとおり、親父のベッドの下の引き出しを開けると、映画でよく見る、銀色のアタッシュケースが見つかった。そして中には、たくさんの札束が。

少し震える手で金額を数えると……………およそ数千万は入っている。

キョウスケは確認し終えた後、アタッシュケースを手にも、家を出た。一刻も早くアイを解放してやりたい。その思いだけがキョウスケを突き動かしていた。

「ああ、もちろんだ。お前の言ったとおり、金さえ出せば妹は返してやる」

男はそう言って手を出した。キョウスケは少し躊躇ったが、やがてアタッシュケースを男に渡した。

男が中身を開けて確認する。そして口元をニヤリと歪ませ、ケースを閉じた。

「さあ、早く妹を……アイを返せ！」

自然と声に力がこもる。そして男はこう言葉を返した。

「ああ、ちゃんと妹は返してやるさ」

男は少し後ずさり、キョウスケの左胸に銃口を向け、

「妹は、な」

撃った。銃声はあまり大きくなかった。消音器サイレンサーを付けていたのだろう。

だが気づいたときには、既に放たれた銃弾がキョウスケの体を撃ち抜いていた。

「……………あ……………？」

痛みは意外にもほとんどなかった。ただ、あふれ出てきた血が自分の体を、服を、真っ赤に染めていくのは分かった。

それから、意識が一気に遠くなっていく。強い眠気にでも襲われていくように。

そして意識が途絶え、うつぶせにバタリと倒れた。

「悪く思うなよ」

——
そう男は吐き捨てるように言い、倉庫の中へ戻っていった。が——

「・・・・・・・・？」

後ろでズズツ、というような、何かが移動するような音が聞こえ、一度立ち止まった。

しかし空耳と思い、再び歩みを進めたが、また、同じ音が聞こえた。

—————気のせい・・・・・・・・か？

不審に思い、振り向いた。そして、それを見た。

・・・・・・・・見ってしまった。

地面に手をつき、血を流しながらも立ち上がろうとする彼を、男は見た。直後、冷たい恐怖が男を襲った。

「な・・・・・・・・な、んだ・・・・・・・・お前・・・・・・・・！？」

彼は顔を重たそうに上げた。そして蛇のような目でこちらを睨んでいる。

その時、彼の右目が漆黒の闇色に染まった—————。

第四話 テロリスト（後書き）

ようやくあらすじの場面まで進めました。

というわけで他の作品も進めるつもりです。

そちらも良ければ、読んで下さい。

追記

キョウスケの父親については、第二話の前書きを参照してください。

第五話 絶叫と冷笑（前書き）

マオ

成績 上 特技 暗記 好物 果物全般

髪は薄い茶色をしていて、『一度した約束は何があっても必ず守る』をモットーとしている。

実際、彼が約束を破ったことは一度もなく、周りからよく信頼されている。

第五話 絶叫と冷笑

「人質の女はどうしている？」

「あゝ、まだ寝てるんだよ。薬を使ったからとはいえ、お気楽なもんだぜ」

倉庫の奥からの男達の声。男は五人全員で輪を作っていた。倉庫には段ボールやコンテナなどが所狭しと並んでいる。

奥にいる男達は皆、テロリストの一味である。今は目出し帽を脱ぎ、雑談を交わしていた。

慣れているのか、捕まらないと確信しているのかは全く分からないが、緊張感が全くない。

そして倉庫の隅には、手足をロープで拘束されている妹のアイが横になって、健やかな寝息を立てていた。

外傷はなく、着ているセーラー服に汚れがほとんど付いていないところから、丁重に扱われていたことが伺えた。

そして、男達が雑談に大笑いを上げた、その時だった。

「—————うああああああああっ！！！」

倉庫の外から、断末魔の叫びとも言える悲鳴が響いてきた。男達の笑い声は一瞬にして消えた。

「な、なんだ今のは？」

「オレが知るかよ、そんなこと！」

次々と疑問を声に出す。少々焦りも見え始めた。

「人質の兄を殺^やるつもりだったろ！？多分それじゃないか？」

「あの声か？そんなわけあるかよ！あれはリーダーの声だったぞ！」

「…………お前、ちょっと見てこい。油断は禁物だぞ」

指名された男は素直に命令に従い、段ボールやコンテナを避けて、倉庫の入り口へ走っていった。

倉庫から出た男は、目の前に横たわるそれに釘付けになった。

男の足下には、右の肩から左の腰までが真つ二つに切り裂かれていて、白目をむいているリーダーが倒れている。

そして、血は今もダラダラと流れている。

急に吐き気と不快感に襲われた。が、男は動かなかった。いや、動けなかった。

—————後ろに誰がいる

そう感じ取ったからだ。しかし、後ろを取られているこの状況では、下手に動くことはできない。

振り向いた途端、リーダーと同じように刃物か何かで斬られるかもしれないのだ。

男は両手をゆっくりと上げ、落ち着いて話しかけた。

「…………とりあえず、冷静になってくれ。お前が誰だか分からないが、俺は抵抗する意志はない」

後ろの者からの返事はない。相手も落ち着いているのだろう。そして続けた。

「……何か要求はあるか？それとも——」

そこで男の声は止まった。右肩に何か細い物が当てられたからだ。男の頭は真っ白になる。

「——もしかして……俺も殺されちまうのか……」

右肩に当てられた何かは、そのまま左の腰までなぞられていく。そこで初めて分かった。当てられているのは銃ではなく、ただの指だ。

何をするつもりなのか、全く見当が付かない。指で切り裂くのだろうか？まさか、そんなことはあり得ないだろう。様々な憶測が脳裏を過ぎる。そして、背後の者が唐突に喋った。

「——『ラセレイション・フィンガー切断ノ指』——」

その男も、リーダーと同じ肉塊へ変わった。

「遅いなあ……俺も見てこようか？」

倉庫の奥に残っている四人の男達の内の一人がそう訊いた。男達は皆、頷いた。

「お前も用心しろよ」

男は立ち上がって苦笑した。

「んなことぐらい、分かつ————」

「—————
ネザー・ワールド・ゲート
『冥界ノ門』」

彼らの中に静寂が流れた。それはほんの一瞬だった。

「………なんか言ったかお前？」

「い、いや、オレは別に………あ？」

ある男が、上を見て声を漏らした。それに続くように、仲間も上を向く。

そこには半径一メートルほどの円形の穴があった。天井ではなく、空間に。

まるで宙に浮いている円盤のようだった。その穴の中は真っ暗で、奥は何も見えない。

そこへ、最初に見つけた男が不思議に思い、穴へ手を伸ばそうとした。

だがその瞬間、穴から出てきた死人のような青白い腕に手を捕まれた。

「ひいっ!!」

青白い腕は氷のように冷たく、男は悲鳴を漏らした。仲間は呆然としながらそれを見ていた。

「た、助け、て!!」

その声で我に返った仲間が、無理矢理外そうと青白い腕に掴みかかった。

「コイツツ……放しやがれっ！」

だが青白い腕は男の手を掴んだまま放さない。それどころか、穴から何本もの青白い腕が、次々と伸びてきた。そして残っている男達全員を捕まえた。

「うわっ！放せっ、このっ、ちくしょう！！！」

身動きがとれなくなった男達は、次々に空中に開いた穴の中へ引きずり込まれていく。

一人、また一人と、穴の中へと消える。そして、最後の一人も――

「い、いやだ！いやだ！！いやだあああああああ！！！！」

――絶叫を上げて穴の中へ消えた。その後、空中の穴は何事もなかったかのように閉じた。

倉庫の外と中でのテロリスト達の最期全てを、黒い瞳は冷笑を浮かべて見据えていた。

第五話 絶叫と冷笑（後書き）

登場人物の顔や服装ですが・・・皆さんの想像にお任せします。
言動等から適当に想像していただいて構いません。

ストーリーに支障は出ないと思います・・・多分。

第六話 夢か現か（前書き）

ナオキ

成績 下 特技 逆立ち 好物 特になし

天然の癖毛。なのでからかわれることもしばしば。

いつもユウイチと一緒に、何をするも二人でする。

成績は悪いが、本人曰く、やろうと思えば何でもできる。

成績を良くしようと思えば、その通りにできるらしい。

第六話 夢か現か

そして彼は、いつもと変わりなく目を覚ました。妹の蹴りによって。

そして彼は、不思議に思う。あの事件は夢だったのかと。

そして彼は、それを夢だと決めた。誘拐されたはずの妹が、今ここにいるのだから。

そして彼は、いつもと変わりなく朝食を食べる。妹と共に。

そして彼は————衝撃を受ける。テレビの画面に映し出されている光景に。

空が分厚い雲に覆われた土曜日。兄妹は平日と比べて、非常にのんびりと朝食を取っていた。

テレビ画面には、女性キャスターがニュースを次々と報道していくのが映っている。

そこへ、そのキャスターに一枚の原稿が手渡された。

『たった今はいってきたニュースです。今日未明、紫野葉町の港で二つの変死体が発見されました』

テレビ画面のキャスターは速報に慌てることなく、淡々と話している。

『遺体は右肩から左腰までが刃物で切られたように分断されていた、

とのことですよ。

そして遺体の近くには銃と、目出し帽が落ちていたことから、この二人は何らかの犯罪行為を行おうとしていた可能性が見られます』

このニュースが流れている間、キョウスケの脳内思考は完全に停止していた。

「なんだか恐ろしいね、体が二つに分断されていたって……
って、お兄ちゃん？　もしも口し？　お口い？」

アイの問いかけも、全く耳に入らない。

———……なんだこれは……あれは夢、夢だぞ！
なのに……なんで現実で起きてるんだ！！

確かに妹を誘拐したというテロリストからの電話があった。身代金を持って、港へ向かった。

そして殺された。あっさりとオレの人生は幕を閉じた、はずだった。だが勝手に体は動き出し、次々とテロリスト達を消し去った。

『かなり現実味のある夢だ』

必死に自分をそう思いこませた。もしもこれが夢じゃなく、現実だったとしたら自分は人殺しだ。正当防衛なら罪にならないかも知れないが……。

「……なあアイ」

「ん？」

「昨日・・・・・・・・アイは変なことはなかったか？誰かに連れ去られたりとか・・・・・・・・」

キョウスケは恐る恐る訊いた。

どうか、何もなかったと答えてくれますようにと、心の中で祈る。

「別に何もなかったよ」

「————やっぱりそうだな。あれは夢だったんだ・・・・・・・・絶対に。アイだってそう言ってるんだから、間違いない」

キョウスケはホッとして、息を大きく吐く。

「それより、昨日はありがとう」

アイに唐突に礼を言われたことに戸惑う。

「俺・・・・・・・・礼を言われるようなことしたっけ？」

キョウスケの反応に、アイはクスクスと笑う。

「いや口、やっぱり最近疲れてるのかな、私って。今度から気をつけないとね」

未だに訳が分からずキョトンとする兄に、妹は説明する。

「知らんぷりしてるの？それとも本当に忘れちゃった？

・・・・・・・・とにかく、お兄ちゃんなんですよ、昨日下校途中に倒れちゃった私を送ってくれたの。

うん、本っ当に気をつけなきゃね。最近物騒だし・・・・・・・・お兄ち

やん？もう……ちゃんと起きてるのっ？」

「……起きて、る」

「なら、いいよ」

アイは気にせずにご飯を口に運んでいく。だが、キョウスケの体の動きは完全にストップした。

アイの言った出来事。アイが下校中に倒れたというのは、恐らく本当だろう。

しかしその原因は疲れていたからなんかじゃない。アイはそのときにテロリストに襲われたのだ。そして港の倉庫に閉じこめられ、俺に助けられた。

これなら全て、辻褄が合う。俺がテロリスト達を消したことは、すごく現実味のある夢ではなく、紛れもない事実なのだ。

同時にキョウスケの全身にとってもない悪寒が走った。昨日感じたのと、全く同じような。

そして、彼の携帯電話が鳴ったのは、それから数分後のことだった。

キョウスケの携帯電話が鳴る数分前、自分の家から少し離れた公園の中をマオは歩いていた。

毎朝ここを散歩で通るのが日課だった。しかし、公園に人影はまったくくない。

「だ口れもいねえなあ……」

と言った矢先、誰かが一人でブランコに寂しそうに座っているのが見えた。

ツインテールで、中学生くらいの女の子。先程から俯いて、何度もため息を吐いている。

「どうしたよ？何か落としたのかい？」

少女はマオに気づいていなかったのだろう。不意にかけられた声にビクッと驚いた。

「わりい、ちょっとびっくりさせちまったな……どうしたんだ、ため息なんかして」

少女は戸惑いながらも話していった。

「あ、え……と、その……ですね……人を探してるんですが……、その人の家を記した地図を落としてしまって……はぁ口、どうしよう……」

また、ため息を吐く。

「じゃあさ、その地図探したらどうかな？オレも手伝うし」

少女は顔を上げ、明るく言った。

「本当ですか……ありがとうございます！では早速行きましょう！」

さっきまでの落ち込みようはどこへ行ったのか、少女はブランコから立ち上がって元気よく歩き出す。

「あ、そういえば自己紹介してませんでしたね。私は桜^{サクラ}っていいます。十四歳です」

「俺はマオ、十六だ。よろしくな」

そこでマオはふと気になったことを口に出した。

「そういえば桜ちゃんが探しているのって誰？」

すると桜は思いもよらない名前を言った。

「キョウスケって名前です。高校一年生らしいんですが……」

「……高一のキョウスケ？なんだ、アイツのことじゃないか。それなら話は別だ」

マオは携帯電話を取り出した。

「……あー、キョウスケ？お前今家か？なんかさ、お前に会いたいっていう娘^{むすめ}がいんだけど。……ああ、学校に来てくれ、俺も今から行くし。じゃな。待ってるぜ」

マオは電話を切り、桜に向き直る。

「……よし、これでオーケーだ。キョウスケには学校に行けば会えるよ」

待ち合わせを学校に指定したのは、
マオと桜がここからキョウスケの家へ赴くよりも距離と時間的に早いからだ。

しかし、桜はまた少し俯き、小さく呟くように言った。

「でしたら……もう一つ手伝って欲しいんですが……」

「いいぜ。何でも手伝ってやるぞオレは」

「約束してくれますか？」

マオは胸を張って力強く答える。

「おう！俺は一度した約束は絶対守る男だからな！」

「ありがとうございます……でも何を手伝ってもらうかは、キョウスケさんに会ってから言います」

桜がそう言い、二人は学校へと向かった。

第六話 夢か現か（後書き）

あんまり投稿できてないな．．．．．どうしよ（汗）

第七話 桜の思惑（前書き）

ユウイチ

成績 下 特技 瓦割り 好物 肉よりも野菜が好き

筋肉質で背も高く、腕力は学年一。しかし何も部活には入っていない。

様々な運動部から声をかけられたことは何度もあるが、全て断っている。

不良ではないが、授業に出ていないことがほとんど。出席しても寝てばかり。

さらに他の学校の不良とケンカをすることもない。

『無駄に血を流すことはしない男だから』らしい……。

不良達の待ち伏せなどを避けることが結構得意。

第七話 桜の思惑

午前九時 紫野葉高校 校門前

「なんだ、あっちの方が早かったか」

校門の壁により掛かっているキョウスケを見たマオはそう呟いた。

「……マオ、朝っぱらからなんだ」

「ケータイで言った通りだ。この娘がお前に会いたかったそうだが、地図を無くしてしまったんだとよ。」

そこでこの俺が彷徨っているところを助けてやったんだ」

説明し終わると、自分の傍らにいる少女に目をやった。

「この娘の名前は桜だ。ほら桜ちゃん。このだらしなさそうな兄ちゃん、キョウスケだ」

目的の人物に会えたはずの桜は、不思議そうに首を傾げる。

「なんだよ。俺がなんか変か？ん？」

桜は恐る恐る訊いた。

「あの……本当にキョウスケさんなんですか？同名なだけで、別人なんかじゃありません？」

「どーいう意味だそれ？俺も気になるぞ」

キョウスケも首を傾げる。そこへ桜が精一杯の勇気を出して次々と言い放った。

「家族の方にいろいろと世話を焼かれてませんか？」

グサッ！

「自分でやることはちゃんとやっています？」

グサッ！

「授業中とかにダラダラしてませんか？」

グサッ！

「充実した毎日を送ってます？世のためになるようなことを一つでもしてます？感謝をされることをしてます？」

グサグサグサッ！！

それから桜の攻撃は三分間続いた。キョウスケはそのたびに顔を引きつらせ、心に何かが突き刺さる。

「————で、本当にキョウスケさんですよね？」

「……あー、正真正銘本物だよ俺は。つかホントに失礼なヤツだなお前」

結局桜にはなんだかんで信じてもらえたキョウスケ。しかし心に負った無数の傷は未来永劫残るだろう。

「……………本当に本当ですね？」

「だから、そうだって」

しつこく訊く桜に、キョウスケは少しヤケ気味になっていった。

「では……………あれ？」

また桜は首を傾げた。そしてキョウスケを指さした。

「なんだよ、まだなんかあるのか？」

「いえ、貴方ではなくて……………後ろに……………」

「後ろ？」

クルリと背後を向いた。マオもキョウスケの後ろに目をやった。が、そこにあるのは校舎のみ。不自然なところは見あたらない。

「後ろがどうかしたのか」

そう言いながら顔を前に戻したとき、目の前にいる桜は金槌を振り上げていた。

「悪く思わないでください。これも私たちの皇^{おう}のためです」

ガンッ、という音と衝撃がキョウスケに伝わった。

「・・・・・・・・だせえ・・・・・・・・」

キョウスケはそう漏らしてバタリと倒れ、気を失った。

「さてと、マオさん。キョウスケさんを運ぶのを手伝ってください。約束はもちろん覚えていますよね？」

マオは今の光景に微動だにせず、冷静に見据えていた。

「・・・・・・・・ああ、俺は一度した約束は何があっても必ず守る男だからな」

第八話 囚われの身

うつすらと目を開けた。目の前には細い鉄柱が並んでいる。頬がひんやりと冷たい。どうやら石が敷き詰められていて、自分はその間に倒れている。

体を起こそうとすると頭に衝撃が走る。まだ頭に痛みが残っているのが分かる。

それを堪え、何とか上半身だけを起こした。

「よう……起きたか」

顔を右に向けた。そこには俯いているマオが座っていた。よく周りを見渡してみると、ここは薄暗い牢屋だった。

「マオ……どこだよここは」

「牢屋」

「それは分かってるっつーの。どこの牢屋かってことだ」

俯いたまま答えたマオに少し寄った。

「よく分かんねえけど、どっかの廃ビルの地下だ、紫野葉町内の」

「廃ビルの地下に牢屋なんかあるのかよ……っつーか！なんで俺等はそんなところにいるんだよ！」

混乱しているキョウスケは立ち上がってわめいた。

「そうだ……桜!どこ行きやがった!」

誰も答えないと思ったが、意外にもすぐ近くから返ってきた。

「後ろにいますよ」

「————おわっ!!いんのかよそこにっ!!」

キョウスケは大袈裟なりアクションで後ろから少し離れた。そして桜の姿を見てさらに混乱した。

桜は両手に銀色の手錠が掛けられている。鉄ではなさそうな色合いをしている手錠だ。

「……なーんでお前まで囚われてんだよ」

「まったく、俺が今教えてやっから、ちょっと落ち着け」

マオは少し顔を上げてそれを話し始めた。

マオは黙々と気絶しているキョウスケを背負い、桜の後について行く。

すでに紫野葉町からだいぶ離れていて、今彼等がいるのは隣町の紅明町であつた。

紅明町の大きな特徴は何と言っても、山のように並び立つ高層ビル群だろう。

隣町と言っても都市圏にずっと近いせいなのか、紫野葉町とは雲泥の差だ。

小雨が少し降り出してきた頃、桜は足を止めて振り返る。

「・・・・・・・・やっぱり重いですか？」

「だーいじょーぶだって。こんなぐらい余裕余裕」

笑顔を見せて返すマオ。桜には、無理して強がっているようには見えなかった。それを見て、桜も笑顔を見せた。

「もうすぐ着きますから・・・・・・・・ほら、あの廃ビルです」

桜が指を指した方向には確かに廃ビルがあった。

周りにそびえ立つ高層ビルよりもはるかに小さく、ほとんどの窓ガラスが割れていて、壁もヒビだらけ。

まさに『廃ビル』であり、崩れやしないかとマオは少し不安になった。

しかし中に入ってみると、その不安は一瞬で解消した。

ビル内は外見と全く違った。見たこともないコンピューターやモニターが室内を埋め尽くしている。

そして何十人もの人が青く光るモニターを見つめ、コンピューターを操作している。

「マオさん、こっちですよ・・・・・・・・それと、あまり彷徨いたり見回したりしないでください」

言われたとおりに桜へ早足で追いかける。

やがて、最上階へと行き着いた。その途中の階でも、様々なコンピューターが配置されているのを見た。

あまり見ないでと言われていたが、気になってしょうがなかった。そして最上階では機械の類が全くなかった。社長が座るような大きなデスクが一つだけ。

その後ろには傷一つない大きな窓ガラスが。ドラマでよく見ることのある光景だ。

しかし、電灯はついていないため、外よりも薄暗い。

そしてデスクの上に手を置いてイスにどっかりと座っているのは、小太りで黒いスーツに身を包んでいる男。

その男からは何か奇妙な威圧感が感じられた。桜はその男の前で片膝をついた。

「星^{セイハ}様、キョウスケを捕獲しました」

星覇と呼ばれた男はゆっくりと腰を上げた。

「……………本当だな？」

「はい」

「ではその男は誰だ」

桜は背後にいるマオへ目を向けた。

「彼は捕獲に手を貸してくれたキョウスケの友人で、名前はマオです」

「マオ、か……………桜よ」

「はい」

桜は顔の向きを星覇に戻し、返事をした。

「二人とも牢屋へ閉じこめておけ」

「え————！？」

「何だとてもえっ！？」

マオも桜も驚愕の表情を露わにした。星覇は冷静に理由を説明した。

「我らの存在を知られた以上、このまま帰すわけにはいかないに決まっている。まさか分からぬ訳ではあるまいな」

桜は言い返さなかった。苦渋を顔に浮かべたまま、齒を食いしばっている。

キョウスケは一人で見つけるべきだったと、マオとはビルの前で別れるべきだったと、後悔した。

彼女はただ、自分の行動を悔やんでいる。

「冗談じゃねえ……わりいけど桜……約束はここまでだっ——！」

そう怒鳴り、マオはキョウスケを背負ったまま踵を返しかけたときだった。

「手間を掛けさせるんじゃないよまったく……」
ハイスピード・ムーヴ
『高速移動』

次の瞬間、マオの目の前に星覇が一瞬にして現れた。

「聞こえなかったのかい？ 帰すわけにはいかないかね」

「ちょ————マジかよっ!？」

星覇はマオへ手を伸ばしていく。そして肩に手が触れそうなほど近づいたとき、星覇の腕が止まった。

「早く逃げてください!!」

星覇の腕を掴んだ桜が一喝する。その声に押されたかのようにマオの足は動き出した。

「ありがとよっ!!」

マオは桜へ礼を言い、階段へと向かう。

「……反逆行為の罪はどれだけ重いのか知らぬお前ではないだろう? とくに、我が輩へ対してのはな」

星覇はギロリと桜を睨む。その目を見て桜は強い恐怖を感じた。

「————でも……ここで逃げるわけにはいかない……!!」

その理由はマオへの償いなのか、それとも単に、星覇のことが気に入らないだけなのか。

いや、どちらだろうと関係ない。

桜は腰に手をやった。隠していたナイフを取り出し、星覇へ向けた。

「てやああああああっ!!」

階段を駆け下り、すぐにビルの出入り口へ走った。ここまで誰一人として行く手を遮る者はいなかったが、最後まで油断は禁物だ。だが、結局廃ビルを出てしまっても誰も追ってこない。コンピューターを操作していた連中はこちらに見向きもしなかった。

「……………はぁ口、つつかれたぁ口」

コンクリートの地面に膝をついた。今思えば自分はずっとキョウスケを背負ったままだ。疲れも溜まるはずである。マオはゆっくりとキョウスケを下ろして呼びかけた。

「おいキョウスケ、そろそろ起きろや」

軽く体を揺すってみるが、目を閉じたまま何の反応も示さない。相当強く殴られたのだろう。

「……………ったく、さっさと起きろっつーの。もう背負って走れねえぞ俺は。」

「……………追っ手が来たらもう逃げ切れねえぞ」

マオは弱音を吐いていた。普段はあまり口に出さないのだが、さすがに今回ばかりは吐いてしまう。

少女と人捜しをし、見つけたら少女が金槌で殴って気絶させ、それを自分が運び、廃ビルの中へ入ったあげく、牢屋へ閉じこめられそうになる。

こんな経験は人生で初めてだ。二度と味わいそうにないほどだ。

「はぁ口……………勘弁してくれよ」

マオはまた、ため息を吐いた。と、そこへ——頭上から何者かがコンクリートの地面へ轟音と共に着地した。

「なんだ、思ったより遠くへは行っていないじゃないか。我が輩としたことが……焦って損をしたよ」

着地してきたのは星覇だ。

「はあ！？何で上から来んだボケ！！」

急いでキョウスケを担ぎ、星覇から逃げようとした。だが星覇はそれを許さなかった。

「だから手間を掛けさせるんじゃないよと言ったはずだ——
ショック・ウェーブ
『衝撃波』」

「—————があっ!?!」

突然背に何かが激突したような感じがした。そしてその勢いに負け、派手に転んだ。

その後、二人は星覇に捕獲され、牢屋に閉じこめられてしまった。

第九話 脱走計画

「まあそんなことで牢屋こゝに閉じこめられているってことだ。あはは、どーしたもんかねえ」

そう言いつつ両手をヒラヒラと振るマオ。

「お前はこういうときのお気楽思考やめろ。鬱陶ふさふさしいを超えてウザいぞ……桜、ここから出る方法ねえか？」

桜は何も言わない。マオを巻き込んだことをかなり後悔しているのだろう。それに何か思いついていれば提案しているはずだと、そこへ樂觀的になっていたマオが閃いた。

「そうだ！星覇のヤツ、妙な手品使っていたよな！桜もその手品と使えないんか！？」

「手品じゃないです。魔法です……信じがたいと思います
が」

間違いを小さな声で指摘した。

「ま、魔法？……そうなんか？って、名前なんかなんでもいい！

とにかく、オレはこんな非現実的なモノは信じないんだがそうも言
ってられねえ！

桜も星覇が使っていたのを使えばこんな檻、一気にぶっ壊せるだろ
！？」

桜は答えずに腕を前に突き出し、その腕を拘束している銀の手錠を二人の目の前に出す。

「この『封魔の銀』^{ふうまのぎん}で出来ている手錠がなければ可能です。

言っておきますが、封魔の銀はちよつとやそつとでは壊せませんよ」

どうやらこの手錠が彼女の力を封じているのだろう。そう思い当たったマオは次の手を考える。

だがマオが考えつく前に桜が一つの手段を思いついた。

「……ここから出る方法は一つあります……が、これはマオさんにしか出来ません」

「オレが？ 一体どうするんだ？」

桜は順を追って話していく。

「魔法を使える者は、一つは必ずその者が得意とする属性を持っています。それは火であったり、水であったりと様々です。

そして、その者は己の得意とする属性にたいして耐性を持っています。

火を得意とする者に火をぶつけてもあまり効果はない、ということです。分かります？」

二人は完璧に理解できたとはいえないが、とりあえず頷く。

「そこでマオさん。貴方は星覇の魔法『衝撃波』^{シヨック・ウェーブ}を受けていながらも、見ての通りピンピンとしています。

おそらくマオさんも星覇と同じ、衝撃の属性を持っていると私は睨んでいます。

マオさんが何か魔法を使えることができればここから出られると思います」

マオは驚愕の表情を浮かべた。

「オレが魔法を！？マジで使えるんか！？」

「あくまで可能性があるだけです。

それに魔法とはそれなりに制御が困難なですよ。一朝一夕では使えるモノではないんです」

「でも————」

マオはスツと立ち上がった。

「————やるしか他にないんだろ？」

「まったく桜め、何を血迷ったのやら……」

イスにどっかりと座った星覇は大きく息を吐く。軽く眠ろうという考えを実行しようとした瞬間、携帯電話がその考えを止めた。

「もしもし……はい、ちゃんと捕らえましたよ……ええ、まだ覚醒はしていないようです。

目も黒に染まっていますでした……分かってますよ。ちゃんとお連れいたします」

それから何度か相づちを打った後、

「……………それでは失礼します……………」

通話を切った。やっと考えを実行しようとしたとき、またそれは遮られた。

一人の研究員が部屋に跳び込んできたのだ。白衣の研究員は息を切らせながら話す。

「星覇様！地下牢の帝達三名が脱走しました！」

鬱陶しそうにため息を吐き、しかしあくまでも落ち着いて命じた。

「……………お前達は『ウラヌス』の開発を続けろ。脱走者は――

――」

星覇はスツと立ち上がった。

「――――我が輩がやる」

第十話 衝撃

「いやっほーう！！痛快痛快！！こりゃ気持ちいいねえ！！」

地下牢を脱出した三人は廊下を駆けていた。中でもマオは、この上ないほどご機嫌の様子だ。

数分前、桜に魔法の素質があると言われたマオは、見事に魔法を発動し、鉄格子を衝撃で吹き飛ばしていた。

そして今、この廃ビルから脱出するために走っている。

「この先の階段を上がれば、出口はすぐそこです！」

桜の手には手錠がかかっている。ただの手錠ではなく、魔力を完全に無効化してしまう『封魔の銀』できている。

マオの衝撃の魔法でも破壊することはできない。だが彼女は気にする素振りを見せなかった。

階段を駆け上がって行き着いたのは、あの不思議なコンピューターの並ぶフロア。この廃ビルの一階である。

研究員は誰一人としてキョウスケらに目を向けない。まるで存在すら気づいていないかのよう。

だがこれはキョウスケ達にとって好都合だった。

「さっさと出て、後は警察にでも頼もうや」

「まあ、信じてくれればいいけどな」

会話を交わしながら走る二人の表情は、希望に輝いている。それに對し、桜の表情は不安で沈んでいるように見える。

キョウスケ達は気づいていないが、彼女は星覇のことを考えていた。

また彼が自分たちに襲いかかってくるのでは、という不安な思いでいっぱいだった。

そして彼女の不安な思いは皮肉にも的中するのだった。

ヒビの入ったガラスの自動ドア。それを通り抜けたとき、キョウスケは戦慄を覚えた。

「しつけー野郎だな・・・ったく、いい加減にしろよてめえ」

「それは我が輩の台詞だ。貴様らもいい加減にしてもらいたいモノだな」

星覇はドアの向こうで待ちかまえていた。まるで出てくることが初めから分かっていたように。

「まさかそこの学生が魔法を扱えるようになっていたとは・・・
・驚嘆に値するものだ。だが、もう手加減はしないぞ？」

星覇は右腕を引いた。あの衝撃波の魔法を放つつもりだと、一瞬で気づいた。

「————しかし、それに気づくことはできても、回避することはできなかった。

星覇の放った衝撃波は見事にキョウスケへ命中し、派手に吹き飛ぶ。そのまま自動ドアの真上に激突し、コンクリートの壁が崩れ落ちた。キョウスケは壁にめり込んだまま動かなくなった。

「よくも————やりやがったな!!」

マオは拳を固めた。その手の中には魔力が渦巻いている。

「ぶっ飛べー!!」

その拳を星覇へ突き出す。マオの唯一の魔法は素人にしてはかなりの威力を持っていることを、桜は気づいていた。

放たれた衝撃波は星覇の腹部へ————しかし星覇は腕を軽く振り、衝撃波を弾いた。

「残念ながら、我が輩の属性も『衝撃』なのだよ」

不気味に微笑む星覇は両手に魔力を込める。

「さて、今度は我が輩の番だ」

そう言うとき星覇は込めた魔力を変化させ、両手に出来上がったのは鋭い氷柱だった。

「終わりだよ————『アイシクル・オブ・メテオ流星氷柱』!」

氷柱がマオと桜に向かって放たれる。その速さはまさに『メテオ流星』のようだった。

————当たる!!

二人は死を覚悟した。だが、氷柱は二人に届くことはなかった。

突然頭上から落下してきた炎の壁が、氷柱を防いだのだ。炎の壁は氷柱を溶かしきると、霧のように消え去った。

「これは…………『フレイム・インフェルノ火炎地獄』…………初めて見ました…………

・!
」

桜の様子から、この魔法が強力で扱いが困難なことが窺えた。星覇も、桜と同じように驚愕の表情を浮かべていた。

「……誰かな？我が輩の邪魔をするのは……」

星覇は頬をピクピクと痙攣させながら問うた。意外にも、その質問の返答はすぐに返ってきた。

「————俺だよ、星覇」

それに答えた人物は、マオの頭上にいた。その場にいた全員が、声のした方向へ顔を向ける。

大きくへこんだコンクリートの壁、その中に悠然と立っている彼が返事をしたようだった。

「キョウスケ……か？」

マオはポツリと声を漏らした。自分でも何故か、本当にキョウスケなのかを問うように言ってしまった。

その訳はすぐに分かった。上にいた男は姿形はキョウスケ。だが何か違和感があるのだ。

中身が、魂が、人格が。外見以外の全てがキョウスケではないように感じるのだ。

さらに驚いたのが、彼の右目である。白の部分が全て黒に塗りつぶされているのだ。

キョウスケの姿をした彼は、へこんだ壁に余裕の表情を浮かべて座り込んだ。

そしてニヤリと笑った。

「久しぶりだな星覇．．．．ククク、まさか生きていたとはな。
っーか、本物なのか？」

星覇もニヤリと笑った。

「フフ．．．．残念ながら、この通り本物なのだよ．．．．帝
！！」

第十話 衝撃（後書き）

十話です．．．．．がんばった！

第十一話 覚醒

夜、高層ビルが星のように光を放つ。端から見れば美しい夜景に見えるだろう。

しかしその町の外れにある廃ビルには張り詰めた空気が漂い、近寄りがたい雰囲気醸し出していた。

キョウスケの姿をした別の誰か。彼はビルの壁を蹴ってコンクリートの地面に着地する。

数メートルの高さはあつたはずなのだが、足には痛みどころか衝撃すら感じていないように見える。これも魔法なのだろうとマオは推測した。

「さて星覇、いくつか質問させてもらう」

「フフ……何かな？帝」

帝と呼ばれたキョウスケ。帝は廃ビルへ親指を向けた。

「貴様等はあの廃ビルの中で何をしているんだ？」

少しおどけた様子で答えた。

「おっと、いきなりそこから突くか……貴方も覚えているだろう？楽園と呼ばれた世界『アルカディア』。

その広大な大地を火で埋め尽くし、天空を灰で覆い尽くし、さらには大海までもすら焼き尽くした大砲……『ウラヌス』を造っ

ているのだよ」

帝はピクリと頬を引きつらせた。

「貴様……魔導兵器を造り出すことがどれだけの重罪か知らんワケじゃないだろうな……」

『ウラヌス』を『こっちの世界』にも造り出すつもりか」

「フフ……『こっちの世界』へ直接持ってくることは不可能なのでね……」

張り詰めた空気がさらに緊迫していく。辺りには誰も居ないが、酸素が薄いように息苦しく、ピリピリとした痛みを感じる。

「星覇、お前は俺が殺したはずなんだが……何故死んでいない？」

星覇は肩をすくめてこう返した。

「ああ死んだとも。貴方の城へ潜り込んだとき、それに気付いた貴方は剣で、確実に我が輩の体を貫いた」

そこで言葉を止めて、星覇は己の腹部をトントンと叩く。そこに傷が残っているというジェスチャーだった。

「だがこの通り我が輩は生きている。フフ、何故かなあ——」

突然星覇の足下のコンクリートを突き破り、固まった土の針が飛び出たが、星覇は軽く跳ねてかわした。

「『フェリック・エッジ鋼鉄針刃』。質問してんのはこっちだ。質問で返すんじゃない」

一瞬で繰り出されたその魔法は、消滅するときもまた一瞬だった。

「実を言うと、我が輩もよく分からんだよ。気がついたら皇様がそこにいたのだ。」

我が輩は何も知らされてない……むしろ我が輩の方こそ知りたいぐらいなのだよ」

「皇様……か……」

帝はそう呟くと、身構えた。それに合わせて星覇も身構えた。

「だったら俺がもう一回あの世に送り返してやる」

「申し訳ないがその申し出は断らせてもらおう」

「まさか……本当にキョウスケさんが……」

帝の放った魔法を目にしたとき、桜は無意識のうちに呟いていた。

『フェリック・エッジ鋼鉄針刃』という魔法も『フレイム・インフェルノ火炎地獄』に並ぶ高レベルの魔法だ。

それを発動させることのできる人間は自分の知る限りでほんの数人。一瞬で繰り出せる人間はそこにはいない。

「おい桜！キョウスケはどうしちゃったんだ！？」

マオの声に桜はハツとなる。同時に自分達がどれだけ危険な状況に

置かれているのかを理解した。

「そうだ……早くここから離れないと!!」

マオの手を引いて帝と星覇から遠ざかる。訳が分からずにいるマオは桜に引きずられるように移動する。

———その直後、激震が辺りを襲った。

第十二話 暗雲

轟音や衝撃が連続的に辺りへ広がる。そしてそれらの中心には二つの人影があつた。

一人は細身の少年。もう一人は太り気味の男。度重なる轟音や衝撃波は、彼らによる物であつた。

「動きが鈍いな・・・手を抜くのは勝手だが、後悔する羽目になるぞ？」

男が動きを止めて挑発する。それに合わせるようにして少年も動きを止める。

「手を抜いたって意味はねえさ。抜こうが抜くまいが、テメエが死ぬのは変わんねえんだからよ」

少年も挑発して返すが、軽く息が切れている。口ではそう言っているが、手を抜いている訳ではなかった。

むしろ八割方は全力で戦っている。しかし戦っていくと、何故か徐々に体が思うように動かなくなっていく。

繰り返す魔法もキレが悪くなっていく。それどころか、発動するのにも普段以上に時間がかかるようになっていく。

帝はその原因を戦いながら模索していた。そしてその原因にたった今たどり着いた。

「————やっかいな副作用だな」

自然と口に出してしまっていた。

前世で最後に行った魔法『輪廻転生』リ・インカーネーション。

それは発動した瞬間、己の人生はそこで幕を閉じる。だが、記憶と魔力を次の生命へと移すことができる魔法だ。

記憶と魔力を受け継いだ生命は別の誰かの体へと乗り移り、やがて覚醒——つまり記憶と魔力が目覚めるのだ。『転生魔法』というやつである。

『転生魔法』は他にもいくつかあるが、その中で記憶と魔力を同時に次の生命へ移す魔法は『輪廻転生』リ・インカーネーションただ一つ。

ただし、『輪廻転生』は膨大な魔力を消費するため、発動できる人間は自然と限られてしまう。

覚醒した後も、覚醒の副作用でしばらく魔力がやや不安定な状態にある。

このままでは、自分より数段劣っている星覇に勝てるかどうかすら怪しかった。

「…………やるしかないか」

帝はまるで拝むかのように両手を合わせ、魔力を一点に集中する。しかし魔法を発動するまで相手は待ってくれなかった。

「このままやらせると思っかね————『衝撃波』シヨック・ウェイブ」

星覇から放たれた衝撃波は真っ直ぐ飛んできた。帝は両手を離さずに横へ跳ねて避ける。

そこへ向けてまた星覇が『衝撃波』シヨック・ウェイブを放つ。

次々と飛んでくる魔法をうまく避け続けていたが、両手を合わせた

ままの体勢では限界があつた。

やがて、また放たれた『衝撃波』ショック・ウェーブが帝の体を吹き飛ばした。それでも帝は集中を乱さず、辛うじて両手を離さずにいられた。

「おやおや、もう終わりか？」

勝ち誇った星覇の言葉を、意外にも帝は微笑で返した。

「ふん……終わんのはテメエの方だぜ星覇」

帝は合わせていた両手を開くと、そのままコンクリートの地面へと押し付けた。

すると両手から僅かに光が漏れてきた。その光は徐々に膨らんでいく。

星覇はそれが何かを一瞬で理解した。今帝が行おうとしているのは『召喚術』と呼ばれる魔法だった。

召喚術とはその名の通り、離れた場所や別の空間から様々な物や生物を呼び出すことができる。

しかし呼び出す物の質量が大きければ、それに比例して大きな魔力を消費する。

また、生物を呼び出す場合は少し特殊で、対象が小動物だとしても多大な魔力を必要とするのだ。

もちろん人間を呼び出すことも不可能ではないが、そこらの生物以上には多くの魔力を必要とするので、それを行える者はほとんどいない。

そして帝は、人間を召喚しようとしているのである。多大な魔力を消費して。

「そら！さっさと来い！」

一段と光の大きさが増した。星覇は耐えることができず、目をつむった。星覇が再び目を開いたとき、目の前にいるのは帝一人だけではなかった。

帝の傍らに召喚されたのは——人間だった。

きらびやかな白と青のメイド服。肩ほどにまで伸びた蒼い髪。そして前髪の下には可愛らしい大きな青の瞳。召喚されたのは可愛らしい少女だった。

「お————お久しぶりです帝様！」

彼女はサッと帝に頭を下げた。

「挨拶は後回しだ……頼むぞ葵」

第十二話 暗雲（後書き）

後書きに書くことはありません。

書かなくてもいいじゃん、と言う人もいるでしょうが、
自分になるべく書いていきたいなと思っております。

第十三話 切り札

「挨拶は後回しだ……頼むぞ葵」

「はい、帝様」

葵と呼ばれた美少女は静かに答えた。

「そんな小娘に何ができるというのかね？」

嘲笑する星覇に構わず、帝は指示を出した。

「アイツの魔法をしばらく防いでいてくれ。どうも魔法にキレがなくてな……ザコ相手に苦戦しちまってる」

葵は目の前に佇む星覇を睨む。整った顔立ちだが、その睨みは蛇も竦み上がりそうである。

「……やっぱり『オリジン』の……」

「————下っ端の下っ端、だ」

その息の合った会話に星覇は憤りを感じていた。

「誰が……ザコだと……下っ端の下っ端だと……
なめるなあ!!!」

星覇は憤怒に燃え、二人に襲いかかった。

「『衝撃波』!!!! 砕け散れっ!!!!」
ショック・ウェイブ

放たれた『衝撃波』ショック・ウェイブは十メートルはあろうかという巨大さだった。星覇がどれだけ怒り狂っているのかをそのまま表しているようだった。

しかし葵はそれに恐怖することなく、両手を地面に当てた。

「させません! 『氷河洪水』!!!!」
グレイシャル・カタクリズム

手の平と地面の境目から膨大な量の流水があふれ出す。その水の中に巨大な氷塊が混ざっていた。

その氷塊は星覇の魔法を相殺し、その流水はそのまま星覇を包み込む。

「ええい……こんなものっ!!」

全身から『衝撃波』ショック・ウェイブを発し、己を渦巻いている流水を弾く。

「まだまだです!!」

葵は再び『氷河洪水』グレイシャル・カタクリズムを放った。

しかし、同じ技が何度も通じる相手ではなかった。星覇は同じ魔法が来ることを予期し、空へ跳んでいた。

「バカめ!! 同じ手を何度も————っ!？」

星覇の目が大きく見開かれる。何時の間に移動していたのか、目の前には帝がいる。

帝は星覇を空で待ちかまえていたのだ。そして————彼の手には光があふれていた。

「バカなのはテメエの方だぜ星覇。葵の『氷河洪水』はお前を空へ誘き寄せるための布石なんだよ」

「誘き寄せるためだと!?!何のために!?!」

空中でうろたえる星覇に、帝はその答えを見せた。

「このためだよ!」

手の中の光が圧縮され、剣の形を形成した。
星覇の顔がみるみる青ざめていく。

「ラスト・リゾート切り札」————星覇っ!!二度と姿を見せるなっ!!」

全力で剣を振り下ろした。閃光が星覇を貫き、曇天の空を照らした。

閃光は一瞬で消滅し、空はまた暗雲に覆われる。帝はゆっくりと着地し、目の前に横たわる星覇を見下ろした。

星覇は半開きの口から舌をだらりと垂らし、目は限界まで見開かれていた。

しかし、星覇の体にはヒビが入っていた。その直後、ヒビは全身に広がり、星覇はまるでガラスのように砕け散っていった。

「……悪かったな、葵。つまらんことに呼び出してよ」

帝は傍らに立つ葵へ目を向けた。

「あああ！いいんですよいいんですよ！こんな私でも帝様のお役に立てるのならたとえ火の中水の中！

あ、でも熱いのは苦手なので火の中はちょっと……で、でも帝様がどうしてもって言うならマグマにだって—————！」

「そうか、なら後でいくつか頼みたいことがあるからな。そのつもりでいてくれ」

「いえ！マグマどころか太陽にも突っ込みますよ！
で、でも……せめて火傷したときくらいは優しく手当をしていただけたらなあ……なんて—————」

「さてと、桜とマオはどこへ行っただ？」

「ああもう葬ったら！帝様に手当してもらうだなんて、そんなの有り得ないじゃない……あ、

でもこんなに長くお仕えしているんだし、もしかしたらもしかして

—————」

言うまでもないが、帝には葬の話している夢想、というか妄想は聞こえていなかった。

第十三話 切り札（後書き）

最近何かと忙しくて更新がかなり遅いです。
でも読んでくれている皆様のためにも、頑張っていきたいと思いま
す。

第十四話 真夜中の幻想

「しんだ」

「……誰が？」

「セイハしんだ、しんだよ」

「やっと終わったのか……しかし、結構時間がかかったねえ？」

「ミカド、かくせいしたばかり、まけてもおかしくない。でも、アオイ、よんだ、よんだから、かった」

「フフ、勝ったのは帝だっていうのに、随分と嬉しそうだね」

「……ちがう、ちがう。ホウラン鳳藍、ミカド、きれい、だいきらい」

「……どのくらい？」

「だいきらい、とっても。でも、鳳藍、ねむい。もう、ねる。おやすみ」

「おやすみ」

キョウスケが目を覚ましたとき、既に日は沈み、外は暗闇に包まれていた。

グッスリと眠っていたようで、体は軽かった。しかし、体の節々に痛みを感じている。

理由は……考える必要もない。もう分かっていた。だがそれよりも気になることがある。

それは、今まで曖昧に残っていた記憶が、今ではハッキリとしていることだ。

自分は今朝、マオに呼ばれて桜と出会い、彼女に金槌で殴られた。

そして廃ビル地下にある牢屋に閉じこめられ、マオの魔法で脱出。廃ビルを出たところで星覇が現れ、衝撃で自分は吹き飛ばされ、気を失った。体の痛みはこれが原因である。

その後が問題だ。自分が————自分の体を使った帝という者が、魔法を駆使して星覇と戦った。

葵という少女を帝は召喚し、そして剣で星覇を貫いた……後は記憶に残っていない。

キョウスケはゆっくりと体を起こし、軽く腕を回す。案の定痛みは激しくなる。

ふと時計を見ると、たったいま十二時を過ぎた頃だ。

————そのとき、部屋に変化が起きた。ベッドや机が消滅し、部屋までもが消え去った。そして、新たな景色が浮かんた。

新たに生まれた景色、それはひどく殺風景な景色だった。

見渡す限りの全てが草原。他にあるといえば、一本の木だ。

緑の葉は生い茂っていない。だが、美しい桃色の花が咲き乱れている。————その木は桜の木だった。

この桜の木はとてつもない大木で、樹齢は想像を絶するだろう。キョウスケはしばし、その巨大な桜の木に見とれた。

何故自分がこんな所にいるのかという疑問は、いつの間になくなっていった。

しばらくすると、桜の木の向こうから誰かが歩み寄ってきた。それは自分と同じ顔をしている。

キョウスケは驚くことはなかった。落ち着いて、歩み寄ってきた彼にこう言った。

「あんた……帝だな？」

彼はにっこりと笑って頷いた。自分と同じ顔なのに、まるで別人のような微笑みだ。

「改めて自己紹介を……私は帝。

『こちら側の世界』とは別の次元に存在する世界『アルカディア』に生まれ、我が一族『マルクト』を統べる者です」

やはり自分と同じ声なのだが、彼にはどこか優しげな所がある。だが、何か違和感があった。

「まあ当然ながら帝、というのはあくまでもただの肩書きですがね」

彼の違和感に、キョウスケはようやく気付くことができた。

「話し方か！」

キョウスケの言っている意味が分からず、帝はキョトンとした。

第十四話 真夜中の幻想（後書き）

最近全然投稿しなくてすいません！
でもコッチはコッチで色々忙しいのです・・・。

第十五話 『マルクト』と『オリジン』

「話し方か！」

言っている意味が分からず、帝はキョトンとした。

「アンタ星覇と戦っていたときはもっと乱暴な口調じゃなかったか？」

キョウスケの指摘に、帝はああ、なるほどと呟いた。

「昔のクセでしてね……戦うときはいつもあんな口調になっ
てしまうのですよ」

「……直した方がいいんじゃないか？ ギャップがありすぎる
ぞ」

帝は少し寂しげな様子で俯いた。

「ええ、よく言われるんですよ……仲間や……一族の
みんなにね」

声はかすかに震えている。だがキョウスケはそれに気付かなかった。

「仲間や一族のみんな？ 今どこにいるんだよ、そいつら。『アルカ
ディア』にいるのか？」

その質問をした直後、帝の目には涙が溜まり、今にもこぼれ落ちそ
うになる。

「……彼らがどこにいるかなんて分かりません。そもそも生きていますかどうかすらね……」

「……どうのことだ？」

帝は涙を服の袖でぬぐい、気持ちを落ち着かせた。

「三十年前、『アルカディア』では大規模な戦争が起きていました。我が一族『マルクト』と『オリジン』との戦争が……。ですが『マルクト』は一族の長である帝を守護するため、そして各地の戦争による負傷者の保護のために動いています。

それに対して『オリジン』は禁じられている魔導兵器を造り出し、『アルカディア』を焼き尽くしました。

……犠牲になったのは『マルクト』の一族の者ばかりではありません。無関係な民達も多く殺されました。

やがて『マルクト』は壊滅し、私は戦争に敗北しました。

それでも私は最後まで望みを捨てず、私は生き残った同族達に命令しました。――『必ず生きろ』とね。

そして私は、転生魔法『輪廻転生』リ・インカーネーションであなたの体へ全てを移したのです」

「転生？」

「そうです。私もかれこれ五百年は生きております」

「……戦争の時、他の一族は助けられなかったのか？」

帝は僅かに視線を落とした。

「基本的には。協力を求めるとしたら、相手一族の出す要求を呑まなければなりません。」

しかし、無茶な要求をしてくる一族も多かったのです。

私も戦争時、信頼できるいくつかの一族に協力を要請しましたが、案の定断られたり、無茶な要求をされてきました。

おそらく『オリジン』の脅威が既に知れ渡っていたのでしょう。

……結局、『マルクト』のみで『オリジン』と戦うことになったのですよ」

「……無茶な要求ってどんな？」

顎に手を当て、視線を上げた。

「そうですね……協力を要請しているのはこちらなのに、人手をよこせという要求や、

そうそう、俺に邪眼を継がせろというのもありましたね」

キョウスケはピクリと方眉を上げた。

「邪眼を継がせる？」

キョウスケが気になったのは、継がせるということ。

もともと邪眼は彼の物ではなかったという可能性があるのだ。

どういう事だ、とキョウスケがその事を問うと、帝は困ったように唸った。

帝はそれから五分ほどうんうんと唸っていたが、やがて決心したように目線を合わせた。

「……誰にも言わないでくださいね？」

キヨウスケは分かった、と短く言った。帝はそれでは、と短く言った。

「とある昔話を交えてお話しますよ」

第十五話 『マルクト』と『オリジン』（後書き）

気合いで第十五話完成。次は昔話に入ります。

第十六話 殺人鬼と桜の木（前書き）

修正

紅葉から桜に変更。

第十六話 殺人鬼と桜の木

いまから三百年ほど昔の話です。『アルカディア』には恐ろしい殺人鬼が出没していました。

殺した人の数は千を超えと言われています。

捕まえようにもその殺人鬼は強力な魔法使いであったため、誰も手を出せませんでした。

有名な一族の末裔らしいのですが、彼は何度も転生を繰り返し、何度もその手を血に染めました。

ある日、殺人鬼はとある一族の強者達に襲われ深手を負いました。

それでも殺人鬼は彼らから逃げ切りすることに成功しました。

しかし殺人鬼は、傷を癒す魔法を使えないため、傷は徐々に悪化していき、とうとう殺人鬼は、大きな桜の木の下で倒れてしまいました。

意識が遠のき、傷の痛みが感じられなくなるほどに弱っていく。そんな彼を救ったのは、一人の少女でした。

彼女の名は『魅^ミ春^{ハル}』。彼女は『マルクト』の長で邪眼を持ち、帝と呼ばれていました。

『アルカディア』を支配していたのは『生命の樹』という十人の偉大な魔法使い達でした。

そして魅春は『生命の樹』の一人でした。

彼女はいつ死んでもおかしくない殺人鬼の傷を優しく癒し、彼を救いました。

恩を受けた殺人鬼は、彼女に己の全てを尽くすことを決めます。しかし、魅春はそれを受け入れませんでした。

『貴方は多くの人々の命を奪い、罪を犯し続けた。貴方は己の一族を汚し、この世界を恐怖に陥れた。

貴方にはやるべき事がある。貴方は生者達に己の罪を償わなければならない。貴方は死者達へ謝らなくてはいけない。

それが貴方のやるべき事です』

そう言うと彼女は風のように去っていきました。殺人鬼は頭を抱えて悩みました。

自分は傷つけることしかできない。他人を救うことなどできない。罪を償うにしても、生者は自分を恐れ、近づこうとしない。謝るにしても、死者と会うことなどできない。

殺人鬼は何日も桜の木の下で悩み続けました。

やがて殺人鬼は、一つの答えにたどり着きました。魅春は何が言いたかったのか、分かったのです。

己の罪を償い、死んだ者達に謝罪する。その方法とは、己の命を絶つことでした。

彼女は『死んで詫びろ』と言いたかったのだろう。そう殺人鬼は解りました。

罪を償うことができるのなら、己が殺した者達に謝ることができるのなら、

そして————彼女に受け入れられるのなら、殺人鬼は喜んで死

を選びました。

殺人鬼が自ら生涯を閉じようとしたその時、魅春は再び姿を現しました。

答えは間違っていたのです。魅春は殺人鬼に怒りました。

『自ら死ぬことは、己の責務を放棄すること。貴方はただ逃げようとしているだけ』

殺人鬼は言い返しました。少女が『生命の樹』の一人であることも忘れ、乱暴な口調で言いました。

『だったらどうすればいいっ！生者は俺を恐れる！死者はもう戻ってこない！』

どうすればいいんだっ！？どうしたら償える！？どうしたら謝れる！？どうしたら———』

殺人鬼は涙をこぼしました。大地に涙は吸い込まれていきました。涙は絶えることなく落ちていきました。

『どうしたら———あなたは俺を受け入れてくれますか———』

それから何日かした後、殺人鬼は魅春が長を務める一族『マルクト』に加わり、彼女の護衛となりました。

『マルクト』は戦争の負傷者達の保護と治療を行っていました。も

う数百年も続けているそうです。

殺人鬼と呼ばれていた彼は、癒しの魔法を使うことができないので、治療を行っている『マルクト』のみんなや民達を攻撃から護るように働きました。

『これが生者達への償いになり、死者達への謝罪になる』

魅春は負傷者の治療中、彼にそう言いました。しかし彼はみんなを護るのに真剣になっていて聞こえませんでした。

殺人鬼であつた青年が『マルクト』に加わってから百五十年ほど経った頃、突然魅春は謎の病に倒れました。

何日も高熱が続き、何度も吐血し、喋ることさえ困難になっていく。病を魔法で治そうにも原因が分からず、下手をすると悪化する可能性もあつたので何もできませんでした。

青年は己の無力さを呪いました。彼女の護衛である自分が何もできないのですから。

『マルクト』は転生魔法を用いて魅春を生き延びさせることを提案しましたが、何故か彼女は転生することに反対しました。

青年も必死に彼女を説得しましたが、魅春は決して首を縦に振りませんでした。

『これは運命。運命は絶対であり、逆らってはならない。そして抗うことさえも許されない』

魅春はひたすらその言葉を繰り返しました。

やがて、一族の者達は彼女の決意を受け入れることになりましたが、青年だけは意地でも反対しました。

青年は同じ言葉を繰り返す魅春にこう言いました。

『運命なんて存在しない————絶対なんて有り得ない!』

それからでした。魅春と青年の言い争いが始まったのは。

『私はもう十分に生きた!これ以上の未来は望んでいない!』

『未来は誰にでもあるものではありません!十分に生きていけない人間だっているのですよ!』

『それも運命だったのです!それを受け入れることができなかったならなりません!』

『運命なんて誰が決めたのです!?神ですか!?いるかどうかすら怪しい者の決めたことなんて受け入れなくてもいいのです!』

『だから————っ!』

『ですから————っ!』

青年と魅春の言い争いは丸一日続きました。魅春はまともに喋ることができないはずなのに、言い争っている間はまるで猛獣でした。今にも青年に噛みつきそうな勢いで怒鳴り散らしていて、夜明けが近づいた頃には青年も丁寧な言葉遣いを忘れていました。

『何度言ったら分かるのっ!分からず屋!』

『お前こそ俺の言うことにもちよつとは耳を傾けろ！朴念仁が！！』

『あー！もう君なんか知らない！』

『お前こそとつとと逝っちまえ！』

『ふん！』

『けっ！』

『．．．．．』

『．．．．．』

『．．．．．ねえ』

『．．．．．なんだよ』

『一つだけ聞かせて』

『ああ？』

『なんでそんなに反対するの？ボクがいないと不安なの？』

『そ、それは．．．．．』

『なにになに？不安なの？』

『．．．．．違う』

『不安なんですよ』

『違うっつってんだろ!』

『じゃあなに?もしかしてボクのが好きとか?』

『は!!???』

『好きなんだ?』

『・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・!』

青年はニヤニヤと笑う魅春から視線を外し、少し俯きました。

『・・・・・・・・悪いか』

『悪くはないんだけど・・・・・・・・なんだなんだ?かわいいところあるんだねえ』

『うるせ、病人。喋んな』

『実を言うとねえ、ボクも好きだよ』

『だからしゃべ————え?』

青年は目を丸くし、魅春はふふ、と微笑を浮かべました。しかし――

『いやー、こんなことならやっぱり転生しときゃ良かったかな。でも————ちよつと遅かったかな・・・・・・・・』

突然魅春はその場に倒れてしまいました。

——大丈夫、ボクがいるからね。ずっといつしよにいるからね……だから心配しないで

——ああ

——『マルクト』のみんなをお願いね。あんまり厳しくしたらダメだよ？

——分かった

——それから君も、ね

——……ああ

——邪眼はみんなに幸せを与える力なの。私欲に使ったら怒るからね

——……心配すぎ。ちよつとは俺を信用しろって

——あはは、ゴメンゴメン……それじゃあ、いつてくるね

——……気をつけてな

——……うん……バイバイ……

バイ
イ
バイ
イ

第十六話 殺人鬼と桜の木（後書き）

最近サボり気味ですがこの通り生きております。

第十七話 邪眼の後継者

「————お前が殺人鬼だった？……………すげえ極悪人だなオイ」

帝はお恥ずかしい、と肩を竦めた。

「『マルクト』の長は邪眼を受け継ぐ……………それってそんなに名誉なことなのか？」

「ええ。邪眼は特異な力を秘めていますので、それを欲しがる人は大勢いるでしょうね」

キョウスケは数回頷いた後、質問を続けた。

「今思っただけどき、魔法使いは年をとらないのか？」

「そんなことはございませんよ。魔法使いといっても所詮は人間ですから。みんな魔法で老衰を抑えているのです」

「次、星覇ってやつ、一度倒したんだろ？死者を生き返らせるような魔法もあるのか？」

「死体を操ることのできる一族はありますが、それでも魂までは宿りませんし、実を言うと、私もそれが気になっているのです」

「じゃあ『オリジン』ってヤツらの目的って何だ？」

「……………これは推測ですが、『生命の樹』は必ず十人で構成さ

れるようになっていきますので、
『マルクト』を潰し、新たに『生命の樹』へ加わろうとしているの
ではないかと」

「・・・・・・・・」

「もうよろしいですか？」

「・・・・・・・・おう」

そう返した直後、辺りの景色が光に包まれていった。

朝、眠い目をこすりながら起きたアイは、大きなあくびを一つ。

「あ・・・・・・・・今日は日曜日・・・・・・・・」

確認するように声を出した。アイはいつも通りにパジャマを着替え、
いつも通りに洗面所で顔を洗い、いつも通りに朝食の支度をしに台
所へ向かった。

しかし台所には、アイに残る眠気を全て吹き飛ばす光景があった。

—————エプロン姿のキョウスケが朝食をテーブルに並べている。

「・・・・・・・・おはよう」

いつもと変わらない挨拶のはずなのに、アイはポカーンと口を開け
たままだった。

「おい・・・・・・・・どうかしたのか？」

「ええ！？どうかしたのかって、お兄ちゃんの方こそどうしたの！？」

まるでこの世に存在しない物を見たかのような表情をしていた。
キョウスケは気にする様子もなく席に着いた。

「どうもしてねえよ……ほら、さっさと食べるぞ」

「う、うん……」

兄妹なのに変にギクシャクとした朝食。息苦しいことこの上ない。

——くそっ、何で俺が……

キョウスケは心の中で悪態を吐く。

——いつもアイさんに任せっきりで申し訳ないでしょう。
食後は皿洗い、その後は洗濯です

——まだやらせるんかいっ！しかも何でアンタじゃなくて俺
がっ！？

——そう言えば冷蔵庫の中もあまり食材がありませんでした
ね。午後からは買い物にも行きましよう

——聞け！それと代われ！……つかアイツ！葵とか
いったけ！？あいつに任せればいいじゃねえか！

――あ、今日は雨が降るんでしたね。洗濯は部屋干しにしましょう

――ちょ！おい、こら……お願いだから聞いて……

――おや？ いけませんよ。いくら辛いからって、泣き寝入りは絶対いけません

――泣いてないわ！ 殺すぞコラ！

――私が死ぬ時は、貴方も道連れです

――くっ……やればいいんだろ！ やればよ！

ブツブツと愚痴りながらもキョウスケは様々な家事をこなし続けた。

――おい、最後にもう一つ質問

――なんででしょう？

――アンタの本名ってなんだ？ 帝ってのが名前じゃないんだろ？

――ええ……私の名前は『龍夢^{リュム}』です。格好良いでしょう？

.....まあ、ちよつとはな

本音は？

自分で格好良いと言ってるところがウゼエ

あら

第十七話 邪眼の後継者（後書き）

さて、デウス・エクス・マキナもそろそろ投稿しないと・・・。

第十八話 落下

「だああああちくしょおおおおっ！！なんでこんなに降ってくるんだっ！！降水確率は三十パーセントだったのにっ！？」

日曜の午後、買い物に出かけたキョウスケを出迎えたのは雨だった。最初は小雨だった上に降水確率は低かったので、キョウスケはすぐにやむだろうと判断し、傘も持たずに出かけたのだった。

しかし小雨はやむどころか勢いを増し、バケツをひっくり返したような大雨に見舞われたのだ。

そして今、キョウスケは山の中をか駆け回っている。

キョウスケによると、目的のスーパーへは山を越した方が早く着くという話なのだが、

この天気での山中は薄暗く、地面もぬかるんでいるため、非常に危険である。

さらに、この山には結構切り立った崖も多いので、危険度は増すばかりだ。

「こらこら！余計な解説すんじゃないねえ！フラグが立つだろうが！」

——何言ってるのかよく分かりませんがキョウスケ、降水確率はあくまでも雨が降る確率ですよ？

——知っとるわ！！偉そうに言うな！！殺すぞコラ！！

——私が殺されれば——

——それはもう朝に聞いた！！

———では提案を。ここは一度家に帰るべきだと思います

———そんなことぐらい分かってる！！もういいから黙っててくれっ！！

———はいはい

龍夢は大人しく引き下がった。キョウスケはやれやれ、と呟き、右足を前に出した———しかし、そこには地面がなかった。

「え？」

で、そのまま崖の下へと落ちていった。

ちなみに後日、崖に気付いていたのか、というキョウスケの質問に龍夢は微笑を浮かべてこう答えた。

———ノーコメントで

崖は想像以上に深く、十メートルといったところ。しかし、キョウスケが擦り傷程度で済んだのは龍夢のおかげだった。

「……まあ………なんとなく嫌な予感してたんだけどな。あの変な解説があったときから」

腰を押さえながらゆっくりと立ち上がった。崖の下は竹が生い茂っ

ており、地面には落ち葉が積もっている。

——世話が焼けますね、まったく……『黙っててくれ』と威勢よく言った矢先にコレですから

キョウスケは自分が情けなくて何も言い返せなかった。

——念のために説明しておきますと、我々魔法使いは『思念』で物を動かしたり、相手に攻撃することができのです、物理的に

——それで落下速度を落としたのか……

——これは最も初歩的な魔法ですが、熟練した魔法使いならば大岩だって自在に操れますよ

説明した龍夢は自慢げに胸を張る。しかし、キョウスケの表情は曇るばかりだ。

——……龍夢……魔法が存在するって事は、呪いってのもあるのか？

——いいえ。ですが、呪術のような効果を及ぼす魔法はありますよ

——その魔法を使うのに何か道具はある？トカゲのしっぽとか魚の頭とか……

——必要ないですよ……まあ例外もありますが、特にはいりません

直後、キョウスケの顔が青ざめる。

——— どうしました？

——— 俺のクラスにミサキって女子がいるんだよ……オカルトマニアの

——— おかるとまにあ？ 『超常現象好き』のことですか？

——— そんな感じ。んで、そいつは怪しげな本とかに載っている呪いをよく試すんだよ……俺に

——— はあ。もしかして、崖に落ちたのはその呪いのせいと？ それはいくらなんでもあり得な———

——— あり得るんだよ。実際何度も不幸な目に遭ってきたんだから。ミサキの呪いで

——— ……何でそんなに自身満々なのです

——— まあそれより……どーすんだこの服。ケガはねえみてえだが、服とズボンは重傷だぞ？ 直せるんか？

——— 申し訳ありませんが、私はそのような類の魔法は……
・うん？

龍夢は竹林の中に何かの異変を感じ、言葉を途切れさせた。

——— どした？

体の支配権がキョウスケから龍夢へ移り、竹林の中へと歩いていく。

———おい、どうしたってんだよ？

龍霧は質問に答えず、その場に屈み込んだ。そして腕をゆっくりと前へ突き出す。

そのとき、キョウスケは訝しげに方眉を上げる。目の前には何も無い。しかし手には『何か』に触れた感覚がしたのだ。

———……ふむ。ここに『視覚障壁』が展開されており
ますね

『視覚障壁』とは文字通り、『それ』を視認できなくすることができ、結界の一種である。

この竹林の中から『視覚障壁』によって発せられる、かすかな違和感を龍霧は感じ取ったのだ。

龍夢は目をそっと閉じ、手先へ神経を集中させる。

すると目の前の景色がグニヤリと歪み、隠されていた『それ』が暴き出された。

その瞬間、キョウスケは絶句した。『それ』は、ピクリとも動かず、冷たくなっている。

隠されていた『それ』とは、龍夢に先程話したばかりの———ミサキだった。

第十八話 落下（後書き）

デウス・エクス・マキナ放置・・・いやいや、完結したわけではないので、
たまにはそちらにも目を通してやってください。

第十九話 悪寒

月曜日

天気は昨日とは打って変わって快晴になった。雨雲を全て使い切ってしまったかのように、雲はほとんど見あたらない。

兄妹はいつもの通り二人そろって登校し、アイは中学校へ、キヨウスケは高校へ。

キヨウスケは教室に入って数人の生徒と挨拶を交わした後、自分の席へ鞆を置き、教室内を見渡す。

教師のいない教室で、静かに席へ座っている生徒など一人もいない。机や窓に腰掛け、あるいは壁にもたれかかり、生徒同士で雑談を交わしている。

「よ、キヨウスケ」

ナオキが片手を上げてそう言った。隣にはユウイチが大きな欠伸を一つ。

「・・・・・・・・おう」

明るい直木とは対照的にキヨウスケの返事は暗い。それを見てユウイチが不思議そうに聞いた。

「どした？何か悩みでもあんのか」

彼にしては珍しく、少し優しげな声だった。

しかし、キョウスケが今抱えているのは、悩みではないことには気付いてくれなかった。

キョウスケは日曜日が続いて月曜日の今日、龍夢に朝早くから怒鳴り声で起こされた上に——アイも手伝ってくれたのだが——また朝食を作らされたのだ。

一昨日の土曜日には『オリジン』の一族の者と死闘を演じ、その翌日の日曜日には————

「どーせ女にでもフラれたんだろ……いや、やっぱりアイちゃんにまた怒られたんじゃないか？
だらないっ！ シャキツとしてっ！ ……ってな具合にさ」

とナオキが茶化す。心配していたユウイチまでもそうだな、と数回頷く。

「……うっせえ」

その時、ナオキがキョウスケの反応を見て、おや？ と首を傾げた。

「……変だな？ いつもだったらうっさい黙れって……ホントにどーしたんだお前？」

ナオキが心配するのもまた希有なことだ。だがキョウスケのテンションは相変わらず低空飛行を続けている。

日曜日の午後、崖の下での出来事が原因だった。

「葵、来なさい」

豪雨の中、そう龍夢がボソリと呟くと、何の前触れもなく目の前に葵が降ってきた。

ぬかるんでいる地面の上へ華麗に着地————のはずが着地で足を滑らせ、顔面から地面へ突っ込んだ。

「つつ……は、はい帝様！葵ただいま参上しました！」

全身が泥にまみれたまま、ピシッと背筋を伸ばす。新品同様だったメイド服も、一瞬で泥だらけだ。

———……どっから湧いてきたんだコイツ

———まあ細かいことは気にせずに

龍夢が適当に流し、目の前のミサキへ目を向ける。

「……彼女はもう亡くなっています……『イエソド』に処理を頼んでてください」

はい！と元気よく返事をし、自分の額に手の平を当てた。そして眠るかにようにそっと目を閉じた。

———何をするつもりなんだ？

———思念で会話を行うのです。

声にださなくても直接用件を伝えられる基本的な魔法ですが、使いこなせば遠く離れた人とも会話が可能になります

———じゃあ『イエソド』って何？

——魔法使いによる事件、事故、戦闘などの処理を行っている一族です
星覇との戦闘が誰にも見つからなかったのも、彼らがいるおかげなのです

——「……テロリストの変死体のことは普通にニュースで流れてたぞ

——魔法の存在が世間にばれない程度の事件、事故はあったらかしです。彼らも忙しいのでね

葵がパツと目を開け、龍夢へ顔を向けた。

「帝様、どうやら転落事故となるように偽装するそうです」

ご苦労様、とだけ言って帝は立ち上がった。

——偽装って、転落事故に見せかけるつつうことか？

——ええ、おそらくは。遺体を崖の近くまで移動させて転落したような痕跡を残す、それで転落事故のようになるでしょう

龍夢はしかし、と言葉を続けた。

——『視覚障壁』が展開されていたということは、彼女を殺害したのは魔法使いであるという可能性は十分にあります
……『オリジン』の者かどうかは、別にして

——「……」

番外編 始（前書き）

ちよつと区切りがついた感じなので、番外編を作ってみたり。
ちゃんと本編に関係のある話です。

番外編 始

「もう一度考え直してくださいっ!!」

張り詰めた空気の中を、若い少女の声が駆け抜ける。

薄暗い室内には十人の男女がそれぞれの席に座っている。

年齢はバラバラで、十歳にも満たないような少女もいれば、還暦を迎えているような老人もいる。

「落ち着かれてはどうか？ 君も少し頭を冷やせば、あの男の計画を理解できるはずだ」

それでも彼女は収まらなかった。

意地でも『あの男の計画』を止めなければ、一族も、魔法も、世界も——あの男に支配される。

皆はそれに気付かない、気付いてくれない、気付こうとしない。

——みんな・・・いったいどうしたの・・・？

楽しかった——少し前までは。

みんなで一晩中話し合った——どうすればこの世界は幸せで満たされるのかを。

それなのに、今のみんなはまるで傀儡人形だ。

「うつ・・・うつ・・・うつ・・・」

一筋の涙が頬を伝う。落ちる前にそっと拭った。

あの男の一言で、全てを崩されたような気がした。

『欲しくありませんか？全てを創り出す力を—————万物を生み出す力を—————「無」の力を—————』

男はそう言った。どこからともなくやってきたその男は、己の計画を『生命の樹』の魔法使い達に話した。

『この世の全ては「無」から始まったのです。大陸、大海、大空、生物、星、宇宙。

これら全ての起源を辿れば、自然と「無」へ繋がります。魔法も、例外ではありません。

つまり「無」とは、万物を生み出す永遠の力なのです。この「無」の力を利用しない手はありません』

最初は無関心だった者も、徐々に興味を持ち始めていき、耳を傾けるようになっていった。

しかし、男の話を信じるまでには誰も至らない。

男はその雰囲気を読み取ったように、ポケットへ手を入れる。

『先日、私はほんの僅かですが、手に入れることに成功しました—————その「無」の力をね』

男はポケットから石をつまみ上げ、高く持ち上げた。

大きさが親指程度の小石で、紅色に見えると思ったら藍色になり、かと思えば闇色に変わった。次々と変色している。

小石は広々とした室内を不思議な光で満たし、目にした者達を誘惑する。

『財産を全てつぎ込み、方々に手を尽くし……手に入れられたのはたったコレだけです。無論、私はこの程度で満足などしません。ですが、貴方達を信用させるには十分だと思います』

小石をポケットへ戻し、両手を広げた。

『「アルカディア」にはこの「石」がまだ眠っているはずです。それも、こんな小石のような大きさではない「石」が———そこで「生命の樹」の皆様にある提案があります。私にはもう他の「石」を探すほどの財産は残っておりません。ですが、「アルカディア」を支配するほどの力を持つ貴方達の協力があれば、「石」を見つけることなど容易いことだと思うのです』

そこで一旦言葉を切り、男は膝をつき、頭を垂れ、懇願する。

『「———どうか私に力を貸してください！」「石」が見つかった暁には、貴方達にも「石」を分けて差し上げます！この「石」さえあれば、貴方達一族の栄光は未来永劫となるのです！』

そう男は断言する。自信のみなぎったその言葉に、『生命の樹』の者達は何も返せなかった。

数分後、一番奥の椅子に座っていた老人が、ゆっくりと口を開ける。

『ワシはその「石」を信じるつもりはない』

冷たく言い放ったその一言に、男の顔が絶望に染まる。それでも男の信念は挫かれない。

『その「石」に秘められた力が、どれほどのモノかも分からぬというのに……』

男はならば、と声に出し、立ち上がった。

『————この「石」の力をお見せしましょう』

男は気がつくと、荒れ地が地平線の向こうまで広がっているような荒野にポツンと立っていた。

—————見せてみよ、その『石』の力を————『無』の力とやらをな

老人の声が聞こえたが、どこから喋っているのか分からない。脳に直接響いてきたように感じられた。

『皆様は既にご存じでしょうが————私は一切魔法が使えません。ただの人間です。ですがこの「石」の力を借りれば、私でもこれぐらいはできるのですよ』

こちらの声は届いているのか分からないが、念のために言った。男は『石』を高く掲げ、神経を研ぎ澄ませる。頭の中でイメージを描き、それを強く念じた。

直後、『石』から放たれる光が辺りを包み込むように広がり、空や地を埋め尽くしていく。

———ウソ……コレって何かの幻覚でしょ？

———馬鹿な。あんな小僧が『視覚幻想』サイト・イリュージョンなんて使えるか？いや、それ以前にコイツは魔法使いですらねえ……

———それは私も感じられるわ……ということは、『石』の力は本物ということかしらね？

———……ほんもの……わたし、しんじる。うん、しんじる

———私も認める———いや、認めざるを得ないな、これでは……

———俺も信じるね。『無』の力なのかはイマイチ分かんが、ただの石ところじゃねえことは確かみたいだし

———そうだな。しかし……これほどとは……な

光が消えた後、荒地には無数の花が咲き乱れ、緑が茂っていた。それも、地平線の彼方まで。

ほんの一瞬で、荒れ果てた荒野は無限の花畑へと変わっていた。目を疑うような光景なのだが、現に花は咲いている。誇らしげで美

しく、枯れることも散ることもないような――――そんな花が。

番外編 始（後書き）

もう一話続きます。

番外編 笑（前書き）

サブタイトル通り、みんな笑います。

番外編 笑

深い森の中へ身を隠すようにひっそりとうずくまっている古城。

黒に染まった空にはいくつもの光が輝き、その上満月まで浮かんでいるのだ。

誰もが目を奪われそうになるような空。しかし——少女の顔は悲しみと涙で満ちている。

少女がいるのは古城の屋根の上、それも一番高い塔のてっぺんだ。少しツタが覆っているその屋根に腰を下ろし、満月を憂鬱そうに眺めていた。

あの男は『原初の力』を求めている。『生命の樹』は男を援助し、自分達もその力を手に入れようとしている。

最初は誰も信じてはいなかったというのに、その力を見せつけられた途端、

彼らは目の色を変えた——それからだ、『生命の樹』があの男の操り人形になってしまったのは。

『何でそんなに反対するんだ？』

不意に声がしたが少女は驚くことなく、ゆっくりと首を後ろに向けてた。

いつのまにか自分と同じように屋根の上に座り込んでいる、柔和な微笑みを浮かべた青年。

『アンタほどじゃないが、俺だって国を治めてる。国王が力を求めるのは当然だと思うけどな……民のためにも一族のためにも少女は国を治めている。それも数千万人が暮らしている大帝國を。国を持たず、一族のみで生きる者達の方が圧倒的に多いが、国を治める一族も決して少なくはない。』

『あの男は私達を利用しようとしているだけだよ……それにあの力は、何か嫌な感じがする』

『直感なんかで決めるのかい？ そんなヤツが長じゃあかわいそうだ、民も一族も』

直感じゃないよ、と少女は小さく返す。

『よく分かんないけど……悲しいんだよ』

『自分がか？ 「生命の樹」がか？』

どっちともだよ、と少女は寂しく返す。

『みんなおかしいよ……』

いつもは世界のために、世の中のために、人々のために話し合っていたのに……

いまじゃ「石」のことばかり話してる……こんなの、「生命の樹」じゃ……』

また溢れてしまいそうな涙を堪えている。後の言葉が続かない。

『……………っ』

青年は言葉を失う。励まそうにも、『原初の力』を欲している自分が何を言えるだろうか。

それから何分、いや、何時間か過ぎた頃、青年は頭を掻きむしった。

『————だあああああ————っ!!!!もおいっ!!!!決めた!!!!決めたぞ俺あっ!!!!』

ゼーゼーと息を荒げる青年に対し、少女はただキョトンとするだけだった。

『……………すまんがもう一度言ってくれるかの』

朝日の差し込む廊下で、老人は目を細めた。

『ああ何度でも言ってやる…………俺は「原初の力」なんか知らないって言ったんだよ』

青年は僅かに微笑を浮かべて————しかし固い信念を込めて言葉を繰り返す。

『「原初の力」なんて俺の国にやあ必要ない。どっかの命知らずが攻めてきたときは、俺自身の力で国を守る…………!』

己の信念に基づいた結論を老人に叩き付けた。

老人はそうか、とも、好きにしろ、とも言わず、黙ってその場を立ち去った。

会議は太陽が最も高く上がった頃に行われた。

やはり全く日の当たらない部屋で行われたのだが、今回の会議は大きな波乱が訪れた。あの男が現れた前回のそれよりも大きな波乱が。

『————「マルクト」に続いて「コクマー」も抜けたか……
・ハッ！馬鹿にもほどがある』

髪を立てた若者が机に足を乗せ、そう吐き捨てた。

『フ……こんな好機を逃すなんて、愚かしいにもほどがある。
どれだけ偉大な族長であろうともね』

四角い眼鏡を押し上げ、見下すような視線を向けた。視線の先には二つの空いた席がある。

もはや『マルクト』と『コクマー』は『生命の樹』を抜けたと言ってもいい。

それでも大きな波乱と言えるのだが、本当の波乱はここからだった。

『申し訳ないけど————』

スッと立ち上がったのは、雪のように白い髪の女性だった。

女性のすぐとなり座っていた、漆黒の髪を後ろでまとめた少女も続くように立ち上がる。

『私達「ホド」と「ゲブラー」も抜けさせてもらおうわ』

辺りの空気が一変した。多くの者は目を見開き、他の者も驚きを隠せない様子だ。

『確かにあの力は素晴らしいわよ。でも使い道を誤れば、世界をかつて無い混乱に陥れてしまう』

『私達は今のままで十分よ。余計な力なんか頼らない』

言い切った後、彼女はグッと拳を固めた。

『よけいなちからじゃない、ない。いまのみんなにひつようなちからだよ、だよ』

十歳ほどの幼い少女が浮かべた冷笑は、まさに『氷』のような笑みだった。

だが黒髪の少女は、僅かに悲しみの混ざった表情で反論する。

『あの子に気付かされたのよ……「生命の樹」は力を求めるための集団ではないってことにね』

鉛のような重苦しい空気が漂う。そんな空気を振り払うように、さらに二人が立ち上がった。

『……「ネツアク」も抜けます』

と、小柄な少女が口を開く。

『私、「ケテル」も、抜けさせてもらう』

と、細身の青年が眠たそうな声を出す。

『————なんだとっ!?!』

眼鏡の青年が思わず声を漏らした。

立ち上がった四人は互いに視線を合わせて頷き、部屋を出て行った。
室内にいた八人の『生命の樹』は、僅か数分で四人まで減った。

『オイオイ・・・どうなってんだこりゃ。みいゝんなあの小娘
に共感でもしたのか?』

そこで老人が微笑を浮かべ、こう言った。

『では、こうすることにしようかの・・・「原初の力」がほし
い者は自由に求めよ。そうでない者は今まで通りに—————な。
それから—————「イエソド」も抜けることにするからの』

『えーっ!?!みんなも!?!』

驚愕をそのまま表したような声を出した。

『ああ、私達も抜けることにした。だが、意地でも「原初の力」を
追う輩もいるみたいだ』

『でもここにいるみんなは、貴方に賛同したって事よ。安心しなさ
い』

全員が柔らかな笑みを浮かべている。否、一人だけ涙を流していた。

『……みんなあ………ありがとう………』

『ちょ、ちよつと！なんで泣いてんのよ！嬉しいんでしょ？』

『いつも明るく笑っているのが貴方だ。泣いている姿など、私は見たくない』

『なにさり気なくキザなこと言ってんだ。うつとうしい』

『笑ってください！あなたはそれが一番なんですから！』

———これだ………これが『生命の樹』だ………

『お主の笑顔は全てを癒す。それを忘れるでないぞ』

『あ！じじい！俺が今言おうとしてた台詞をつ………つつーか！またさり気なくキメやがって！』

みんなで笑い合うこの光景こそ、少女が望んでいた全てだった。

『………だいぶ人数が減りましたね………まあ、いないよりはマシでしょう………』

声の弱々しさとは反対に、男は少しも落胆するような態度を見せない。

『いいからとつと教えろ。何から始めればいい』

『なんでもする、するよ』

『僕も、参加するからには協力を惜しみません』

男は微笑を————しかし、冷たい笑みを三人に向ける。

『まあそう慌てずに……焦らず、じっくりと行きましょう……
……ク……ク……』

男は彼らに背を向け、肩を振るわせる。

『ククク……クククククツ………!!!!』

第二十話 停止（前書き）

だいぶ遅くなりましたが、
とりあえず生きてますよ

追記

葵の服装をメイド服に変更。理由はこうです。

「葵はメイド服の方が似合うだろ。つーかそうしろ、人気も出るぞ、多分」

って知人に言われたからです。鵜呑みにした私は馬鹿ですか？

第二十話 停止

ミサキの遺体を発見したあの日曜日から二日が過ぎ、三日が過ぎ、四日が過ぎ——五日が過ぎた。

殺人者は見つからない。だが、不安がる者もない。その理由は簡単なことだ。

誰も気付いていないのだから————日常に忍び寄る殺人者の影を————

キョウスケ（主に龍夢）はあの『事故』の日から、紫野葉町内を探索し続けているものの、犯人の特定には至っていない。

『事故』のことを誰に聞いても、怪しい人など見ていない、知らないを返されている。

それは当然だった。ミサキはただの転落事故とされている————
——実際は魔法使いによる殺人なのだが。

さらにその日は嵐のような天候だったのだから、当たり前といえば当たり前である。

当然、ニュースでも流れることはなかったが、数日間、学校ではこの話題で持ちきりだった。

が、それも日が経つにつれ、その『事故』は誰も口にしなくなっていくた。

金曜日

学校はいつもと変わらない。ミサキの事を話題にする生徒もとつく

にいらなくなっていた。

そしてキョウスケは机に突っ伏している。

どうも連日の調査の疲労がそれなりに蓄積してきているらしい。

———まったくだらしがない……

———人の体さんざんこき使ってどの口が言ってるんだ

———一刻も早く犯人を捕まえないと危険でしょ？

貴方の身の回りの人間が狙われているのかも知れませんし

———はあ？なんで狙う———

「キョロオロスロケロ」

背後から肩をポンと叩かれた。

「ん、ナオキ……一人だけか？」

ナオキであることは声から推測できたが、ユウイチがいないことに疑問を抱いた。

「アイツは興味ねえってさ」

微笑を浮かべて答えた。

「ふう……ん？何に興味がねえって？」

あ口そうそう、と思い出したような素振りをわざとらしく見せた。

「放課後にな、他校の女子と遊ぶんだよ。だけどな、相手は三人いるんで、俺一人じゃ数が合わないんよ」

そこでだ、とキョウスケに指先を向けた。

「特別にお前も一緒に付き合わせてやろうって結論に行き着いたワケ。で、どうだ？無理に付き合わせるつもりはないぞ？」

「————ええ、是非ご一緒させてください」

さわやかな笑みを浮かべて返した————結果、ナオキの微笑と思考が停止した。

何とも言えぬ空気が二人の間に流れ、時間までもが停止した。

————オイ龍夢てめえ何勝手に答えてんだ！！

————何故ってキョウスケさん、貴方断ろうとしたじゃないですか。いけませんよ、友の誘いを断っては

————いやだっ！！ぜってーナオキだけはっ！！というかせめて口調ぐらい合わせとけ！！ナオキ固まってるだろうが！！

龍夢は訳が分からず首を傾げ、理由を尋ねると、キョウスケはこう答えた。

————アイツは結構モテるんでな。それを周りに自慢したいだけなんだよ

————貴方を気遣ったわけではない、と？

———そうだよ、つつーかそんな気遣いこっちから願い下げだ

———変わり者が多いですね、貴方の周りには

———楽しそーに言うんじゃない、放り出すぞボケ

一方的に会話を切った。

———とりあえず、誘いは断るからな

「———って、もういいーしいいいっ!!なんだよ!?!ギャグの基本かコレ!?!」

キョウスケの言ったとおり、既にナオキの姿はなかった。

———龍夢!まさかお前時間稼ぎのためにペラペラと!?!

———はは………ノーコメントで

———またソレかよ!気に入ったんか!?!

———ええ、気に入りました

———二度と使うなっ!!!!

不毛な口げんかはその後、数分間は続いた。

第二十一話 怪訝

皆様おはようございます、こんにちは、こんばんは、初めての人は初めまして————龍夢です。

三月に突入して一週間近くが過ぎ、だんだんと暖かくなってきましたね。

そして、今日も『イビル・アイ 邪眼再臨』を見てくださってありがとうございます。

今、キョウスケは親友（口では否定していましたが）のナオキ君に誘われ、他校の女生徒達と紫野葉町内を歩いています。

しかしキョウスケはどうも様子がおかしいのです。

普段から（妹のアイさんは別にして）あまり女性との付き合いのない彼には楽しむべき状況だと思うのですが、何故か先程からずっと顔をしかめているのです。

何が気に入らないのでしょうか？何が不満なのでしょう？

やはりミサキさんの死が、彼の心に重くのしかかっているのでしょうか？

もちろんキョウスケに問い詰めても、彼は私の問いかけに答えてはくれません。

己の中に溜め込むぐらいなら、私に相談してくれたって良いじゃないですか。

その暁には、私も全力でそれに応えて差し上げるというのに。

皆様は知っての通り、私はミサキさんと話し合ったことはありません。

ですが、学校の生徒達の会話を聞く限り、彼女は悪人だとは思えません。むしろ善人と言える女性だと私は感じました。

おそらくキョウスケとも（彼はやはり否定していましたが）仲が良かったのでしよう。

キョウスケは、怪しげな呪いを試されて迷惑していた、と語っていましたが、私にはこう考えられるのです。

——ミサキさんはキョウスケに好意を抱いていたのでは——と。

しかしミサキさんはその気持ちを本人に言葉で伝える勇気が無く、呪いの実験と称して彼と接し、この想いを伝えようとしていたのではないでしようか。

いやあ、まさに青春ではないですかっ！

勇気が無くとも必死にこの熱い思いを伝えようとする少女！

それに気付かず邪険に振る舞ってしまう鈍感でデリカシーのない馬鹿！

果たして少女の思いは届くのか！？果たして少年は少女の思いに気付くのかっ！？

うんうん、いいですね。これはなかなか良作になるのではないでしようか。どうですか作者（地獄天使）殿？

天使の試験だの機械仕掛けの神だの、中二病設定のベタな小説なんか止めて、コレを題材とした小説を書いてみてはいかがで

——長いわボケエエエエエエツ！！！！

——なに冒頭から1000字近くも使ってたんだ！俺の登場まで1000字前後も喋り通しやがってっ！

——何ですか過ぎたことを。そんな性格だと損をしますよ？

——つかお前、さっきさり気なく俺のことを馬鹿って読んだだろ

——何を仰いますか。私はしっかりとキョウスケと言いましたか？

——しかもこの小説を終わらせようとしただろ。いいのだった？俺達が消えちゃっても！

——良き作品を世間に送れるのなら、我々はそれに殉じなければっ

——うゝわ！言っちゃったよこの人っ！ああもう、いい加減本編に移るぞっ！

——なんだかんだで1200字も超えましたね

——やかましいわボケ

キョウスケとナオキ、そしてナオキが連れてきた三人の他校女生徒は放課後、紫野葉町を歩き回っていた。

田舎である紫野葉町にも、カラオケやデパートなどの施設は一通りそろっている。

そして彼らはそれらを思う存分に楽しんでた————キョウスケを除いて。

———まったく、どうせなら貴方も積極的に参加するべきですよ？

女生徒達はナオキにベタベタとくつつき、腕を引き合っている。そしてナオキもまた、なるべくさわやかな微笑を女生徒達に向けている。

キョウスケは既に蚊帳の外だ。あの輪に入る隙はない。というか、自分で遠ざかっているようにも見える。

———お前が勝手に返事したくせに

———また過ぎたことを……いつまでも根に持っていたら、体にも悪影響を及ぼしますよ？

誰のせいだよ、と龍夢を睨む。

———それよりマオはどこへ行ったんだよ。『あの時』から全然姿を見かけてねえし、学校にも来ねえし……お前知ってるんだろ？

———マオさんは目覚めた魔力を制御する術を身につけさせるために、私の信頼できる一族の元で修行させています

———学校にも行かせずにか？

———大丈夫ですよ。元々彼は優秀な生徒だったらしいじゃないですか。キョウスケも彼を見習いなさい

———じゃあ桜は……殺したのか……？

———まさか。彼女はもう『オリジン』を抜けた身です。というより、もともと桜さんは自分から『オリジン』に加わったわけではないようです

———じゃあ何で『オリジン』に？

———それは本人に訊きましょう。桜さんはマオと同行させてい……い……い……

途中で言葉を切った龍夢の目が鋭く光る。神経を研ぎ澄ませ、辺りの気配を探る。

———おい、どした？

キョウスケには龍夢が何をしているのかが分からない。キョロキョロと辺りを見回しても、どこも不自然なところはない。

———このまま真っ直ぐ行った先には何がありますか？

———え、とな……公園があるぞ。もうすっかり寂れるから、誰も居ないと思うけどな

龍夢の不意打ちに思わず動転してしまった。

———そこですかっ！

急に怒鳴ったかと思うと、いつの間にか体の主導権が交代していた。

第二十一話 怪訝（後書き）

キヨウスケは良いキャラをしていると思う

第二十二話 流槍の罠（前書き）

召喚術について

召喚された物質や生物は、召喚者が送還しない限り、その世界に留まることが出来ます。

修正

風葉の武器を変更。

第二十二話 流槍の罠

『みんな集まってー！新しい家族を紹介するよー！』

若い女性の声が辺りを駆ける。少女の傍らには緊張した面持ちの青年が、どこかそわそわと落ち着かない様子で直立している。

少女の声はそれほど大きいわけではなかったというのに、部屋が埋め尽くされてしまいそうなほどの人が一瞬で部屋に集まってきた。

青年は集まってきた人々を見て、より顔を強ばらせた。落ち着いて、という少女の囁きもまるで聞こえていない。

当然の事だ。集まった人々は皆、強大な威圧感を青年に向けて放っているのだから。

『ん！みんな集まったね！それじゃあ紹介するよ！』

少女はあくまでも、この鉄のような重苦しい空気を気にしないらしい。

『彼が、新しくボクらの家族に加わる「龍夢」君！みんな仲よくしてあげてね！』

紹介された青年は頭を下げる。するといつの間に近づいてきたのか、一人の無精髭を生やした男が青年の顔を持ち上げる。

『そう堅苦しくなるなよ龍夢君。お前はもう俺達の家族なんだからなあ』

馴れ馴れしく肩を組んでくるその男は、酒にでも酔っているように見える。

『よろしくお願ひします龍夢さん。このおじさんは気にしなくて良いですからね』

今度は皆を呼び集めた彼女と同じ年ぐらいの少女が、気さくに、そして丁寧な声をかける。

『ああん？そいつあど〜ゆ〜意味かな？「おじさん」に教えてくれよお』

二人はお互いの眼光をぶつけ合い、バチバチと火花を散らす。

周囲の人々は二人の小競り合いに笑い、少女は二人を笑顔の鉄拳制裁でなだめる。

あの威圧感や重苦しい空気は、青年が気付いたときにはもう消えていた。

『みんな——————よろしく』

青年の眩きは誰にも聞こえなかったが、今の彼はそれで満足していた。

—————んで、公園に何があるんだ？…………お前の知り合いか？

キョウスケの当てずっぽうな質問に、龍夢は意外な反応を見せた。

—————…………いささか

独り言のような小ささ、そして喉の奥から振り絞ったような苦渋に満ちた声。

どうやら個人的な因縁があるらしいな、とキョウスケは推測する。

キョウスケの思った通り、公園はやはり相変わらずだった。前に見たときよりも人が少ない、というか、もはや誰も居ない。

遊具もいくつか無くなっていて、これでは『遊具の少ない公園』と呼ぶより、『ただの広場』と言った方が似合っている。

———おいおい、シリアスモードで来たのは良いけどさ、誰も

「———『フヨウ風葉』 ツー!! 私を侮っているのですか!!」

龍夢の突然の一喝に、思わず震え上がった。

———ちょ……どうした龍夢？

———うるさいです。黙ってください

———ハイ……

龍夢は注意深く辺りを見回し、やがて視線は錆び付いた滑り台で止まる。

『そこ』にいと確信した龍夢は、右腕を持ち上げる。

右目が黒に染まり、そして右手から白い光が溢れ、龍夢はその手を横に薙ぎ払う。

「—————」
『致死爪牙』
「—————」

フェイタル・フアング

空を切り裂いた右手から光る五つの爪牙が撃ち出される。

キョウスケにはガリガリと音を立てて地面をえぐる音が、たまらないほどうるさい。

そして状況を理解できていないのが、キョウスケの現状だった。

「—————このままでは滑り台は木っ端微塵に碎け散る—————」
「—————この世に一片の欠片すら残さず消滅しかねない

なんて、のんきな想像を膨らましているのだ。

さて滑り台は一体どうなるのかな盛大にぶっ飛ぶのかな、という予想は—————外れることになる。

龍夢の放った魔法は滑り台の目の前で弾け、そのまま消滅したのだ。

「さっさと出てこいよ……………ビビッてんのか！風葉ッ！！」

龍夢はまだ姿を現さない風葉というヤツに憤激する。しかしその挑発に乗ったのか、滑り台の陰から何者かが姿を見せた。

「ハハッ……………誰がビビッてるだって？」

現れたのは白衣に身を包み、四角い眼鏡をかけた、二十歳ほどの男—————例えるなら医者か科学者だ。

だが皮肉に満ちた微笑と笑声のせいかな、どうもヤブ医者かマッドサイエンティストにしか見えない。

「『ビビッてんのか』なんて、クハハハハハッ……………君以上の臆病者はそうはいないよ……………？

なんせ、幾度も転生して逃げ延びてきたんだからね、君は」

どうやら龍夢の過去についてそれなりに知っているようだった。
風葉は腕を組んで滑り台にもたれかかる。その姿勢が、彼に対する
キョウスケのイメージをより悪化させる。
龍夢の様子から推測するに――――

――――コイツ悪人？

――――ああ、オリジンの一人だよ

――――やっぱりな……しかもお互いに顔見知りといった
ところか

――――顔見知りどころじゃねえよ。風葉は……

風葉の声がその先を遮った。

「さて、僕はただ挨拶に来たワケじゃない、ってことぐらい分かる
よね？」

さつきから同じ姿勢と微笑を保ち続けているが、一つ違うのは、手
には光が集まっていることだ。

この魔法は――――キョウスケも知っている。

光は徐々に形を変貌させ――――植物を連想させる装飾が施され
ている、そして刃から淡い緑の光を放つ槍と成った。

「『切り札』――――『流槍ゲイ・ボルグ』」
ラスト・リゾート

風葉は滑り台から離れ、槍を両手で持ち構える。

———アイツも『切り札』ラスト・リゾートを使えるのかよっ！？

———俺だけの魔法じゃないから当たり前なんだけどな

少し呆れ気味の返事をしたとき、風葉が思い出したように眼を細めた。

「そういえば貴方には自己紹介がまだでしたね……」

貴方とは、キョウスケのことだ。既に知れ渡っているらしい。

「僕の名は『風葉』。龍夢と同じ『マルクト』の一族の者です。
……と言ってもまあ、今は『オリジン』の一族に加わっているのがね……以後、お見知りおきを」

丁寧な言葉遣いだが、やはりキョウスケのイメージは覆らない。

「———以後？馬鹿言うな。お前はここで、俺が消す！来い葵！」

その声をどこから聞きつけたのか、また唐突に葵が龍夢の側へ降ってきた。この登場にも、そろそろ慣れたいキョウスケである。

葵は風葉がいるせいか、前回よりも慎重に着地した。が———着地した瞬間、地面にヒビが入った。

「———罨！！？葵逃げ———！！！」

龍夢は、それが風葉の仕掛けた罨と一瞬で見抜いたが、無惨にも――
――その龍夢の叫びが葵に届くことはなかった。

第二十二話 流槍の罠（後書き）

緊張感のないキョウスケを見捨てないでやってください。

第二十三話 想い（前書き）

かなり気合い入れました。

それと同じくらい、書いていてちよつと恥ずかしかった。でも、書いていて楽しかった。

少しでも心が温まったり、燃えたりしたら、幸いです。

そして、哀れなキョウスケに魂の救済を……

第二十三話 想い

何が起こったのか、理解できなかった。

龍夢に呼ばれて跳躍し、慎重に着地して戦闘態勢に入った。

直後、微かに地面が揺れたかと思ったら、龍夢が何かを叫んだ。

その言葉を聞き取る前に、強い衝撃を受け、弾き飛ばされた。鈍器で殴られたかのような激痛に、たまらず目をつぶった。

なんとか痛みを堪え、ゆっくりと目を開けると――――

「ぐ・・・・・・・・・・・・・・・・うう・・・・・・・・!!」

龍夢は歯を食いしばり、

「え・・・・・・・・え？」

自分は目に映る光景に呆然とし、

「思った通り・・・・・・・・」

風葉は冷笑を浮かべている。

状況を理解できていない葵は、ただ辺りを凝視するしかなかった。

龍夢の身体には茨が絡みついて、自由を奪っている。

棘が身体に至る所に食い込み、焼けただれるような激痛を与えている。

頭から、腕から、脚から――――血があふれ出している。

「そう。罨を君に仕掛けても見破られてしまう可能性は高い……
・だから葵に仕掛けたのさ」

「……葵が受けるはずだった罨を、俺が受けちまったってことかよ……くそっ！」

風葉はその言葉を待っていたかのように、首を軽く横へ振る。

「いやいや、残念ながらそれは違うんだよ……この状況こそが僕の狙いなんだよ？」

龍夢はそれだけで彼の真意を悟った。途端に茨の苦痛よりもはるかに耐え難い後悔の念が、彼を襲う。

「俺を罨にかけるために、葵へ仕掛けた……!？」

驚愕の表情を見て、うんうんと満足そうに頷く風葉が憎たらしい。しかし——ここまで耐えてきた龍夢の根性もついに崩れ始めた。

「くうっ……葵っ」

「——は、はい」

あなんとか龍夢は声を絞り出した。まだ葵は呆然としていたが、彼の一声で上半身だけ起き上がった。

龍夢は茨を巻き付けたまま、全身を引きずるようにして葵の目の前まで移動する。

「悪いが．．．．俺は、戦えねえ．．．．」

「あ．．．．う」

主人の消え入りそうな声から逃げるように、従者は俯いてしまった。
こんな弱々しい声は葵も滅多に聞かないのだ。

どれだけ龍夢は弱っているのかが、直接耳に響いてくるのはこの上なく苦しかった。

「だか、ら．．．．風葉、は、お前が．．．．」

息を大きく吸い込み――――

「お前が倒せっ！！！！」

やっとの思いで言葉を伝えたが、それが身体に響き、龍夢は大きく咳き込んだ。

血を多量に含んだ唾液がボタボタと垂れ落ちる。龍夢の足下には大きな血溜まりが出来ていた。

「帝様っ！！！！」

すぐさま治療を行おうとしたが、龍夢は彼女の肩に手を伸ばし、それを止めた。

「今は．．．．お前、が戦うしか、ねえんだっ．．．．」

「む、無理ですっ！私では．．．．とても．．．．無理ですう．．．．」

目から涙がこぼれた。理由は自分にも分からない。悲しいのか、悔しいのか、それとも別の理由か。

「わ、わ、わた、しなんかじゃ、絶対に、絶対にい……うつ、うう……」

溢れる涙を拭おうともしない。ただ首を横へ振るしか出来ない。

私は、どうすればいいのだろう。

龍夢と初めて出会ったときのことは、今でも鮮明に覚えている。

その頃の自分の主人は魅春で、彼女から新しく一族に加わる龍夢のことを聞かされた。

『みんなにはナイショにしてるんだけど……龍夢はね、なんと！今世間を騒がしている、あの大殺人鬼なのだよっ！』

まるで自分が自慢しているような物言いに苦笑を返したが、内心ではかなり驚愕していた。

主人と一緒に顔を合わせときは、彼が主人に危害を加えないか、気が気ではなかった。

『葵さん————よろしくお願いします』

しかし、いざ相對してみると拍子抜けした。確かに魔力や雰囲気は、常人離れしたところがある。

でも、彼はとにかく優しくかった。早くみんなに馴染みたい、という

魂胆が丸見えなのが可笑しかった。

でもどこか子供っぽくて可愛いんだよねえ、と以前魅春は言っていたが、自分も同感、頷けた。

今では少し、意地悪なところが出てきたが……。

そうして一緒に過ごしていく内に、いつの間にか私は彼のことが好きになっていった。

彼もいつか、この想いに気付いてくれるかな、なんて期待していたのは秘密だ。

当然、主人である魅春にも、この気持ちは内緒にしていた。

葵にとって龍夢は、自分自身の命よりも重く、そして他のどんなモノよりも大切であった。

主従の関係だからではなく、純粹に、心から、彼のことが、好きだから。

彼を失うことは、自分自身の死以上に辛く、そして他のどんなコトよりも恐ろしいのだ。

彼が消えることが、怖い。彼と一緒に、ここから逃げたい。彼と共に、いつまでも生き続けたい。彼の側に————ずっといたい。

たとえ終わりがあつたとしても、今ここでなんて嫌だ。嫌だ。嫌だ

「葵————」

恐怖に身体を震わせている葵の頭に、血で赤く染まった右手を乗せた。そのまま優しくなでる。

「————大丈夫だ。お前は強い。自分で思ってるよりも、ずっと強い」

いつの間にか辺りは、公園がなくなっている。真っ白だ。何も無い。陸も空も、白一色。葵と、龍夢しかない。私と、彼だけの世界。

「み……帝、様？」

気が動転し、何をされているのか理解できていないようだ。龍夢はそれを気にせず、頭に乗せた右手をそのまま頬へ移した。屈み込んで、視線を合わせる。

「俺なんかいなくても、アイツなんかお前一人で倒せる」

倒せる？本当に？

「ほ、本当……ですか……？」

まだ葵は決心できない。脳内に浮かんだ疑問をそのまま口にした。

「馬鹿、俺がウソなんてつくと思うか？」

そんなの思わない。

「俺の言葉が信じられないか？」

そんなことない。

「大丈夫だ」

大丈夫。

「お前なら出来る」

私なら出来る。

「私なら出来る」

「そう、お前なら」

そうだ、私なら。

「うん、私なら」

「「「「「出来る！」」」」」

龍夢は満足そうに微笑んだ。こんな優しい微笑みは葵も見たことが無い。そして龍夢は——糸が切れた人形のように倒れた。

「「「「「よしっ!! 何もかも計算通りだっ!!」」」」」

龍夢が気を失ったことを確認した風葉はガッツポーズをとり、子供のようにはしゃいだ。

計画がうまくいったことが、それだけ嬉しいのだろう。龍夢達の声も、まるで聞こえていなかった。

「さて、あとはのんびりとトドメを刺して……いやまてよ？ このまま殺すには惜しい……」

顎に手を当て、様々な用途を思案する。

「ふむ……では、僕の実験サンプルにするでしょう」

用途が決まり、ゲイ・ボルグを地面に突き立てる。すると彼の足下から無数の茨が現れた。

「まずは龍夢^{サンプル}を運ばなくては……」

命令を受けた茨は龍夢へ勢いよく伸びていく。しかし、茨は龍夢へ届くことはなかった。

その光景に風葉は思わずおや、と不思議そうな声を漏らした。

目標に触れなかった瞬間、どういうワケか茨が凍り付いて動きを止めたのだ。

「—————させません……！」

「うん？」

訝しげに首を傾げた。

龍夢が倒れた時点で—————罨にかかった時点で、その従者である葵など既に眼中にない。

所詮葵は龍夢に罾をかけるための餌なのだから。だが、今の彼女を見てそれを改めた。

「帝様に……いえ、私の主に……いいえ————私
の龍夢に!!手は出させない!!!!」

彼女から醸し出される空気が変わった。風も吹いていないのに、彼女の蒼い髪やメイド服の裾が大きくなびいている。

肌がピリピリと痛い。眼鏡にヒビが入った。彼女が声を出すたびに、自分の四肢が千切れるような感覚に襲われる。

どうやら自分は、彼女の気迫に恐怖しているらしい。

———違う

即座に否定した。

———この僕が、たいした魔力もない小娘に、恐怖なんて———

「風葉っ!!!!」

その小娘に名を呼ばれたとき、全身の骨が軋んだ。

「お前は……私が倒す!!!!」

葵の想いが爆発した。

第二十四話 月下美人（前書き）

イビル・アイには名字が出てきません。

なぜなら、登場キャラがかなりの数になるからです。

自分の脳ではこれ以上思いつかなくなりそうなほどに。

まあ最初は名字も考えておりましたがね・・・。

キョウスケとアイの名字は緋月^{ひつき}にするつもりでした。

第二十四話 月下美人

「・・・・・・・・・・はあゝあゝ」

やけに長いため息を吐いた。

「一体何なんだ？」

帰路の途中、ナオキは答えが出ることのない自問をひたすら繰り返して、苦悩していた。

原因は――――キヨウスケだ。

『――――命が惜しければ、このまま家へ帰りなさい』

――――なんだそれ？家に帰らなかったら俺は死ぬのか？

キヨウスケに忠告された後、変に気分が重くなった。一緒に遊んでいた他校の女生徒達とも別れ、そのまますぐ帰宅することにした。でも、まだキヨウスケが脳裏に引っかかっている。様子はおかしかつたし、口調も変わっていたし、まるで別人のようではないか。

――――二重人格ってヤツ？つか、アイツそんなのがあったんか？・・・・・・・・分かん

「・・・・・・・・分かん」

意味もなく口に出す。

「何があっただんだ？キョウスケのヤツ」

答えは出ない。

「————キョウスケのヤツ？」

別の声はした。

「————ん？」

一度立ち止まった。しかし空耳に近い感覚だったので、気のせいだと自分を思いこませ、声はスルーする。
そしてナオキは再び歩き出す————

自然が豊富なこの紫野葉町には、高層ビルはもちろん、工場らしい工場もまるでない。
大規模な工事もほとんど無いし、事故や事件なんて滅多に起こらない。

なので、年中のどこかで静かな町なのだ。騒がしい所なんて無い——
——今のある一カ所を除いて、の話だが。
そのある一カ所とは、公園である。

いつもは人気のない公園なのだが、今は何故か蒼い光が縦横無尽に園内を駆け回り、時々轟音と振動が辺りに響いているのだ。
公園周辺の住人達は、それをまったく気にしていない————それにとにかく気付いていない。

———また、轟音が大地を揺るがした。

「くそっ!!」

砂煙が立ちこめている中、風葉は苛立ちをはき出した。槍を地面に突き刺し、それを支えにしてなんとか立ち続けている。

「ええい……あと少し……あと少しのところであつ——
——!!」

「———『白雪飛礫』」
スノウ・グラベル

また氷で形成された飛礫が自分を目がけて飛んできた。

舌打ちをして即座に槍を抜き、飛礫を薙ぎ払う。砕けた粒が夕日に反射して煌めいた。

もしここに通行人でもいれば、その人はこの幻想的な光景に見とれるかも知れない。

しかし、風葉はそんなことに気を払っている余裕など無かった。

「———っっ!!!」

突然足に強烈な痺れが走った。足下を確認すると、何が起ったか理解した。

足が膝の辺りまで凍結しているのだ。

冷たさは全く感じられない。完全に足感覚が麻痺してしまったのである。

飛礫の飛来の際は、足の凍結。まるで予測がつかない。

そして、完全に計算違いだ。龍夢を倒してしまえば、それで終わり

のはずだった。

葵の姿は見えない。しかし園内には、風葉へ狙いを定めた殺気が絶えることなく渦巻いている。

「たかが従者の分際で……この僕に……!!!!」

風葉は己の立てた計画が妨げられるのを最も嫌っている。

そして今、己の計画は現在進行形で崩されている。

「そんなにあの男が愛しいかつ!!!!あの殺人者が!!!!そんなにも愛しいかつ!!!!」

目を血走らせ、凍り付いた足を乱暴に引き抜いた。

「僕は全部知ってるんだよ!!!!龍夢があのだ殺人鬼だってことも!!!!それを皆に隠して『マルクト』に加わったこともなあっ!!!!」

葵は姿を現さない。しかし、耳が弾けるような咆哮だ。聞こえていないはずがない。

「なにが帝様だっ!!!!ただの汚らわしい殺人鬼じゃないか!!!!民を護れなかった弱者じゃないか!!!!自分だけ逃げた臆病者じゃないか!!!!」

公園を覆い尽くしていた魔力が、園内を渦巻いていた魔力がピタリと動きを止めた。

風葉は気付いていない。

「『マルクト』の長だと!!!!???いや違うな!!!!!!アイツは所詮ただの余所者——!!!!」

直後、眼前に光が迫って来た。自分を目掛けて真っ直ぐ飛んできたというのに、対応できないほど速い。

ひっ、と風葉の短い悲鳴が漏れた。光は己の胸を貫き――――

「っ……あ！?!?!?!?」

――――そこから葵の心が流れ込んできた。

最初に感じ取れたのは、己の敬愛する主を侮辱した事に対する『憤怒』。

次に感じ取れたのが、同族であつた風葉が寝返つた事に対する『悲嘆』。

最後に、怒りの感情に隠れるように流れ込んできたのが――――龍夢への、深く、純粋な『愛情』。

ほんの一瞬だけ、葵の姿が目映った。

「私の、とっておきです――――」

全身に悪寒が走る。何かが、とてつもない巨大な何かが、目の前で生み出される。

「――――」
クイーン・オブ・ザ・ナイト
『月下美人』

それは蒼い光。

日光のような鋭い光ではない。

それは柔らかな月光。

月光が、全てを覆い尽くす――

第二十五話 愛しき人よ（前書き）

調子に乗って良いですか？

第二十五話 愛しき人よ

公園には、巨大なクレーターが出来上がっていた。葵の放った魔法の巻き添えを食らい、大きく地面がえぐられたのである。そして、風葉の姿はどこにもない。

「やった・・・・・・・・」

葵は思わず拳を握りしめていた。

「私が・・・・・・・・私が一人で・・・・・・・・！」

目を閉じ、深呼吸を繰り返して気持ちを落ち着かせようとするが、興奮はなかなか収まらない。

自覚はないが、それだけこの戦いに勝利したことが嬉しいのだろう。

「私だけで風葉を・・・・・・・・帝様がいなくても、私は—————あ」

勝利の余韻に浸っている場合ではないことを、今更気付いた。

己の御主人が血まみれで気を失ったままだであることを、思い出したのだ。

直後、興奮で騒いでいた脳は一瞬で停止し、顔は蒼白になる。

「あ・・・・・・・・あああああああ！！！！申し訳ありません帝様あーっ！！！！」

公園の隅に俯せて倒れている龍夢の元へダッシュで向かう。戦闘中、魔法が龍夢に当たらないように細心の注意を払ってはいたが、それだけだ。

ストレートに言えば、ほったらかしていたということである。

——え、ええっと！まずは身体に巻き付いている茨を解いてっ、全身の傷を治してっ、それからそれからそれからっ

走りながら全力で思考を回転させ、最善の処置を選び出しつつ——

「きゃあっ！」

——派手に転倒した。

ああもうばかなにしてるの私、と自分を叱咤したその時——自分の足に絡みついているそれが目に映った。

「……茨……なんで!？」

風葉は確かに倒したはず、という疑問は自分で否定した。

その瞬間を見ていないのになぜ、確かに倒した、なんて決めつけられるのだろう。

風葉は——まだ生きている。

しかし、『月下美人』は命中したはずだ。クイーン・オブ・ザ・ナイト手応えもハッキリと感じられたのに。

いや、今はそれを考えている場合ではない。

「くっ！」

素手で茨を掴み、無理矢理引きちぎった。当然棘が手の平に食い込んだが、この程度の痛みぐらい我慢できる。

それよりどこかに隠れている風葉を見つけ出さなければ、と思った

その矢先、風葉が自ら姿を現した。

それも、あのクレーターの中央から、あの大穴の地中から、ズルリ
と這い出てきたのだ。

「風葉！そんなところに隠れて——え……あ……
ああっ！！！？？」

葵から驚愕の声が漏れた。

クレーターから全身を引きずるようにして出てきた風葉の身体には――――穴が。

左手は人差し指と親指だけが残り、ゲイ・ボルグをつまむようにして持っている。

右腕は肩の辺りから先が無い。右足も太ももまでしか残っていない。そして、へその辺りにサッカーボールほどの穴が開いている。

龍夢のように、至る所から血が吹き出ている。

葵はその姿をこの目で見てゐるのに、動いてゐるのが――――生きてゐるのが信じられなかった。

風葉はクレーターのふちで動きを止め、上半身を持ち上げた。大きく開かれた彼の目は、確実に葵へ向けられている。

「がっ」

血の混じった低い呻き声。その声に葵はビクリと身をすくませる。

「―――があ あああああ ああ ああ ああ ああ ああ
あ あ っつ！！！！！！」

ビリビリと肌で感じられるほどの叫喚。口内に溜まった血が吹き出す。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝつ!!!」 あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

まるで地獄から響いてくるような叫喚。葵の心の底から恐怖が湧いてくる。

さつきまで快晴だった空は、墨で染められたかのような曇天に変貌を遂げていた。

葵は耳を塞ぎ、その叫びから逃げたくなった。目を閉じ、その姿から背きたくなった。

普段の自分なら、そうしていたかも知れない。でも、今は違う。

ここには帝がいるのだ。己の愛した男がいるのだ。

――龍夢を護るのは、私の役目っ！

そう自分に言い聞かせ、氣迫で己の恐怖と風葉の叫喚を押し返す。

葵は再び戦闘態勢に――――

「――あれ、え？」

公園が、傾いていく。空が、傾いていく。風葉が、傾いていく。違う。傾いているのは、自分自身だ。

「あ、あ？」

構え直そうとしても、足が動かず、かといって受け身をとろうとしても、腕が動かない。

葵は抗うことも出来ないまま、力なくパタリと倒れた。

「な・・・・・・・・ん、でえ・・・・・・・・？」

声にも力がこもらない。

何が起こったか必死に理解しようとしている最中、風葉はズズ、ズズ、と少しずつ近寄ってきている。

「い・・・・・・・・や・・・・・・・・こな、いで・・・・・・・・」

そんな言葉が届くわけがないのに、葵はひたすらそれを繰り返していた————繰り返すしかなかった。

「いや・・・・・・・・い、や・・・・・・・・」

風葉は葵の目の前まで、迫ってきた。震える左手でゲイ・ボルグを持ち上げる。

「ぐぎぎつ・・・・・・・・!!」

狙いはしっかりと葵の首に定められている。

————やだ・・・・・・・・やだ・・・・・・・・助けて・・・・・・・・

「た・・・・・・・・けて・・・・・・・・っ！」

こんなかすれた薄い声など、誰にも届くはずがない。無情にも、ゲイ・ボルグは首へ向けて振り下ろされた。

葵は、全身全霊を込めて龍夢の名を叫んだ。

まともに動かないはずの口を、無理矢理にでも動かして。

———龍夢に届くことを願って。

その時、雷鳴が轟いた。

ゲイ・ボルグは、葵の喉を貫く寸前で止まった。

風葉は、不思議そうに、訝しげに、首を後ろへ回した。

彼の背後には大きな灰色の狼が、ゲイ・ボルグに噛みついて動きを封じている。

———あの狼は……もしかして……

葵には心当たりがあった。

「グウヴヴウウウ……!!」

狼が唸る。

「……ジャマ」

彼も唸る。

風葉の喪失した右腕から茨が生え、狼に襲いかかる。狼はそれよりも速くゲイ・ボルグを放して飛び退いた。

「ジャッマッ……ジャッマッ!!」

何故己の身体が動かないのかは理解できないが、あの狼の目的は理解できた。

狼の目的は、風葉の狙いを葵から自分へと向けさせることなのだ。そして、あの狼に続くようにして彼女が現れた。

「……………ふう、なんとか間に合ったな」

葵の心の恐怖が、安心感で塗りつぶされていく。思わず彼女の名を叫んでいた。

「……………鈴奈さん!？」
スズナ

第二十六話 雷鳴

「よっ、葵。三十……何年かぶりだな」

片手を上げて微笑みを見せる。

「鈴奈さん……どうしてここに……?」

葵は脳に浮かんだ疑問と心に湧いた安心で気がついていないが、いつのまにか口の自由がきいている。

鈴奈は、まあまあと適当な返事を返し、視線を葵から風葉へ向ける。

「詳しい話はもうちょつと待ってくれ———というわけで燈音^{トーネ}、ちゃっちゃと片付けちまおうぜーい」

燈音と呼ばれた狼は、眼だけを鈴奈に向ける。

「お前はいつも見ているだけじゃないか。たまには手伝え。腕が鈍るぞ」

低い声で喋る燈音に、うるせーい、と笑ったままで返事をした。

二人とも変わってないな、と葵も顔をほころばせた。

「あ、そうそう、なんでここにいいのかだっけ?」

視線を葵に戻した。

「コイツに聞いたんだよ。公園にキョウスケがいるってな」

鈴奈は自分の傍らで立ちつくしている青年へ顔を向ける。それでようやく葵は彼の存在に気付いた。

「貴方は確か……ナオキさん？」

女性に声をかけられたというのに、ナオキはそわそわとしながら目の前に広がる光景をただ凝視することしかできない。

ほぼ壊滅状態の公園だけでもかなり衝撃的な景色だが、血まみれの友人、低い声で喋る狼、そしてそこにメイドが倒れているという景色もいろんな意味で衝撃的だ。

ここで彼に落ち着けと言うのも、酷い話だ。

「————キョウスケのヤツ？」

別の声はした。

「————ん？」

一度立ち止まった。しかし空耳に近い感覚だったので、気のせいだと自分を思いこませ、声はスルーする。

そしてナオキは再び歩き出す————

というのもできたのだが、声が若い女性のものだった、という理由だけでナオキは振り返った。

後ろには、自分より少し年下ぐらいで、膝の辺りまで伸ばした黒髪を持つ少女が、じっとこちらを見つめていた。

自分の視線と彼女の視線が重なった瞬間、だらけ気味だった顔をピシッと引き締めた。

「————俺に何か用かい？お嬢さん」

顔もそうだが、さわやかさで満たされた声に一瞬で切り替えるのは、彼特有の才能かも知れない。

「や、悪いけどお前じゃなくて『キョウスケ』という男に用があるんだが」

その直球的な言葉にピクリと頬がひきつったが、あくまでもナオキは全ての女性の味方。

他の男の話でも、邪険に振る舞うことは絶対にない。

「ああ……キョウスケなら、公園にいますと思うぞ……」

しかし、落胆している様子は声にしっかり現れていた。

「公園？どこのだよ？」

彼女の問いに、ナオキは指で示した。指は彼女の後ろへと向けられる。

「ここを真っ直ぐ進んで二つ目の角を右に曲がってそれから……」

そこまで言って、ナオキは眉をひそめた。この辺りは少し入り組んでいるため、口では説明しづらいのだ。

「あ口・・・・・・・・」

結局、ここは自分が案内するべきだと判断した。

「ちょっとついてきてくれ。案内す・・・・・・・・」

ナオキは停止した。

「・・・・・・・・どーしたよ？」

突然言葉を途切れさせ、目を丸くしたナオキに声をかけた。
しかし返ってきた言葉は、彼女の言葉に対する返事ではなかった。

「・・・・・・・・なんだアレ・・・・・・・・？」

少女は彼の指が示している方向へ顔を向けた。

「あちゃー・・・・・・・・まさかの戦闘中」

二人の眼には、一筋の光の柱がハッキリと映っていた。
少女はナオキのように驚いていないが、額に手を押し当て、呆れている所がある。

「——————ったく・・・・・・・・」

両手を合わし、そして地面へと手の平を押し当てた。両手からは光が水のようにこぼれている。

「お、おい！なんだそれ！？」

直後に光が増し、後退ったナオキごと周囲を包み込む。

光が消滅したとき、ナオキの目の前には体長1.5メートルはあり
そうな灰色の狼が現れていた。よく見ると、尾が二股に分かれてい
る。

自分は狼のことについて詳しいわけではないが、尾が分かれた狼な
んていないのではないだろうか。

「燈音、あの光のトコに行ってくれ。そこに龍夢がいるみたいだ」

狼に言葉が通じるのか、と疑問を抱いたが、それはすぐに解消した。
低い声で狼が喋ったのだ。

「本当か？」

「え？今の空耳？それとも腹話術？」

「さあ？この小僧が言うにはそうらしいぞ」

「え？今俺のこと小僧って言った？」

「まあとにかく急いでくれ。あたしらも後で追いつくけど、なんか
————ヤバイ気がする」

「え？今なんて？俺も入ってんの？」

少女の眼が僅かに鋭さを帯びた。

「・・・・・・・・分かった」

燈音が返事を返したと同時に雷が鳴り、雷光と共に燈音の姿が消えた。

「・・・・・・・・え？何？俺どうすりゃいいわけ？」

首を傾げ、わしゃわしゃと頭を搔く。

「んじゃ、あたしらも行くか！」

いつの間にか彼女の帯びていた鋭さが消えていた。少女はナオキの胸ぐらを掴む。

「ん————がっ!？」

そのままナオキをグイグイと引っ張り、二人は光の元へ走っていった。

第二十七話　　こころ（前書き）

風葉が空気なのはしょうがない

第二十七話　ころ

「とゆーわけだ」

にやははと後頭部に手を当てて笑う鈴奈に対し、葵は頬を引きつらせている。

「い、一般市民を連れてきますか・・・？」

「ま、ノリと勢いってやつだな。おっと、それから・・・」

鈴奈は少しかがんで砂をつかみ取った。

「お前もいい加減起きろって」

何メートルか離れた位置で倒れている龍夢に向かってその砂を投げた。

龍夢の頭にパラパラと小石や砂が降り注ぐ。

「ス、鈴奈さん!？」

目を見開き、噛みつかんばかりの勢いで鈴奈にしがみついた。

「龍夢に何するんですか!？それが瀕死の人間にする仕打ちですか!？今龍夢が—————!!」

「げほっ!」

「—————どんな状態なのか—————!!」

「けふっ・・・・・・・・」

「――知っているんで――」

「・・・・・・・・」

「――す――か・・・・・・・・あ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ひゅう、と何故かむなしさのこもった風が吹き、どこか変な空気が漂った。

「――・・・・・・・・あれ？今咳をしたのって、誰？」

視線を鈴奈から龍夢へ向け、続いて顔も龍夢へ向けた。

「・・・・・・・・龍夢・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

「あの・・・・・・・・もしかして起きてます？」

「・・・・・・・・」

もう完全にバレてしまっているのだが、意地でも彼は『まだ気を失っている』ということにしたいらしい。

葵よりも先に痺れを切らした鈴奈は舌打ちの後、右手を天へ突き出し、人差し指を立てた。

「い、い、か、げ、ん、に・・・・起きろっつーの！」

その言葉と同時に腕を振り下ろし、人差し指の先を龍夢へ。その動作と同時に空が光り、天が絶叫を上げた。

「————うおあぁっ!!！」

瞬時に龍夢は茨を振り解いて身を投げ出し、その直後に彼がいた所へ雷撃が突き刺さり、茨は灰と化した。

龍夢はそのままゴロゴロと地面を転がり、鈴奈と葵の間近で静止した。

「お、おう葵・・・・無事でよかった・・・・」

なるべく悠然と立ち上がり、なるべく悠然と笑みを見せる。しかし主人の不自然な笑みを、葵は冷め切った瞳で睨んでいる。

「・・・・無事でよかった、ですって？」

「まさかお前があんな力を持っているとはな。主人である俺でも気付かなかったよ」

「・・・・私、死にかけたのですけど？」

「も、もちろん本当にヤバイと感じたときは助けにはいるつもりだ

ったぞ？でもさっきは鈴奈と燈音が来てくれたし、必要ねえと・・・」

「・・・必要ない？龍夢にとって私は、所詮その程度だということですか？」

「い、いや、別にそういうことじゃ・・・」

少しずつ、だが確実に葵の怒りは膨らんできている。それから声にも怒気が見え隠れしている。

「龍夢のために、命がけで、戦っていたんですよ？」

「三十年もお前と会わなかったからさ、どれだけお前が強く・・・・なった、か・・・」

最後の方はもはや声になっていない。

主従の関係で結ばれているとはいっても、今の葵の様子を見る限り、全力のビンタ十発や二十発では彼女の怒りは収まらないだろう。

——おい龍夢

——・・・ああもう！こんな時に何だキョウスケ！

——お前の言われたとおりに演技したが・・・これ大丈夫なんかな？

——し、心配するな！演技は完璧だったぞ！画面の向こうの

皆までも見事に欺けられたようだ！

—— いや、心配なのは演技じゃなくて

—— 俺のことも心配無用だ！精神は常日頃から鍛えていたからな！この程度で折れはせん！

—— いや、心配なのはお前じゃなくて

—— ……じゃあ何だ？

—— 心配なのは俺の身体

—— ……

—— ……

—— ……行き付けの整形外科とかあります？

—— 死ぬ

—— ごめん

彼女の風船ふうせんは怒りでまだまだ膨らみ続ける。というかもはや風船と
言うより爆弾に近い。

覚悟しとけよ、と鈴奈が視線で龍夢に伝え、もうできてる、と龍夢
が視線で鈴奈に返す。

そして、神に捧げられるのを待つ生贄のように、静かに目を閉じた。

「・・・・・・・・く・・・・・・・・」

手の平か、それとも拳か、いや、足が飛んでくるかも知れない。が、とにかく受けなければならぬ。

自分はそれだけ葵の心を傷つけてしまったのだから。

次の瞬間、葵は動いた。龍夢は身を竦ませた。

そして体に、強い衝撃が走った。

「・・・・・・・・？」

確かに衝撃が走った。が、痛みは全く感じない。

戸惑いながらも目を開けると、より一層その戸惑いが強まった。

同時に体を強ばらせ、耳まで真っ赤に染まる。

自分は————葵に抱きしめられていた。

「な、あ？」

何が起っているか理解できず、眼を白黒させる。

葵は龍夢の耳元で嗚咽し、目から大粒の涙が止めどなく流れ落ちていき、微かに震えている。

「・・・・・・・・ほん、とに・・・・・・・・怖かったんですよ・・・・・・・・」

龍夢が、死んじゃ、た

、かと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

葵の心が、直に伝わってくる。

葵がどれだけ自分を想ってくれているのか、葵がどれだけ自分を愛してくれているのか、鮮明に感じ取れた。

しかし自分は、その彼女の心を弄んでしまった。

「ごめん」

龍夢は葵を抱きしめた。

「本当に、ごめん」

龍夢はひたすら謝った。

「もう絶対にしないから」

葵は微かに頷いた。

第二十八話 天の叫び（前書き）

会話が多いですなあ・・・
自分的には会話の多い小説にはしたくありませんが、しょうがない
ですかねえ・・・？

第二十八話 天の叫び

「…………おい龍夢。そろそろ決着つけてやろーぜ」

タイミングを見計らい、鈴奈が声をかけた。

龍夢はそっと葵を放し、彼女と視線を合わせた。

「葵、お前は休んどけ。ここからは俺達でやる」

葵は涙を拭い、闘志を秘めた瞳で答えた。

「心遣いは結構です…………私は、まだ戦えます！」

しかし龍夢は首を横に振る。

「駄目だ。休んでいてくれ」

葵も意志を曲げることはない。

「私は！まだ戦えます！」

「む…………う…………」

苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。

「やめとけ。お前じゃ足手まといにしかならねーよ」

鈴奈も龍夢に加勢するが、意地と根性で葵は立ち向かう。

「私は！……わた、し……は……あぁっ？」

葵は突然息を切らし、両手を地面に付いた。

「……だからやめとけって……」

彼女の額からダラダラと汗が流れ出す。顔は赤く、風邪の症状に似ていた。

「さっきの暴走で、もう魔力も体力も底をついているんだよ。これ以上戦ったら————お前マジで死ぬぞ？」

『死』という言葉に、葵の不屈の意志は砕かれた。

唇を噛み、固めた拳は悔しさで小刻みに震えている。

「葵……俺の役に立ちたいという意志はよく分かったが、お前俺のことを信じていないのか？」

え、と葵は意外そうな顔を見せた。

「俺が風葉に負けるとでも思ってるのか？」

「い、え……」

それを聞き、満足そうに葵の頭を撫でた。

「だったら、俺に任せとけ。な？」

葵の表情も和らぎ、

「・・・・・・・・はい」

と言って、静かに眼を閉じた。

———おいおい、大丈夫か？

———眠っているだけだ。心配ない

———いやそれは俺にも分かるけどそうじゃなくて、風葉だよ。
なんかえらく物騒なモン出してろぞ

———何？

風葉へ顔を向けると、忌々しそうに舌打ちを漏らした。

風葉の左手にはゲイ・ボルクではなく、無数の配線が巻き付いた大型のライフルが握られていた。

「あれは・・・・・・・・『レムス』・・・・・・・・！？」

その声を聞き、鈴奈もそれを確認した。

「—————燈音！退け！」

「分かってる！！」

今まで注意を引きつけていた燈音は瞬時に鈴奈の元へ戻り、彼らはそれぞれ体勢を立て直した。

———おい作者。読者と俺のために魔導兵器についての説明を要求する。あ、なるべく短く簡潔に頼む

『魔法』と『科学』———相反する二つの文明を融合させ、形を成した武器———それが魔導兵器である。

魔法を扱うのは、当然魔法使いだ。

強力な魔術や膨大な魔力を使用する場合、術者自身がそれを制御しなければならぬ。

もし己の力量を超える魔法を使用した場合、術者の身体はそれに耐えきれず、崩壊を起こす。

そして魔導兵器にはいくつかの特異な機能がある。

その中に、術者の魔力を増大させるそれと、術者に代わって魔法の制御を代行するそれがあった。

後者は、術者では扱いきれない魔力や魔術を、この機能が制御、そして発動するという機能だが、

魔力を増加させる機能と互いに作用し合うことで、想像を絶する力を発揮する。

そして、魔導兵器そのものに魔力を注ぎ込むことで、魔導兵器本来の力が解放される。

———……とにかく、魔力を科学の力で増加させ、それをコントロールする機械ってことか？

どれだけ貧弱な魔法使いでも、魔導兵器一つで一国を滅ぼすことが可能だ。

しかしそれ故に魔導兵器の製造は禁止されていて、アルカディアの平和を望み、

全世界に存在する魔法使いの一族の勢力バランスを保つ『生命の樹』が、常に目を光らせているのだが……

風葉は震える左手でレムスを持ち上げた。

砲身に光が集中していく。風葉の体はビリビリと震撼し、己の肉片が辺りに乱れ散る。

「あの体であれだけの魔力を撃ったら————奴の体が吹き飛ぶぞ!？」

流石の燈音も驚愕を隠せない。

「威力なんてもうカンケーねーよ。今のアイツには一発撃つだけで限界だろうしな。

……おそらく、自分もろとも吹っ飛ばそうって魂胆だろう」

「ちっ!!」

龍夢は一步前に出た。撃たれる前に風葉を倒すつもりなのだろう。しかし鈴奈は手を伸ばしてそれを制した。

「お前の魔法がアイツに届くより、奴が引き金を引く方が速いぜ？
ここは————あたしに任せな」

そう言うと彼女は右手を天へ突き出し、人差し指を立てた。先程龍
夢に向けて放ったあの魔法と同じように。

「————『ライティング・インパルス雷撃衝破』ツ！！」

また、空が絶叫を上げた。

第二十九話 終わりを告げる雷光（前書き）

遅くなってしまうって申し訳ないです

第二十九話 終わりを告げる雷光

「————っしゃあ！終いっ！」

鈴奈はガッツポーズをとってはしゃいだ。

公園に穿たれた大穴に風葉の姿はなく、灰が物寂しく積もっているだけだった。

彼が持っていたレムスも鈴奈の魔法に巻き込まれたらしく、跡に残っているのはいくつかの小さな破片のみだった。
やがてその灰や破片も風に吹かれて消え去った。

—————龍夢……今のは雷か？

—————そう。彼女の属性は『雷撃』……電気や雷の魔法を得意とするのさ

—————ふうん……しかし、あの鈴奈って娘……妙にテンション高めよな

—————おまけに何事に対しても楽天的だ

—————部屋とか結構散らかってそうだな

—————彼女の従者である燈音も、彼女の被害に遭—————

「————っつおああ！？」

再び身を投げ出し、再び雷が龍夢を襲った。

「あーすまん。なんだか悪意に満ちた思念が漂っている感じがしてな」

「……………そりゃてめえのことだろ」

「いやいや、ホントにすまん」

「正確に俺を狙っておいて何がすまんだ」

「マジでゴメンって。ほら、このとおり」

と鈴奈は言っているが、頭を下げるどころか逆にふんぞり返っている気がしないでもない。

「さあて、後始末は『イエソド』に任せて、あたしらは帰るとするか。おい燈音」

燈音に声をかけて踵を返す彼女に、龍夢は待て、と引き留めた。だが鈴奈は片手をヒラヒラと泳がせてこう言ったのだった。

「明日の朝、またここで会おうや……………疲れてんだよ、あたしは」

最後は僅かに声のトーンが落ちていた。

結局彼女は振り向くこともせず、そのまま公園を去っていった。

「……………あれだけ派手にやらかしといて、どの口が言ってるんだか」

龍夢が呆れるのも無理はなかった。ちなみにキョウスケも彼と同意見だ。

それに対し、従者である燈音の意見は二人と違っていた。

「あれでも朝から町をずっと走り回っていたんだ……今は、そっとしておいてやってくれ」

彼もそう言い残すと、鈴奈に続いた。

「しょうがないな……では、私達も帰るとしましうか」

葵もコクンと頷いた。

「——いはいやちよつと待てええええええ！！」

突然のシャウトに龍夢と葵は身を強ばらせた。

「何勝手に終了ムードにしてんだよ!?!俺を置いていくなよ!?!つか今思ったら俺の描写全然ねえじゃねえかああああ!?!」

半分空気と同化していたナオキはぎやあぎやあとわめく。

「……あー、すっかり忘れてましたね。はははっ」

——ヤベ、俺も忘れてた。あははっ

「いったい今までどこにいたのですか？ふふふっ」

朗らかに笑いかけても無意味だった。すでに彼の怒りは最高潮に達している。

「ずっと傍らにいたろおおおう！？画面の向こうに『あれ？ナオキどこにいるんだ？』みてえな空気が漂ってるだろうがっ！！」

「心配は無用です。画面の向こうの皆さんも忘れていらっしやいますから。このまま終わっても何ら問題はありません」

「フォローできてねえっーかする気ねえだろてめえ」

「・・・・・・・・ヤレヤレ」

瞬時にナオキの背後へ移動し、彼の脳天を指先で突いた。

「ぬあっ・・・・・・・・！？」

ナオキは喉から奇妙な声を漏らし、ガックリとうなだれた。そしてふらふらと不安定な足取りで公園を去っていった。

「……………ここでの記憶を消しただけですよ。ついでに大人しく家に帰るように、暗示もかけておきました」

「……………はい説明どーも。というかもう訊く前に答えてるよなお前

「さて、今度こそ私達も帰るとしましょうか。葵、立てますか？」

しなだれたままの葵にそっと手をさしのべる。

葵は少し戸惑う素振りを見せたが、微笑んで彼の厚意を受けた。

「はい。もう大丈夫です」

彼の手を握り、グッと引っ張り起こされ――――

「あ、ら？」

視界がまた傾いていく。でも今回は、龍夢が支えてくれた。

「まだ反動が残って……どうやらアレは、体に相当な負担がかかるみたいですね」

葵は必死に己の力で体を支えようとするが、まだふらついている。龍夢はため息を吐く。しかし僅かに笑みを見せていることから、ため息は呆れからではないことが窺えた。

龍夢はくると反転し、背中で葵を受け止め、よいしょ、とそのまま彼女を背負い込んだ。

「ふえ？」

葵の脳は一瞬現状の理解に遅れた。そして理解したときにはもうすでにパニックに陥っていた。

「え、えええええ！？な、なにを……！！？！？」

今度は葵の顔が真っ赤に染まる。

「あのままでは動けませんから」

「いえ、でっ、でも……そんな……！！」

「お詫びですよ、お詫び。ここは私に甘えなさい」

背中で慌てふためく葵を無視し、龍夢は公園の外へ向かっていく。

「・・・・・・・・龍夢・・・・・・・・」

ポツリと主人の名を呟いた。で、ようやく気付いた。

「————あ、ああああ！！よ、呼び捨てにするなんて私ったら、なんて無礼なっ！！」

実は前話辺りも普通に呼び捨てにしていたのだが、状況が状況なだけに、気付いていなかったようだ。

葵は主人の背中でより赤みを増した頭をブンブンと振る。

「す、すすすみません帝様っ！！ああもう私ったら！私ったら！！」

「————いいですよ」

龍夢の反応は意外にも笑みだった。

「え・・・・・・・・よい・・・・・・・・のですか？」

「国もすでに滅びました。私はもう帝ではないのです・・・・・・・・これからは『龍夢』と呼びなさい」

「・・・・・・・・はい、分かりました。りゅ・・・・・・・・龍夢・・・・・・・・様・・・・・・・・」

喉に何か詰まっているような、喉に何かつかえているような声。
今の彼女にはこれが精一杯。龍夢はその消え入りそうな声に、十二分に満足した。

「はい、よろしい」

その後の数日間、紫野葉町の公園が光ったという話題がネットや町で流れたが、誰も信じることはなく、そして誰の記憶に残ることなく、自然に霧散していった。

第三十話 乙女達よ、立ち上がれ（前書き）

「いよいよだな、ユウイチよ」

「あ？何のことだ？」

「マオ、そしてナオキとくれば、次はワシらの出番に決まっている・
・・・画面の前のみんな！ご期待くださいっ！」

第三十話 乙女達よ、立ち上がれ

土曜日 午前九時前

キヨウスケは玄関へと歩んでいく。

「あれ？お兄ちゃん出かけるの？」

妹の問いに、おう、と短く返した。

「どこ行くの？」

「ああ、友達と遊ぶ約束してんだよ」

いつもはそれだけで終わるはずだった。しかし今回は少し違った。

「・・・・・・そうなんだ」

アイは不機嫌そうに呟いた。

「・・・・・・」

どうした、と言いかけたが、約束の時間が迫っていることが、それを邪魔した。

彼女を怒らせるといけないような気がする。それに、彼のことも心配だ。

「・・・・・・じゃ、行ってくるわ」

「・・・・・・・・いってらっしゃい」

「・・・・・・・・昼までには帰るから」

「・・・・・・・・ごゆっくり」

こんなギクシャクとした会話はいつ以来だろうか・・・・・・・・いや、この前あったな。

とにかくキヨウスケは、この重苦しい空気から逃げるように家を出た。

キヨウスケが視界から消えると、アイは右手でつまんでいた『それ』を目の高さまで持ち上げた。

「・・・・・・・・友達、ね」

つまんでいた『それ』とは――――昨日、帰宅したキヨウスケの背中に着用していた髪の毛だ。

兄は、帰る途中に一人で本屋に寄っていた、と言っていた。帰る途中には誰とも会ってない、と言っていた。

だったら、これは誰の毛だろう。

この毛はなめらかでツヤがあり、どうも女性の髪の毛のようなのだ。キヨウスケが女生徒と接することは、まずない、と兄の友達から聞いている。

兄に彼女がいるということも、ないはずだが・・・・・・・・

「まさか・・・・・・・・」

昨日彼女でも出来たのではないか？

だから帰りがいつもより遅くなったのではないか？

彼女を背負ったりでもしたのではないか？

その時彼女の髪の毛が付いたのではないか？

「……いやいや、まさか」

これらは全て予測の域を出ていない。だからといって、彼女など有り得ない、というのも判断しがたい。

これが、女の勘というヤツだろうか。なら――――

「――――確かめるしかない」

そう決断すると、アイはポケットから携帯電話を出し、ある男へ電話をかけた。

電話はたったワンコールで繋がった。が、アイは驚かなかった。電話の相手が彼なのだから、当然だ。

「もしもし、ナオキさん？ 今からちょっと付き合って欲しいことがあるんですけど――――」

同時刻

紫野葉町のとある喫茶店の奥に、二人の少女が向かい合うように座っていた。

店内には彼女たちの他に、ほんの四、五人程度しか客はいない。

グラスの中の氷が、カラン、と音を立てて傾いた。

少女はその様子をじっと見つめ、そして顔を上げた。

その瞳には、もう一人の少女が俯き、己の足下を見下ろす姿が映っている。

「それで？」

彼女は口を開いた。

「お前は どうしたいんだ？」

少女に問いかけた。

「どう、って言われても……」

モゴモゴと何か口に詰まっているように少女は言葉を発した。

彼女に伝えたいことがある。しかし、羞恥心がそれを遮っている。そんな感じた。

しかし彼女は、少女の伝えたいことが手に取るように分かっていた。そして、少女の代わりに彼女がそれを言った。

「『彼を元気づけてあげたい』って？」

少女の顔は一瞬で真っ赤に染まった。

「な、なんでわかったの！？」

「顔を見ればわかる」

それを聞いて少女はバツと彼女から顔を背けた。

「もう遅い」

そう言っても少女は顔を背けたままだ。

少女は癖のないまっすぐな黒髪に、素朴な顔立ちで和装の似合いそうな印象がある。

その少女の名は『ヒカリ』。

それに対し彼女は、腰辺りまで髪を伸ばしているが、首の辺りで一本にまとめている。四角い眼鏡をかけていて、知的な印象がある。

彼女の名は『サユカ』。

二人とも紫野葉高校の一年生でクラスメイトだ。

サユカはこの日、ヒカリの相談に乗るため、彼女と共に喫茶店に足を運んでいた。

しかし、あまり彼女は乗り気ではなかった。

実はヒカリが半ば強引に引っ張ってきただけなのだ、というのが真実だが、

ここはあえて、サユカから相談に乗ったということにしておく。

———あえてじゃないっ！

だそうだ。

———だそうじゃないっ！ホントに向こうから乗ってくれたんだからっ！

向こうから乗ってくれたのだそうだ。

———.....

あ、や、じゃなくて、向こうから乗ってくれたのだった。ちょ、その、や、調子に乗ってマジسنマセンでしたハイ。

ふ、と息を吐き、少しも照れることなくサユカはさらりと言った。

「……まさかお前が、あんな男に恋するなんてな」

「こ!？」

ビクリと体を震わせた。

「そんなじゃないよ!」

ヒカリは彼女に視線をぶつけた。

「否定するのか？」

「そ、それはもちろん!」

「じゃあなんで元気づけたいんだ？」

ガタツ、と椅子を鳴らして、ヒカリはバンツ、と机に両手の平を叩きつけた。

サユカの目の前に直立するグラスの氷がまた傾いた。

「だって私は中学校の時から色々とお世話になったし!でもお礼とかしてないし!

それから最近元気がないみたいだし！やっぱりここは私がなんとかしないといけないと思うし！」

「ほら、やっぱり恋だ」

「だからちーがーうーの！」

「じゃあ彼に好かれたくはないのか？」

「む、ぐ……」

言葉を詰まらせた。

ヒカリは自分を落ち着かせ、力なく椅子に座り込んだ。

「サユちゃん、どうしたらいいと思う？」

「サユちゃんて呼ぶな」

「あ、ごめん。それでね、サユちゃん。どうしたらいいと思う？」

「……」

「どうしたらいいと思う？」

サユカはただため息をするばかりであった。

「とりあえず会ってみれば？」

不意に口を開いたので、ヒカリは一瞬戸惑ってしまった。

「え？今なんて？」

「とりあえず会ってみれば？」

「でも、住所知らないし」

「そんなの調べ上げればなんとかな……」

彼女の言葉が途切れた。そこでヒカリも気付いた。いつの間にか、派手な格好をした柄の悪い男達が自分達を囲んでいる。

「よーお、君ら何してんのー？」

先頭の男が机に片手を置き、ヒカリの顔を覗き込むようにかがんだ。

「よかったらさー、俺らと遊ばねー？」

他の男達もヘラヘラと下品な笑みを浮かべている。

まあお決まりの台詞と言えはお決まりなのだが、このような展開もお決まりと言えはお決まりである。

作者も展開に苦し……じゃなくて、とにかく彼女たちは大ピンチなワケである。

「なあ、どーなのよ？」

男はヒカリの二の腕を掴んだ。
直後、瞬時にサユカはポケットに手をつ込んだ。

「————ふおぶげがつ!!?」

ヒカリの腕を掴んでいた男が突然視界から消えた。
かと思うと、店の隅でガッシャーンという音が店内に盛大に響き渡った。

男達やヒカリはもちろん、サユカまでも何が起こったのか理解できなかった。
ちなみにサユカはポケットに手をつ込んだまま停止している。

「じゃあ、俺が遊んでやろうか？」

ヒカリ達を囲んでいた彼らとは別の男の声が。
そしてこの声にヒカリは聞き覚えがあった。今さっきまでサユカとの話題に上がっていた人物の声。
この声、とヒカリは呟いた。

「————キヨウスケさん!？」

彼は悠然と微笑んだ。

「————ほら、かかってきな」

第三十話 乙女達よ、立ち上がれ（後書き）

「・・・・・・・・ちよ、あれ？ワシらの出番は？」

第三十一話 その怒りは烈火の如し（前書き）

最近良いサブタイトルが思いつかないです

第三十一話 その怒りは烈火の如し

まあ、画面の前にいるあなたならお気づきだろうが、この先の展開もお決まりなワケである。

チャラ男どもは突然現れた青年に、次々とのされていく。

ある男は蹴り飛ばされ、ある男は放り投げられ……そして、

「ちくしょうっ！！覚えてやがれっ！！」

という見事なまでにベタな捨て台詞を残して、男達は喫茶店を飛び出していった。

つーかこんな台詞言わないよね今時。

「……うわあ……」

とヒカリは顔を引きつらせて声を漏らす。めちやくちに散らかった店内を見回して。

と言ってもこれが普通なのだが。あれだけ男達を振り回せば店が散らかるのは当然のこと。

「結構強いんだな」

店内のことについては一切触れず、サユカは青年に語りかける。

「たいしたことねえよ」

と口では言ってるものの、青年の口は僅かに緩んでいる。

ヒカリは彼に札を言おうと顔を向けた。

「・・・・・・・・あれ？」

「・・・・・・・・はい？」

青年と眼が合った。そこで初めて気がついた。

「……………この人・・・・・・・・キョウスケさん・・・・・・・・じゃない？」

今更だが、よくよく見れば顔も違う。声は少し似ているが。

ついでに言うとう、青年でもなかった。無精髭や顔から察するに、おそらく四十代のオジさん。

とんでもない思い違いをしていた。そう都合の良い展開など、あるワケがない。

しかもその男・・・・・・・・

「・・・・・・・・お客様」

「うん？あ？え？ちょ、何すんの？ねえ？」

店員二人に両腕をつかまれ、ずるずると足を引きずられながら店の外へ放り出されてしまった。

これも現実的に言えば当然だ。これだけ店を荒らしているのだから。・・・・・・・・弁償するよりはマシだろうが。

男は外へ連れて行かれる間、

「あの、店が壊れんのはしょうがないからね？」

あれだよ？ウルトラマンだって怪獣とプロレスやっているわけだからね？町だって壊れるからね？

無傷なんて普通に無理だからね？いくら光の巨人といっても不可能はあるからね？

ウルトラマンってあれ、町の被害のほとんどが怪獣じゃなくウルトラマンによるというケースだってあるからね？ 多分」

なんて言葉を繰り返していた。

ヒカリ達はしばらくどうするべきか迷ったあげく、勘定を済まして店を出、男の後を追った。

「ひどい店だったなまったく！ 不良どもを追いついてやったのに、なんだあの態度はっ！

ついでに店も汚かったしょ！」

店から追い出された男は傍の電柱に寄りかかり、腕を組んで愚痴をこぼす。

傍らに立つヒカリは、それはあなたのせいでしょ、と言いかけたが、助けられた手前、言うわけにはいかなかった。

「それは貴様のせいだろ」

隣のサユカが何の躊躇いもなく言った。そしてそのまま言葉を続けた。

「それより貴様、随分とタイミング良く現れたもんだな」

「そりゃあか弱き乙女のピンチとくれば、当然だろ」

しかし直後、男の表情は一変し、瞳の奥に光が走った。

「それとも、手出しは不要だったかな？ お嬢さん」

それを聞いて、サユカの瞳は鋭さを帯びた。

「ポケットの中のソレ……そこらの女子高生が持つような物じゃないよな？」

男は『ソレ』が何なのか知っているような口ぶりだが、サユカは首を傾げる。

「うん？ いったい何のことだ？」

それも、かなりわざとらしく。

ヒカリは状況が理解できず、キョトンとしている。男は嘲笑に近い笑みを浮かべる。

「そーかい。じゃあ俺の勘違いってことにしとくわ」

「そ、それにしても強いですね！ かつこよかったですよ！」

この場の雰囲気打ち砕くべく、ヒカリが無理に作った笑顔で男を讃える。

「いやあ……それほどでもっ！」

照れ隠しなのか、顔を上げ、片手で顔を覆う。
サユカは男を無視し、ヒカリの手を引いた。

「ヒカリ、行くぞ」

「え……わわわ、わ」

転びそうになるも、何とか堪えた。

「もう彼に用はないし、今はそれどころじゃないはずだろ」

遠回しな言い方だが、サユカはキョウスケに会うことを促しているのだ。

「あ、そっか……って、え!?! い、今から!?! というか私まだそうするなんて言っていないし!」

「そんなんだからいつまで経っても近づけないんだろ。覚悟を決めな」

その言葉は嘘だ。本心は男から離れたいだけだった。何故か彼と一緒にいると嫌な予感を感じるのだ。

キョウスケの居場所は知らないが、まあ何とかなるだろう。

そう思った矢先、突然男が不敵な笑みを浮かべた。

「お。今から会いに行くのかい?」

ヒカリに視線を移し、続ける。

「君の想い人とやらに」

ヒカリは目をぱちくりとさせ、サユカは足を止めた。

「……何故知ってる」

男は電柱から身を離し、腕を組んで答えた。

「知ってるも何も、俺は最初から喫茶店で君らの後ろの席にいたんだぜ？」

「おやおや、女の子達の会話に聞き耳を立てていたのか？」

眼鏡を人差し指でクイツと上げ、男を睨む。

「いやいや、俺はただコーヒーを吞んでただけだからさ、普通に聞こえるさ」

サユカはしばらく黙って何かを思案していたが、すぐに結論が出た。再びポケットに手を突っ込む。

「あああ待て待て待て！口封じなんかしなくても別に誰にも言わねえって！」

「いや私は別にいいんだが、こっちの方が・・・な」

ヒカリに指先を向ける。男の視線もヒカリに向く。

「・・・・・・」

ヒカリの顔は、聞かれていたことに対しての怒りと羞恥が入り混じり、鬼のような形相になっている。

そして――――

数秒後、強烈な打撃音と男の断末魔が町内に響き渡った。

第三十二話 安堵&SEE（前書き）

秋人様から龍夢と龍霧のミスを指摘されちゃいました……。
……もつとがんばろうと思いました。

サブタイトルの安堵と&をダジャレと思っていたければ思うがいいさ。
ちなみにSEEとは、ショート・イビル・アイの頭文字。

2000文字に届かない場合、まれに書きます。本編には全く関係ありません。

第三十二話 安堵&SEE

――・・・なんだ今の

――はい？何か聞こえましたか？

――ん、いや、なんでもない・・・・・・というか――

すっかり元通りになった公園を半分は感心、半分は疑心の目で見回した。

遊具の塗装のはげ具合や鉄の錆び付きなど、全てが見事なまでに元通り。

――・・・いったい何やってんだろ

『イエソド』の復興作業が気になって仕方がないキョウスケだった。

――まあソレはおいといて・・・・・・

「で・・・・俺に何の用だ？」

いかにも面倒臭そうに頭を掻くキョウスケの目の前には、鈴奈が。

「えっらそーに・・・・」

鈴奈は口元が僅かに引きつっている。どうもお互いに相性が悪いらしい。

「頼むから早く済ませてくれよ。俺の土曜日を無駄に消費させるな」

「うっせえ。こっちも好きで会いに来てるわけじゃねーんだよ」

二人とも眉間にしわを寄せ、こめかみをピクピクと痙攣させた。

「お前への用はさっさと済ませてやつから……マオ達のことだが——」

——マオ？

「どこに居るんだ？」

瞬時に鈴奈へ詰め寄る。

「切り替えはええ。あと近えよ馬鹿」

瞬時にキョウスケを押し返す。

「マオと桜はちゃんと言ったってやったぜ。マオはもう家に帰ってるかな。」

桜は「……聞いてるのか？ ちょ、マオが良ければ桜はどーでもいいってか？ ん？」

キョウスケはマオの安否が確認できた後は、まるで明日の天候でも見定めるかのように空を眺めていた。

桜のことが気になっていないというよりも、これ以上鈴奈と話したくないようだ。

彼女もヤレヤレとため息混じりに呆れた。

「鈴奈。ここからは私が」

龍夢に交代。

「ん、助かる。それで桜なんだが、どうもアイツは自分の一族の長が『オリジン』に加わったらしい。

それで自分も仕方が無く『オリジン』に入ったんだが、あの『原初の力』とかいうのには染まってないみたいだ」

「なるほど……確かに彼女からあの力は感じられませんでしたね」

「でも、桜以外の仲間は完全に染まっちゃったみたいでな……預かったついでに桜をあたしらの一族に加えることにしたんだ」

「なんと……『ネツアク』にですか？」

驚愕の表情を浮かべるが、鈴奈はおう、とだけ返した。

「お嬢様が桜をかなり気に入っちゃったみたいでな……反対するヤツも少しいたが、まあ何とかなるだろう」

おおざっぱにまとめ、次の話題に移った。

「それで『オリジン』のことなんだが————星覇のコトは知ってるよな？」

「……ええ」

龍夢の表情が引き締まった。鈴奈も僅かに顔を引き締まらせる——
——なんてことはなかった。

あまり真剣に捉えていないのか、いつものように軽い調子で話した。

「どうも『原初の力』ってのは死者までも復活させちまうみたいだな？」

しかも操る術者も必要とせず、各々でちゃんと思考を持って動く」

「生前の記憶、性格、操る魔術や己の属性、全てがそのままです・・・

そして、『原初の力』に魅せられた一族をいくつも取り込まれているのでしようし、

おそらく既に無数の魔法使いを手駒にしているでしょう。死者であろうとなかろうとね」

自分は、そんな軍団を敵にするのだ。しかも今現在の味方は、片手の指で足りるほどしかない。

・・・勝てる可能性など、万に一つもない。

—————我ながら無茶な約束をしたものですね

皮肉に満ちた嘲笑を浮かべる。

あまりにも無謀な戦いを、己の同族の仲間達が見ればどう思うだろうか。

みんな怒る？叱咤激励する？それとも、自分に同情する？

あまりにも非力な自分を、救ってくれた彼女が見ればどう思うだろうか。

彼女は・・・彼女なら・・・どうするだろう？

———・・・・魅春様・・・・

彼女に、教えてくれと願う。自分はどうすればいいのか、何をすればいいのか———ひたすら願った。

当然、答えは返ってこない。龍夢は願った自分に呆れた。
あの人は、もういないというのに・・・

SEE『自虐』

キョウスケ（以下キ）「・・・・・・あれ？ここどこ？」

エイジ（以下エ）「おお、来たかキョウスケ・・・・・・どうもこの話がまだ2000字に達していないから適当に字数稼げ、だそうだ」

キ「誰から？」

エ「作者から」

キ「・・・・・・終わりだな、作者もこの小説も」

エ「確かに。コメディ入れるとかほざいておいて、そんな場面がどこにあるというのやら」

キ「投稿ペースも牛歩だし」

エ「読者様から不自然な場面の指摘はされるし」

キ「話のスピードもたらたらしてるし」

エ「会話が無駄に多いし」

キ「表現の仕方もうんパターンだし」

エ「中二病だし」

キ「え、と・・・・・・・・サブタイトルは地味だし」

エ「むう・・・・・・・・というかメインタイトルも何の工夫もないし」

キ「それから・・・・・・・・ん口・・・・・・・・？」

エ「他には・・・・・・・・あ口・・・・・・・・？」

キ「・・・・・・・・言い尽くしたな」

エ「だな」

キ「んじゃ、2000字も超えたし帰るか」

エ「そーだな・・・・・・・・え口、画面の前の読者様」

キ「最後に一言、言わせてください・・・・・・・・せーのっ」

キ&エ「どうか見捨てないでくださああああいいいい！！！！」

第三十二話 安堵&SEE（後書き）

いやホントマジで見捨てないでください。お願い。

第三十三話 乙女達よ、奮闘せよ（前書き）

文章力のない自分に呆れるばかり。
投稿ペースも遅い自分に呆れるばかり。
でもがんばる。

第三十三話 乙女達よ、奮闘せよ

キョウスケ達の三十メートルほど後ろにある木。その陰には息を潜め、気配を殺し、彼らをを覗き見る怪しい人影が二つあった。

「見つけたぜ……アイ軍曹！目標補足しました！」

ナオキは不敵な笑みを浮かべた。

「黙れ！目標を前にしてはしゃぐんじゃない！」

彼の後ろでアイが叱咤した。

二人はキョウスケと傍にいる少女を三十数メートル後ろの木の陰から覗いている……のだが、なぜかこの距離で二人とも黒い双眼鏡を覗いている。

しかもどこから用意したのか、身にまとっているのは迷彩服。頭に被っているのは、迷彩塗装されたヘルメット。

市街地では全く無意味……というか逆効果な気もするが、雰囲気だけは超シリアスである。

「まさか本当に女性と会っているとは……軍曹の読みは素晴らしいであります！」

「だからはしゃぐなど言っているだろう！これ以上発声するなら営倉入りに処するぞ！」

「し、失礼しました軍曹！」

「分かればよいのだ、ナオキ二等兵」

もはや何をしたいのかまるで分からない。

今からおよそ十分前、アイから連絡をもらったナオキはものの一分で支度を終え、家を出た。

そして三分でアイと合流、そのまま二人でキョウスケの後を追跡。

そして今に至るといふ流れだった。

アイはいざというときの行動力が凄まじい。特に兄、キョウスケの事となると、自分でも歯止めが利かない。

ナオキは……もう既に存じているだろうが、全ての女性の味方だ。女性の頼みを聞く理由はそれだけで十分である。

たとえばその内容が、自分には全く関係ないことであろうとも。

そして、キョウスケを覗き見ているのは彼女たちだけではなかった。

「……………ホントにいた」

ヒカリは、アイ達のそれよりもさらに十数メートル後ろにある木の陰から顔を覗かせていた。

「だから言っただろう。アイを追えば見つかるとな」

ヒカリの後ろにはサユカが。しかしあまり興味がないのか、髪を指先でいじっている。

「で、貴様は何故いるのかな」

チラリと視線を傍らの男に投げかける。

「いーじゃんいーじゃん。乗りかかった船なんだから」

「私としては、今すぐ海へ突き落としてやりたいところだがな」

「救命ボートぐらくれるかい？」

「浮き輪もやらん」

「ごめん俺カナヅチ」

「知らん。そのままおぼれろ」

「はっはは、ナイスジョーク」

「そして沈め」

「……ジョークよな？」

それには返答せず、サユカは男から視線を外し、

「まあ、アイを見つけたのはただの偶然だがな」

とヒカリに声をかける。

しかしヒカリはキョウスケ達の会話を聞こうと必死になっている。
当然四十メートル以上離れているここでは聞こえるはずがないのだ

が、それでも耳を澄ますヒカリにサユカはクスリと口元を歪めた。

「……………ほら、これ使え」

懷に手を伸ばし、彼女が取り出したのは――――

「それヘッドホン？てかどっからだしたのそれ」

男の言ったとおり、彼女が出したのは黒に灰色のラインが走っているヘッドホン。

男の言ったとおり、大きすぎて懷から取り出すには不可能なサイズのヘッドホン。

しかしサユカはまったく説明を加えずにそれをヒカリの耳に当て、もう一つ同じヘッドホンをどこからか取りだし、自分の耳に当てた。

「……………いや、分かったよ。俺の分はないって事ぐらい……………」

男は頭を抱える。と、そこへサユカが男に手を差し出した。

「ほれ」

「お」

その手にはヘッドホン……………ではなく、小さなハエ一匹。

「私が開発したハエ型盗聴器『空廻^{くうかい}』だ。日本円で三十万少々するから、壊すなよ？」

キョウスケ達の所まで操縦しろ、とサユカの目はそう伝えている。

「・・・・・・・・リモコンは？」

「ほれ」

彼女から差し出されたリモコンは、どこからどう見てもWiリモコンにしか見えない。

それでもやはりサユカは説明を加えない。

「・・・・・・・・オーケー」

受け取った男はため息混じりにそう言った。

「・・・・・・・・全く動きがない・・・・・・・・二人はいったい何を・・・・・・・・？」

双眼鏡を下げ、アイはポツリと呟いた。

ナオキも双眼鏡から目を離し、怪訝そうに目を細めた。

「アイ軍曹」

「何かねナオキ二等兵」

「これは俺の直感ですが・・・・・・・・あの二人は別に恋仲とかそんなんじゃないんじゃないですか？」

「・・・・・・・・何故そう思うのかね？」

「だから直感ですってば。
でも、ほとんど確信に近いモノですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイは黙りこくった。

ナオキの女に関する直感は百発百中。

直感、といっても、彼の豊富な経験に基づいた直感だ。

その事はアイもよく知っている。外れたことがないことも。

「そうか・・・・・・・・お前がそう言うのなら、そうなのだろうな・・・・・・」

僅かに顔を俯かせた。

「ならば作戦は終了だ・・・・・・・・撤退するぞ」

少し寂しそうなその声に、了解、とナオキは答えた。

二人は回れ右をして――――

「あっぶう！」

木の陰から身をはみ出させていた男は、慌てて陰の中へ転がり込んだ。

「気をつけろ。もし見つかったら・・・・・・・・例えそいつがアイかナオキだったとしても、三十万じゃあすませんぞ」

「へーい」

間延びした返事後、操作の仕方を掴むことが出来た男はよっしゃ行くぜ、と意気込んで空廻を飛ばした。

数秒後、空廻に悲劇が襲いかかることに、誰も気づかなかった。

第三十四話 スナイパーライフ

「……………何をしているのだ、ナオキ二等兵」

ナオキは後ろを振り返ったままの体勢で停止していた。

「……………今後ろに誰かがいたような気がして……………」

「何？尾行か？」

アイも後ろを睨む。しかし人影は見当たらない。

ナオキも首を左右に振り、やっぱ気のせいです、と否定した。

アイ達の視線をкаろうじて回避した男は、廻天を操作する。

廻天がふわりと宙に浮かび、羽ばたいてキョウスケの元へ。

羽音を立てて高速で飛び回るその姿はまさに、ハエ……………と言われてもあまり褒められている気がしないが。

「よーしよし……………このまま真っ直ぐ……………」

男は慎重にwiiリモコンを操作する。

サユカの言うとおりに、キョウスケはもちろんアイ達にもバレてはいけない。

この状況で見つかれば、不審者として認識される恐れがあるからだ。ナオキはともかく、キョウスケの身内であるアイにそうなれば、以後の接触は警戒されて難くなるだろう。

これが、サユカの理論だった。

そして廻天がアイ達を通り抜けるその瞬間————悲劇は起こった。

アイのすぐ傍で突然、廻天はボンツと小さな爆音を立てて碎けた。

「—————うぞっ?!?!?」

操作していた男は途端に青ざめた。

「—————え?え?どうしたの?」

キョウスケ達に気を取られていたヒカリは現状が理解できずに混乱した。

「—————……………」

あくまでも冷静なサユカは瞬時に公園の外、住宅街に目をやった。

公園から五十メートルほど離れている一つの住宅。その屋根の上には、一人の若い男がいた。

手には、長さが一メートルを超すスナイパーライフルが。

彼はそのライフルのスコープを覗き込み、ニヤリと不敵な笑みを浮かべていた。

どうやら廻天はあの青年に狙撃されたらしい。

「……………おいおい!なんなんだアイツはよ!」

男も彼の存在に気づいたようだ。

「……………」

サユカは青年に目をやったまま、男に声をかける。

「三十万弁償」

「……いやいやいや俺のせいなのか!? つーか今はそれどころじゃないだろ!？」

「なら後で請求する」

「やめてえ」

「泣くな。男なのにみっともない」

「じゃあ請求取り下げて？」

「それは却下す————」

唐突に言葉を切ったサユカは、身を投げ出してすぐさまその場から離れた。

「お？」

男は首を傾げる。同時に足のつま先に硬い何かが触れた。

「や？」

触れた何かは、真っ黒で丸っこい形をしている。男はそれに見覚えがあった。

といっても、実際に見たことがあるわけではなく、漫画やアニメ、ドラマや映画でよく目にしたことがあるだけだが。

その用途は主に、何か硬い物を破壊する、もしくは敵を攻撃ため

に用いられることが多い。

「……って説明してる場合じゃねえええええい！！！！早く逃げな」

男の声を遮るように、公園内に爆音が響き渡る。

ヒカリと男はその手榴弾の爆発から逃げ切れず、どこかへ吹っ飛ばされたのは言うまでもなかった。

「あ、そうそう、一つ言い忘れてた」

鈴奈はポン、と手を叩いてそう言い、キョウスケを出してくれ、と続けた。

————キョウスケさん、出番ですよ

————んあ？マジで？

「ほい、替わったぞ……で、何なんだ？」

鈴奈は余計な前置きもせず、単刀直入に言い放った。

「お前に女難の相が出ている。それもかなり凶悪なのが……ださ」

「ださ？」

「桜からだよ。桜がそう伝えてくれって頼んできたんだよ。どうも

アイツ、占いが出来るらしいぜ？」

「…………それはどうも、伝言お疲れ様」

「やかましい。労をねぎらうんならもう少し愛想よくしろ馬鹿」

「うるせえ。この顔は生まれつ————」

直後、後ろから爆音が響き渡った。

「うお！？何だ！？」

ビクリと身体を竦ませ、辺りに目配せする。
同時に、龍夢が叫んできた。

————キョウスケさんっ！！後ろです！！

————おおお？何だよいきなり…………後ろ？

首を後ろに回す。

後ろ約四十メートル先の木の辺りに小さな爆発が起き、漆黒の煙を立ち上らせているのが見える。

————おいおい、もしかしてまた『オリジン』の襲撃じゃねえ
だろうな…………

————そこじゃありません！！上です！上！！

言われたとおり上を向く。その時ようやく龍夢が何を指しているのか理解した。

空から一人の少女がこちらへ向かって落ちてきている。あの爆発で吹き飛ばされたのだと判断できた。

———受け止めてください!!

———無茶言うな!俺はただの人間じゃ!!

———私が魔法でフォローします!!

葛藤している間に、少女はもう目の前まで迫ってきている。

「ああああもう!!」

必死の思いで構えを取り、少女を腕と体で受け止めた。

「くうっ!」

少女への衝撃を和らげようと身を後ろへ反らし、尻餅をつく。
龍夢が思念でサポートしたおかげか、それほど衝撃はなかった。

———おみことです

———……………どうも

キョウスケは鈴奈がただ見てるだけだったことに、軽く怒りを覚えたが、今はそれどころではないので無視した。

「……………」

落ちてきた少女————ヒカリはゆっくりと目を開いた。
爆発の衝撃でまだ辺りがぼやけて見える。

しかし、誰かが自分を受け止めてくれたことは分かった。
目の前には自分を覗き込んでいる誰かの顔がぼんやりと見えている。

「あ、あの……ありがとうございます」

とりあえず感謝の言葉を述べる。

「……そっちこそ大丈夫か？」

相手は自分の身を案じてくれた。

「はい、大丈夫で……す？」

相手の声に少し戸惑った。

———今の声は……もしかして？

徐々に視界がハッキリし、目の前の顔に焦点が合った。

「……」

ヒカリの顔が真っ赤に染まるのに、それほど時間はかからなかった。

第三十五話 逆転シリーズ（前書き）

意図的に逆転裁判みたいなサブタイトルにしましたが、自分は全くプレイしたことはありません。

第三十五話 逆転シリアス

「とりあえずケガはないみたいだな」

突然飛来した少女、ヒカリを見て鈴奈の第一声がそれだった。

キョウスケ達は知らないが、損傷がまるでないのは、

ヒカリが手榴弾から距離的に離れていたため、そしてその手榴弾の火力もかなり抑えられていたためである。

ちなみにあの男はすぐ目の前の爆発に巻き込まれたので、損傷どころか生死すらも不明である。

「まあ意識の方は天の彼方へぶっ飛んでるみたいだけどな」

次いで言い放ったのはそれだった。

そんな言い方があるか、とキョウスケは言いかけたが、

彼女の真っ赤に染まった顔や、焦点が合わず、そこらを泳ぐ視線を見れば、誰でも同意し得るので口に出せなかった。

なぜ彼女がそうになっているのかは疑問だが。

————キョウスケ！早く起きてくださいっ！！

————おおう！？今度は何だよ！つかお前前話からずっと怒鳴りっぱなしでうるさい！

———また来ます！早く逃げなさい！

———……へ？来るのに逃げるのか？というか何が来るんだよ？

残念ながら答えは龍夢の口からではなく、目の前へ大量に降ってきた。

降ってきたそれは、どれも真っ黒で丸っこい形を———

———ええいまったく！！いちいち長ったらしい！！

愚痴りながらも龍夢はキョウスケから身体の主導権を奪い、ヒカリを抱え直してすぐさまその場から一心不乱に退避する。

直後、後方から激しい爆音と熱風が襲いかかってきたが、なんとか吹き飛ばされずに済んだ。

だがこういうことか、手榴弾は絶えることなく次々と降り注いでくる。

まるで公園から立ち去ることをを強制されているかのようにだ。

———くっ………キョウスケ！鈴奈は！？

———アイツならお前が動く前にもう逃げてったぞ？

———もう！あの人ったら！！

そうこうしている間にも手榴弾の雨は襲い掛かってくる。

やむを得ず、龍夢は公園を後にした。

「・・・・・・・・よし」

サユカは電信柱の頂上で、独り言のように呟く。
瞳には、爆風で吹き飛んだヒカリをキョウスケが受け止め、公園を去っていくまでの一部始終がハッキリと映っていた。

彼女は大量の手榴弾を右腕で抱え込むように持ち、残る左手で一つの手榴弾を手の平で弄ぶように転がしている。

しかしサユカから油断や余裕といったものは感じられない。
彼女から感じ取れるのは威圧感。

それも、あのスナイパーライフルの男に向けられている。

「さて・・・・・・・・一つ質問をさせてもらうぞ。何故私の邪魔をする？」

男に冷たく鋭い視線を投げつける。

しかし男は屋根に腰を下ろし、ライフルを抱きかかえ、サユカと同じ視線を投げ返す。

「なあユウキよ？」

「ぐっはあ!!」

爆風に煽られ、ナオキは滑り台の支柱に激突した。

口から苦痛をもらし、そのままズルズルと滑り落ちてうつ伏せに倒れてしまった。

「ナオキ二等兵！」

アイは隠れていた茂みから身を現し、身を屈めながらナオキに駆け寄る。

ナオキはごふっごほっ、と血を吐いて激しくせき込んだ。

「ぐん……そ……」

声を出すたびに彼の口内からは止めどなく血があふれてくる。

「馬鹿者！！喋るんじゃない！！」

アイはしゃがみ込んで彼の顔を覗き込む。

「ぐん、そう……聞いて……くだ、さい……」

「喋るなど言っている！！黙れっ！！」

ナオキはそれでも言葉を続けた。

「軍曹だけ、でも……逃げ、て……ください……」

辺りは燃え盛る炎と立ち上る煙で埋め尽くされつつある。今ならまだ脱出は可能だ。

しかしそれは、ナオキを見殺しにするのと同じだった。だがアイはそうしなかった。否、そうできなかった。

「お前を置いて行けるか！！ほら！さっさと立て！」

そう言ってナオキの肩を持つが、体格に差がありすぎる。ナオキを立ち上がらせるところか、持ち上げることすらできない。

アイは己の無力さに腹を立てた。齒を食いしぼり、ひたすら力を込める。

ナオキは彼女を振り払い、その無意味な行動を止めた。

「俺は……もう、無理で、す……」

そう言うとナオキは懷に手を伸ばし、そこから小さな三日月のアクセサリーを取り出した。

手のひらに収まるほどの大きさで、まるで本物の月のように輝いている。

「これ……親の形見、なんです……軍曹、持って行って……ください……」

震える右手で三日月を必死に掴み、アイへ腕を伸ばす。

「そんな……そんな物貰えるか!!」

そう言って彼の腕を無理矢理押し返す。

しかしこれくらいで引き下がるナオキではなかった。

「軍曹……俺からの……最初で、最後のお願いです……どうか、受け取ってください!」

再度アイへ向け、押しつけるように勢いよく右腕を伸ばした。

その瞬間、むにゅ、という擬音とともに、やわらかな感触がナオキの右手を稲妻のように駆け抜けた。

「……あり?」

ナオキは手を伸ばしたままの体勢で上半身を起こし、アイへ視線を向けて何が起こったのかを確認した。

三日月を握りしめた己の右手は、傍らでしゃがみ込んでいるアイの慎ましい胸に突き当たっている。

「…………や、あの、これは事故です事故—————」

数秒後、本作第三十一話のラストと酷似した強烈な打撃音とナオキの断末魔が町内に響き渡った。

第三十五話 逆転シリアス（後書き）

こんなオチだけど反省はしていない。ちなみに親の形見とか、そういうのは全部ウソなんで。

両親はたぶん生きてるんで。

このシリアスな雰囲気そのものがギャグなんで。

第三十六話 黒い雨（前書き）

夏休みもあと僅か。

・ ・ ・ ・ ・
まああまり関係ありませんが。

第三十六話 黒い雨

「『何故私の邪魔をする』だと？」

屋根の上でエイジはサユカの言葉を確認するかのように繰り返した。サユカは無表情なまま、その様子を眺めた。

ちなみに持っていた手榴弾はもう仕舞っている。どこへ仕舞ったのかはどうか聞かないでいただきたい。

彼はふっ、と口元を歪め、スナイパーライフルを置いてこう続けた。

「そこにお前がいるから邪魔するのだ」

「そこに山があるから登るのさ、みたいに言ってるがまるで面白くないな」

「まったくだな……分かってるなら言うなよ、とか突っ込んではいかんど、画面前の諸君」

「それとここからは結構グダグダとした展開だから、読み飛ばしてもかまわんど、画面前の諸君」

ふははははは、と二人は朗らかに笑い声を周囲に飛ばした。

次の瞬間、二人の姿は消え、サユカはサバイバルナイフ、エイジは小刀を手にし、空中で切り結んだ。

火花が散り、二人は弾かれる。

「本っ当に貴様は最上の外道だなあ！！ああ！？エイジィ！！！！」

そう言ってサユカは再び電信柱の頂に着地。

「それならお前は最高の鬼畜かなあ!! ええ!? サユカア!!!!」

言い返してエイジも再び元の屋根上に着地。

「チッ! いつもいつも貴様は私の邪魔ばかり!! 私に何か恨みでもあるのか!!」

「ハ! 忘れたとは言わせんぞ!! あの時お前がワシに味あわせたあの屈辱を!!」

「やかましいわあクソガキどもっ!!! 人ん家の上で何やらかしとんじゃああ!!!!」

民家の一つの窓からどこぞの禿げた爺が顔を出し、二人を罵倒した。

「—————ああん?」

案の定二人は半ば血走った目を大きく剥いて爺を見下ろす。

「や……そのお……なんでもねえです……」

爺の顔は青ざめ、二秒で引っ込んだ。

エイジは先ほど屋根に置いたライフルを再度持ち上げ、スコープも
のぞかずにそのまま
サユカへ銃口を向ける。

しかし電信柱の上にサユカはいない。すでに彼女はエイジよりも先に攻撃を仕掛けていた。

「—————上!!」

反射的に上を向く。

当たりだ。サユカはエイジの上を飛んでいた。

しかしはずれでもあった。瞳はサユカとともに太陽も捉えていた。

「くうっ!？」

日光に目が眩み、顔を伏せてしまった。

その隙についてサユカは自分に襲い掛かってくる。

そう直感したエイジはライフルを上に向けて、乱射した。

サイレンサー

消音器を取り付けているので鼓膜が吹っ飛ぶような轟音は鳴らない。だがかなりの衝撃がエイジにのしかかった。しかしそれにかまっている暇はない。

すこしでもひるませなくては己の身が危ういと自身の脳が告げている。

しかし彼の直感もはずれた。

サユカは彼の後方、それもあり離れた屋根に着地していた。

始めから彼女はこのつもりで跳んでいたのだ。

しかし――――

――――いったい何を狙って？

エイジはそれが理解できなかった。

答えは目の前に降ってきた。それも大量に、雨のように降り注いできた。

読者の皆様ならもうお分かりだろう。それらは全てピンの外れた手榴弾だった。

「安心しろ――――」

絶望に包まれた最中、エイジは確かに彼女の声を聞いた。

「————火薬の量は減らしてないから」

いたずらに成功した子供のような満面の笑みでそう言ったのを。

一方龍夢達は、公園を出た後、広い並木道に足を運んでいた。

龍夢はまだあまり紫野葉町の地形を把握できていないので、ここに来れたのはほとんど偶然だった。

この並木道は紫野葉町の数少ない見所といった場所であり、木も道路も丁寧に整備されている。

そのせいか、並木道に沿ってあらゆる店や喫茶店などが建ち並んでいた。

人通りも、他よりは比較的多い。

「ここまで来れば安全ですかね」

足を止め、自分が駆け抜けてきた道を振り返り、龍夢は呟く。

「やれやれ………とんだ災難だったぜ、まったく」

龍夢の肩に手を乗せ、寄りかかるような体勢で鈴奈はため息交じりに口にした。

「……………って何さりげなく一緒に逃げてきたみたいになんてですか離れなさい鈴奈っ。」

私は抱えているんですよこの娘をっ。これ以上増やさないでください負担をっ」

「じゃあ下ろせばいいじゃん。もう安全なんだろう？」

「間違ってはいませんが真っ先に逃げたあなたがそれを言うのは筋違いですっ」

言いつつも龍夢は抱えているヒカリを立たせるように腕を傾ける。

「……ほら、ここからはキョウスケさんの出番ですよ」

「……マジか？あ、ちょ、待………ったくもう」

有無を言わずに交代させた。

「……ほら、立てるかヒカリ」

「は……はい、大丈夫です」

ヒカリはようやく思考がまとまり、返事をした。

顔色はまだほんのりと赤みを帯びたままだが、そっとコンクリートの地面に足に乗せた。

「……あれ？」

ヒカリの、何か違和感を覚えた声に、キョウスケは軽く首を傾けた。

「足でもくじいたか？」

「……念のために言っておきますが、私は丁寧に運びましたよ？」

——いや、聞こえねえから。無理して出番作ろうとすんな

「今……私のこと、ヒカリって……言いました？」

キヨウスケは、なんだ、そんなことか、と息をつく。

「忘れてると思ったか、委員長？」

——委員長——

その言葉を皮切りに、徐々にヒカリの記憶が鮮明に浮かび上がってきた。

第三十七話 落ちる本と回る私（前書き）

今思えば、メインタイトルをもっと真剣に考えて付けたらよかったと後悔。

・ ・ ・ ・ ・ 変えちゃ駄目かな？

第三十七話 落ちる本と回る私

現在から一年前、五月の紫野葉中学校でのことだった。

『————長、委員長』

『————ふえ!?!』

バツと顔を上げると、縦に積み重なった十冊ほどの本を両手に抱えた少年が自分を見下ろしていた。

どうやら自分は、受付のカウンターで居眠りをしてしまったようだ。

周囲には規則正しく平行に並べられた本棚と、いくつかのテーブルと椅子が見える。

少女はやっと思いい出した。ここは図書室だ、と。

窓からは夕日が差し込み、もうすぐ日が暮れることを表していた。

『ふえって何だよ……委員長、この本どこに置いときゃいいんですか』

委員長と呼ばれた少女は、まだボンヤリとしつつも少年————副委員長に、とりあえず返事をした。

しかし返ってきたのは、少年の待っていた答えとはかけ離れたものであった。

『……どうしたの? その本』

少年は呆れたようなため息を吐いた後、面倒臭そうな声で説明した。

『これ、新しく入荷した本ですよ……配置するのは明日だから、それまでどこに置いとけばいいんだって訊いてるんですが？』

少女はハツとし、少し顔を赤らめて、キョロキョロと辺りに目配せする。

『じゃ、じゃあ……じゃあ……この辺りに置いてくれる？』

少年はそれに素直に従い、本を目の前のカウンターへ置き、

『それじゃ、俺は帰りますんで。戸締まりは忘れないでくださいよ？』

と言って踵を返した。

少女も、

『うん。お疲れ様』

とだけ言った。

少年が図書室を去った後、少女は自分の頬を両手で叩き、僅かに残る眠気を吹き飛ばした。

そして、最後の仕事を片付けるために、立ち上がる。

少女は図書室を出てカギを閉め、傍らに積み上がった本を持ち上げた。

さつき少年が持っていたのとは別の本。

これらは全て傷んだ本であり、処分しなければならぬのだ。

少女は処分の方法は知らないが、問題はない。

処分を承る先生に渡せば、それで自分の図書委員長としての仕事は済むのだから。

でも――――

『重い………』

積み重なった本は、十代半ばの少女では少しばかり手に余る重量を所有していたのだ。

さつき少年が持っていた本よりも分厚いので、分かってはいたのだが。

しばらく持っていただけで、僅かに腕が痺れてきた。

先生は職員室にいたのでそこまで運ばなくてはならないが、このまま運ぶのは危うい。

誰かに助力を乞おうにも、今は放課後なので、全ての生徒は部活に励む、あるいは校舎を出てしまっている。

先生なら校舎内にはいるだろうが、不幸にもこの廊下には全く姿が見えない。

『………もう！しつかりしなさい！これぐらい………私一人で出来なきゃ！』

私は委員長なんだから、と続け、少女は一人で廊下を一步ずつ慎重に歩いていく――――

が、早くも限界が近づいてきた。

図書室は二階、職員室は一階にあり、少女は今、一階への階段の踊り場にいた。

階段は避けては通れない難所となっているのだが、少女は果敢にも、一度も休憩を取らずに階段へ挑んでいた。

それが仇になった。

足下と本の両方に気を配るのも、それなりに集中力が必要である。それもまた、疲労の原因の一つかも知れない。

脳もあきらめモードに移行している。手も、感覚が失われつつある。大袈裟に聞こえるかも知れないが、事実なのだった。

『これぐらい・・・私一人で・・・!!』

もう一度、自分を叱咤激励する。

階段を降りたすぐ先に職員室があるので、階段を降りれば勝利だ。

そう思うと、再び気力が湧いてきた。

よし、と呟き、階段を一段ずつ降っていく。

そうして階段の半分を降りきったたその時、ぐらりと足下が揺れた。

『わ————!!?』

階段を、踏み外してしまった。

何とか踏みとどまろうとするも、勢いは止まらず、体が前へ押し出されていく。

両手にのしかかっていた圧力が消え、本が宙に舞い、ふわり、と、全身が宙に浮いた。

頭の中が白で塗りつぶされていく。そして、瞳に映る景色も、ぐらりと回る————

第三十七話 落ちる本と回る私（後書き）

次話は明後日投稿・・・の予定。

第三十八話 夕焼け（前書き）

恋愛・・・自分が最も不得意とするジャンルです。

嫌いではないですが、難しいんです、書くの。

まあこれはあくまでも、学園コメディアクションファンタジーもどき（？）なんです。

修正

魔導兵器の名称を変更しました。

理由はその内分かと思っています。

第三十八話 夕焼け

ふと気がつくとは自分は、一階の廊下で仰向けに倒れていた。でも――何か違和感がある。

確かに自分は階段を転げ落ちた。衝撃も感じたし、確実に落ちたと思う。

しかし、激痛はやってこない。

もしかして自分は頭を強く打って、どこかおかしくなったのではないか。

そんなことが脳裏を過ぎったとき、

『・・・・・・・・くう・・・・・・・・っ』

という苦痛に必死で堪えている声が――聞こえた。それも、下から――下から？

『――ひゃあっ?!?!?』

水をかけられた猫のように飛び上がった。

バタバタと立ち上がって、自分が倒れていた地点に目を向ける。

少女の瞳に最初に映ったのは、先程図書室で別れた副委員長の顔だ。彼は目をつぶり、口も固く結んで、声を抑えている。

自分は階段から落ちる瞬間、彼に受け止められたのだ、と推測したが、今はそれどころではない。

『キョウスケ君!?!だっ、大丈夫!?!』

とっさに膝を突いて屈み、答えられるのかは不明だが、問う。

副委員長ことキョウスケは、ゆっくりと表情を緩め、上半身だけ起

こす。

どうやら、ようやく痛みが和らいだらしい。

『俺は大丈夫ですけど……委員長は?』

『あ、うん。私も平気……』

少年はそりゃなによりで、と言って立ち上がる。

『おい、本は?』

少年の視線を辿ると、そこにはたくさんの本を乱雑に抱え持った少女がいた。

彼女のことは見知っている。キョウスケの妹、アイだ。

自分が投げ出してしまった本を、何とか全て受け止めたのだろう。

『ん、と……なんとか、つと!』

アイの足がふらついた。

本を落とすまいとバランスを取っているのだろうが、重さもあるのでもう保たないだろう。

それを見てとっさにキョウスケがフォローに入る。自分も数歩遅れて彼に続く。

『キョウスケ君……まだ帰ったんじゃないの?』

帰路の途中、そんなことを訊いてみた。

答えはアイから返ってきた。

『私を待ってたんですよ。いっしょに帰るのが、私達の掟なんです！』

掟、と聞くと少々物騒かも知れないが、アイの声だと、そんなことは微塵にも感じられなかった。

そうなんだ、と返すと、キョウスケが頭を押さえ、頭痛を覚えたような素振りでこう言った。

『アイが勝手に言ってるだけですよ……まあ逆らったら晩飯抜かれるんで、仕方なく従ってますがね。

というか委員長……あれだけの重い本、一人じゃ持てないってコト分かってます？』

『あ、それは、だって、私……委員長だし……』

自分で達成できなかったという悔しさが、急に心を締め上げてきた。でもアイは、元気よくこう言った。

『そんな時は、お兄ちゃんに手伝ってもらえばいいですよ。

だってお兄ちゃん、副委員長なんだから。

だから困った時は、お兄ちゃんにいつでも言うてくださいね！』

少女の口から、あ、という、まるで今初めて知ったような声が出た。

『ちよい待て……それお前が言うことか！？』

『えー？ いいじゃん、私が言っても』

『いやおかしい！そしてよくねえ！』

『どっちが言っても同じだよ!』

『違うわ! 絶対!』

口論する兄妹。

見ていると、どれだけ二人の仲が良いのかが、直に伝わってくる。悔しさなんて、いつのまにかどこかへ飛んで行ってしまった。

『……うん。なにかあったらよろしくね、キョウスケ君』

自然な笑みが彼女の顔を彩る。

直後、唐突に口論は中止され、兄妹も微笑んだ。

『おう、俺にいつでも言ってくれ』

『……それ私がさっき言った』

『だからさ、これは俺が言うべきなんだって』

『いやいや、たいして変わらないって』

『ん? 兄に逆らうというのか? かくなる上は、鉄拳制裁だぜ?』

『そんなこと言っちゃっていいのかな? 今お兄ちゃんは、晩ご飯の心配をするべきだよ?』

『ちょ、ちょっと! 二人ともストップストップ!』

夕焼けが、帰路の三人を優しく照らす中、兄は拳を固め、妹は身構

え、少女は―――――楽しげに笑う。

14歳の紫野葉中学生、ヒカリ。

この日、キョウスケへの淡く切ない恋心は芽を出した。

第三十九話 ピッチャー・ヒカリ（前書き）

知人「葵とアイって名前ほとんど一緒じゃね？」

知人「前話が三十九話ってなってるぞ？なにやってんの？」

・・・もうやめてえ

第三十九話 ピッチャー・ヒカリ

「まあ、あれだけのことがあったのに、忘れてるってのもどうかと思うが……」

とにかく、ちゃんと覚えてますよ、委員長」

キョウスケは軽い口調で話しているが、ヒカリは内心ホッとしていた。

今までは自分のことなど忘れられているという前提で、サユカと慎重に行動してきたのだったが、
覚えているのならもっと積極的に動くことが出来るからだ。

いや、そうではない。彼が自分のことを覚えている————ヒカリは、それが嬉しいのだ。

何はともあれ、これは大きな収穫だ。

ヒカリは心の中でガッツポーズを作った————つもりなのだが、嬉しさのあまり、実際にポーズを取ってしまった。

どうした、とキョウスケに問われたが、な、なんでもないよ、とごまかした。

「おいおい何？二人とも知り合いだったのか？」

鈴奈も意外そうに目を細め、腕を組む。

————私もてっきり初対面かと………実際ヒカリさんも、どこかよそよそしい所がありましたから

龍夢も少しばかり驚いていた。

————まあ、クラス一緒になったこともなかったし、お互いの

家も遠かったし、

図書委員として一緒だったのもその一年だけだったし……忘れられてると思われてもしょうがないかな

二人はうんうんと縦に首を振る。

鈴奈は物珍しそうにキヨウスケとヒカリを交互に見比べている。しかしその一方、ヒカリは摩訶不思議な現象に見舞われていた。

——なかなか面白い展開になってきたな

「え？」

——今、サユちゃんの声が——？

キヨロキヨロと首を回す。

しかし辺りにはサユカの姿どころか、人影すらもない。

「どうした？」

「えっと、今……声が……」

キヨウスケに説明を試みようとしたが、空耳に近い感覚だったのでそれは難しかった。

———というか……今の空耳だったんじゃない？

———いや、空耳ではないぞ

「わあっ！」

ヒカリは両手で頭を押さえ、飛び上がった。

それを見たキョウスケはいつたい何事だ、と言わんばかりに構えを取り、同時に彼女の奇行に驚愕した。

鈴奈は大して反応を見せなかった。

「おおおい！マジでどうした！」

「今！声！声が・・・！！！」

今度はハッキリと聞こえた、サユカの声が。

———落ち着け。奴には聞こえん。というか、お前の脳に直接話しかけているのだから当然だ

———脳！？何それ！？私一体どうなっちゃったの！？

———どうもなってない・・・というか、まず、落ち着け

言われたとおり、深呼吸を繰り返して荒い息を整え、自分を落ち着かせた。

ヒカリが落ち着いた後も、キョウスケはまだ彼女を心配していたが、本当に大丈夫、という言葉でとりあえずキョウスケも落ち着いた。

———よし・・・ではまず、キョウスケに『お礼をさせてください』とでも言うんだ。

お礼という大義名分を立てれば、一緒に行動しやすくなる・・・
なるべく自然にな

——りよ、了解……！

「————キョウスケさ……じゃなくてキョウスケ君！」

自分を覚えているのなら、当時のように君付けで呼んでも構わないだろう。

「……何？」

まだ少し不審がる様子もあるが、キョウスケは応えてくれた。

「あの……さっき助けてくれた、お、お礼をしたいなく、なんて……」

愛想笑いを浮かべ、彼女なりの自然を表現する。

「是非！」

言ったのは鈴奈だった。

「お前じゃねえっての。ってかお前は何もしてねえだろが」

透かさずキョウスケが彼女の頭をパシッと平手で叩く。

直後に蹴りで反撃されてしまったが。

「ど、どうかな……？」

羞恥心がまわりついている所も、端から見れば微笑ましい。だが、彼女にとっては真剣そのものの決め球であった。

「いや、別にいいですよ、お礼なんて」

ピッチャー強襲ヒット。

でもヒカリはあきらめない。

「で、でも……それじゃあ私の気が済まないよ!」

剛速球を叩き込む。

「それほど大したことをした訳じゃないですよ」

あっさり打ち碎かれた。

「あー……そうだよ……ね?」

……馬鹿。そこで引き下がってどうする

ため息混じりにそう言われた。

——ええっ?でも……自然に行くと、こう返すしか……?
……?

——……まったく、お前という奴は……なら、こう言うといいだろう

サユカはニヤリと不敵な笑いを浮かべた……ような気がする。
そして呟くような小声で話した。

——……それで本当に大丈夫?

——ヒカリ——私を、信じる

確信に満ちたその言葉に、ヒカリも拳を固めて決心する。

「————あのっ!!」

一歩前へ足を踏み出した。

そして、この一言に思いの丈を、彼女の全てを込めた。

「超高級菓子屋『海林亭』^{かいりんてい}の最高級コーヒーゼリーおごりますから
っ!!!!」

「是非っ!!!!」

キョウスケは一瞬で心変わりした。

鈴奈と龍夢が盛大にため息を吐いたが、今の彼にはまるで聞こえて
いなかったとさ。

第三十九話　ピッチャー・ヒカリ（後書き）

キョウスケと龍夢は、千年アイテムを手にしたどこぞの少年の如く、互いの姿が見えています。

なので相手の表情が見えているのですが、サユカの場合は声だけなので表情までは分かりません。

でも精神内？での龍夢の姿はキョウスケと同じです。

これも千年アイテムを手にしたどこぞの少年と同じだと思ってください。

第四十話 激甘スイーツ&SEE（前書き）

本編が中途半端に終わってます。
続きは・・・・・・・・できれば明日。

第四十話 激甘スイーツ&SEE

小難しい話は省き、大まかに説明させていただく。

『海林亭』とは早い話、全国に支店を出す、有名な超高級菓子屋なのである。

世界中の菓子職人、パティシエを雇い、和洋、そしてそれらを織り交ぜた様々な菓子が売りだ。

しかもただの菓子屋ではなく、店内には喫茶店のようにカウンターや椅子やテーブルなんかそろっており、

出来立ての菓子を購入してすぐそこで食べる、なんてことが出来るのである。

歴史は浅いが、その菓子は世界の誰が食べても感嘆の声を上げるとまで言われる。

しかしそれだけに値段が猛烈に高いのも、この菓子屋の特徴であった。

キョウスケもこの菓子屋のコーヒージェリーが大のお気に入りだ。半分中毒になっているのかも知れない。

しかし値段の高さから、アイに海林堂の菓子の購入を禁止されていた。アイ曰く、『ダメ、ゼツタイ』だそうだ。

買えるのは一年に一度、あるかないか。キョウスケもこの世を十六年生きて、たった五回しか口にしたことはないのだ。

なので————しかし、だからといって————

————菓子を動機にするなんて…………相手の厚意をもっと重んじなさい、キョウスケさん

現在、キョウスケ達は隣町、紅明町の海林亭支店にいる。

キョウスケは、表で高価そうな容器に入れられたコーヒーゼリーを口に含み、裏でギロリと龍夢を睨みつけた。

———黙れ。俺の至福の時を邪魔する輩は誰であろうと容赦せん。たとえお前でもな

目を光らすキョウスケに、五百年近くを生きてきた龍夢は、ほんの少しだけ、身を強張らせた。

———ま、まあ、確かに大変美味ではあります・・・

二人はお互いに感覚を共有しているので、龍夢もキョウスケの食している物の味が分かる。

———ですが———

龍夢の視線はキョウスケの正面の座席に座るヒカリ———ではなく、その隣でチーズケーキをほおぼる鈴奈に向けられた。

———何で貴方も食べているのですかっ！

憤怒の念を鈴奈へ送る。しかし彼女はそれを無視し、左手を挙げる。

「すいませーん、『激甘マロングラッセ』追加してください」

———止めなさい鈴奈っ！！

「あ、それと『海林堂特製マウンテンチョコプリン』もお願いしまーす」

———止めんかーっ！！！！

———るっさい。次怒鳴ったら二度と喋れんようにするぞ

———……はい……

まさに蚊の鳴くような返事を返し、龍夢は引っ込んだ。

キョウスケは特に気にする様子もなく、またコーヒーゼリーをスプーンで口に運ぶ。

龍夢は最後に一度だけこっそりとヒカリの様子を窺うと、彼女はキョウスケの食べっぷりを、何故か嬉しそうに眺めていた。

龍夢は眉をひそめて首をかしげた後、今度こそ本当に引っ込んだ。

———私はもう口は出さんぞ。ここからはお前の技量で勝負しろ

———うん………わかった！

先ほど頼んだマロングラッセとプリンが運ばれてきた頃。

ヒカリは静かに深呼吸をし、キョウスケをしつかりと見据えた。

「あの………キョウスケ君………！」

「ふあい、なんれひよ？」

スプーンを咥えたまま、目だけをヒカリへ向ける。

ヒカリは僅かに赤くなり、つい反射的に、そして目をそらすように、ほんの少しだけ俯いた。

「えと・・・・・・・・この子とは・・・・・・・・」

「鈴奈」

傍らの鈴奈がそう補足する。

「・・・・・・・・鈴奈さんとは・・・・・・・・どういう関係・・・・・・・・？」

恐る恐る、慎重に、尋ねた。

SEE『俺、再登場!』

エイジ（以下エ）「さて！今回で二回目となったショート・イビル・アイ！略してSEE！

今回はただの愚痴になってしまったが、今回からは表ではけっして話せない、あんな話やこんな話をしていくぞ！

というわけで今回のゲストは優等生のマオだ！」

マオ（以下マ）「どうも・・・・・・・・ってかエイジ、何でそんなうぜえテンションなんだよ・・・・・・・・

つか何、お前が司会なんか？つか、本編でお前死んでんじゃねーの？」

エ「おおっとう！初っ端から怒涛の質問ラッシュ！だがワシは2000字に達するまでどこまでも付き合うぜい！」

マ「・・・・・・・・まあいいや。それよりエイジ」

エ「なんだ!？」

マ「俺の出番もう無し?」

エ「…………はい?」

マ「いや、だってさ、鈴奈がキョウスケと二度目に会うとこさ、完全に俺、参上!の空気だったじゃん。

なのに何?勝手に家に帰ったって…………なんでそうしたのよ?そのまま再登場させりゃあよかったのに…………

しかもヒカリとサユカなんて主役級のキャラ二人も登場させて…………俺の再登場遠のいてんじゃないん…………」

エ「あ、えーと…………まあ…………お前まだマシなほうだよ?ユウイチなんてほんの数話しか出てないし。

それに対してお前は魔法に目覚めたじゃないか。ナオキなんて記憶も消されてんだし」

マ「…………確かに」

エ「そのうちキョウスケのピンチにさっそうと登場して共闘、なんても有り得るぞ?

ついでに、桜ともなんかフラグ立ってるっぽいし、むしろ恵まれていると俺は思うがな。

桜かわいいだろ?ん?どうなんだ?」

マ「そ…………そうだな」

エ「よし!2000字も超えたし、ここらでそろそろ終わるか!

というワケで、今回のゲストはロリコンのマオでし——ぐえ
あっ！！！」

第四十一話 トリプルマウンテン（前書き）

なんとかか今日中に投稿成功しました。
それではどうぞ。

第四十一話 トリプルマウンテン

「ただの知り合い」

キョウスケと鈴奈は口をそろえて答えた。

「昨日初めて出会ったんですよ。と言っても……知り合いの知り合い、というのが正しいですかね」

「だから別に友達ってワケでもないし、一応言っておくが、恋仲なんて有り得ない。というかもはや論外」

二人は互いに向き合って、不敵な笑みを浮かべた。

息は合っているが、もちろん友好的だとかそういう意味はまったくない。むしろ逆の意味なのも言うまでもない。

「それより————」

キョウスケはヒカリの前に置かれた小さなショートケーキに視線を落とした。

「奢られてる俺が言うのもなんですが……もっと食べないんですか？」

「……え？」

キョトンとした表情でヒカリがそう漏らした。
キョウスケは水の入ったコップを持ち、続けた。

「中学ん時、ものすごい量の弁当食べてましたよね？」

「————！！！」

それを聞いた瞬間、ヒカリの顔がものすごい勢いでものすごく紅潮した。

鼻血だとか、顔から火が出るなんてレベルじゃない。頭からマグマでも噴出するんじゃないかというぐらいだ。

「お、お、おおお覚えてたのお！？！？っていか何で知ってるの！？！？」

ガタンとテーブルを揺らし、パクパクと口元を震わせた。

「や、何でというか……紫野葉中出身なら知らん人いないんじゃないっすかねえ？」

毎日机を埋めつくさんばかりの大きさの弁当箱出してまし——
——」

「わああああやめてやめて忘れて忘れて今すぐ——！！！！！」

ブルンブルンと腕を振り回す。周囲の客が怪訝そうな視線を向けるのも気づいていない。

落ちつけ！クールになれヒカリ！と心の中の理性が叫ぶ。

まあ当然まったく効果がないのでわざわざ取り立てる必要もないのですが、一応念のためということ。

「————別に恥ずかしがらなくてもいいですよ、そんなこと」

そのキョウスケの一言で暴走状態にあるヒカリの腕がピタリと止ま

り、理性がようやく復活した。
一口水を飲み、キョウスケは続ける。

「他の連中は知りませんが、とりあえず俺は気にしませんよ、そんなこと」

うんうんと頷き、鈴奈も同感した。

「確かにそうだな。というか第一、そんなこといちいち気にしてたら窮屈だろ？あたしだってガンガン食ってるぜ？」

プリンを平らげ、マロングラッセに舌鼓を打ち、そして一言付け加えた。

「現在進行形でな」

また二人は互いに向き合って、不敵な笑みを浮かべた。

今度の笑みは……ちよっぴり友好的な意味も持ち合わせていた。

「だから、気にすることないですって」

「遠慮もな」

二人がそう締めくくった。

「……」

ヒカりはしばらく俯いて何か思案していたが、すぐに悩みが吹っ切れたような清々しい微笑みを見せた。

「うん……そうだよね！」

それに続くように、キョウスケと鈴奈も自然な笑みを見せた。

「それじゃあ……すいませーん！」

ヒカリは右手を高く、堂々と突き上げた。

「『海林堂特製超ジャンボビッグストロベリーパフェ』三つお願いしますー！」

二人は派手に椅子から転げ落ちた。

「ふむ……」

海林堂支店前の茂みの中、サユカは双眼鏡を下げて静かに目を閉じた。

「……後はヒカリ次第だな」

そう呟く彼女の口元は、どこか満足げな笑みが浮かんでいる。

先ほどまでその双眼鏡で覗いていたヒカリ達の笑みと、非常に酷似していた。

「さて、と……」

——帰るかな。この先の展開も気にはなるが……流石

にヒカリに悪い——うん？

その時、サユカの笑みが自嘲的なものに変わった。

——他人を気遣うなんて、珍しいこともあるもの
だな……

今度こそ本当に帰ろうと一歩足を伸ばした時、再びサユカの脳裏に
疑問符が浮かんだ。

……いや……ヒカリだけか？

足を止めてあごに手を当て、彼女には稀有なことに、こんなく
だらないことについて真剣に悩んでいた。

——ん口……変だな……一体なんで……？

しばらく眉をひそめていたが、サユカは結局、ま、いいか、と
呟いて踵を返した。

頭にはまだ疑問符が残り、妙な感じなのだが——

——これはこれで悪くない

第四十一話 トリプルマウンテン（後書き）

ベタ過ぎるオチに、心からお詫び申し上げます。

第四十二話 狼と犬とついでに蛇（前書き）

生きてますよ？

第四十二話 狼と犬とついでに蛇

太陽が最も高く昇った真昼。

キョウスケ達は既に店を後にし、そのまま紫野葉町に戻っていた。特に機嫌がよろしいキョウスケは、軽快な足取りである。

やがて自宅にたどり着くと、ヒカリに感謝と別れの言葉を述べた。
こんな具合に――――

「いやあ！今日はもう本っ当に素晴らしい一日だった！もう本っ当にありがとうなヒカリ！！」

――――・・・一日って・・・まだお昼ですが？

大袈裟すぎる割には十二分に心をこめたキョウスケの謝辞に、龍夢は少し苦笑い。

ヒカリはヒカリでいやいやそなたいたしたことじゃないよと手を振るが、その顔は曇りのない満面の笑みで彩られている。

最後にはビシッと親指を立てて、

「あ、もし今度何か困ったことがあったらな、俺に遠慮なく言ってくれい！」

――――ちょっと。なんだか押し付けがましいですよ

キョウスケの下心が丸見えなの言うまでもない。
ヒカリもそれに気づいているのかどうか不明だが、

「は、はい！よろしく願いします！」

とキョウスケの勢いに流されるように言葉を返していた。

その時はあたしも呼べよな、と傍らの鈴奈もコッソリキョウスケに耳打ちしている。

すると、これまた二人には希有なことにクスクスと忍び笑いを浮かべた。

和やかな雰囲気の中、一人だけ置いてけぼりを食らっている龍夢がここで一言。

———あのー、私帰って良いですか？

そう漏らした瞬間———ほんわかとした空気が灰色の光に切り裂かれた。

「鈴奈！こんな所にいたのか！」

何の前触れもなく突然灰色の体毛に覆われた狼が目の前に現れた――

———燈音だ。

それと同時に鈴奈の顔面が蒼白になる。

キョトンとする燈音は首をかしげた。

「ん？どうしたん……だ？」

その場にいた全員の視線が、ヒカリへと向けられた。

燈音はしまった、と心の中で舌打ちをする。

しかし、後の祭りだ。

「す」

ヒカリが口を開けたその時、彼女の視界から燈音を隠すように鈴奈がヒカリの正面に立った。

「やややヒカリ！違う！その、違うんだ！何かの聞き間違いだ！」

そう言って鈴奈が必死に誤魔化そうとする。

燈音のことが辺りに広がれば色々面倒なことになる。もしかしたら、魔法の存在が露見する可能性だってある。

もしそうなると鈴奈は自身の一族、『ネツァク』の長からきつい『お叱り』を受ける羽目になる。

『イエソド』がなんとか漏洩を防ぐだろうが、鈴奈としては、それだけはどうしても、絶対に、回避したかった。

その理由は―――――また今度。

「今のは……空耳！そう！ただの空耳だ！」

―――――そうです！狼が喋るなんてあり得ません！空耳です！

―――――いや龍夢、そこで言っても聞こえねえだろ。ってか何でお前まで？

鈴奈の必死のフォローに燈音も続く。

「そうだ！狼は喋らん！十中八九ただの幻聴だ！」

「いやお前が言っちゃ意味ねえだろが！」

さっきの雰囲気からどのような経緯を辿ればこうなるのか問いたく

なるほどの大騒ぎである、主に鈴奈が。
だが、ヒカリの反応は予想外なものであった。

「すごーいっ!! 今この子喋ったよね!？」

ヒカリは鈴奈のバリケードをすり抜け、燈音の目の前に屈み込んだ。

「ねえねえ名前は何？」

「はっ!？や、その……」

その素早さに流石の燈音もたじろぐ。
しかし彼女の瞳は爛々と輝き、好奇心を露骨に表している。

「ね! 教えてよワンちゃん」

「わ、わんちゃ……っ!？」

燈音は狼だ。まあ似たようなものなのかも知れないが。

———キ、キョウスケ! これはもしかしたら、何とか誤魔化せるかも知れません! 上手く合わせてください!

———………何で?

———何でって………

魔法の存在が公になれば世間は大騒ぎになる。
それぐらいキョウスケだって分かっているはずなのに、危機感の差が天と地だ。

説明しても無駄と判断した龍夢は、不自然なほど低姿勢になった。

———とにかくどうか、お願い申し上げます、キョウスケ様。何とか、話を穏便に……………」

そして頭を地に擦りつけるほど深く土下座。

———気持ち悪いな！……………分かったよ！やるよ！やるからやめろ。キモい

キョウスケは直ちに燈音に近寄って、ヒカリと同じ体勢を取る。

「このワン公の名前はな、燈音って言うんだ」

「どうね？何か格好いい名前だね。声も渋いし！」

「そうだな、中に大塚明夫さん入ってんじゃない？」

「ねえどうね君！スネークって呼んでも良い？」

「は……………い、いや、それは困る……………俺はおおか、や、その……………犬だし……………」

「え……………残念……………」

———頼んでおいて失礼ですが……………いったい何の話ですか、キョウスケ……………」

そんなわけで、なんとかたいした騒ぎにならずに済んだ。

キョウスケの鈴奈の奮闘と、辺りに通行人もいなかったことが要因だろう。

一方龍夢は、燈音に対するヒカリの適応力に大変驚かされていた。そのことをキョウスケに話すと、彼は大きく首を傾げたのだが。

最後に鈴奈は燈音のことを内密にするようヒカリに懇願した。
ヒカリは特に気にする様子もなく了承してくれたので、とりあえずは大丈夫だろう。

——— ってかさ、お前ナオキの記憶を消してたじゃん。あれやれば良かったんじゃない？

——— 無闇に記憶を操作するのは趣味ではありません。余程のことがない限りはあまり使いたくないのが本心です

——— あ、そ

第四十三話 後悔するのは

「————で、なんか用か、燈音」

ヒカリと別れ、彼女の姿の見えなくなった直後、一息吐く間もなく鈴奈は冷たく言い放った。

どうも自分に余計な手間をかけさせた事を恨んでいるようだ。しかしそれを聞いた途端、燈音の表情が一変し、苦虫を噛み潰したような険しい面持ちを浮かべた。

「……………なんか用か……………だとお!？」

かと思ったら、口から火でも噴かんばかりの勢いで絶叫する。

「朝っぱらから呼び起こして璃又と連絡取ってこいって言ったのは誰だっ!」
リーシャ

「あたしだっ!」

「分かってるのなら訊くなっ!」

堂々と返した鈴奈に燈音はさらに激怒。しかし反省はしないのが彼女の常だ。

だるそうに手をひらひらとさせ、こんなことを言う。

「あーもうわあったわあったご苦労さん。そんじゃもう帰っていいよ。あたしもそろそろ帰るから」

「帰るかっ!……………いや————」

不意に声の調子を下げ、表情が神妙なそれに変化した。それに伴い、龍夢の表情も燈音と同じように引き締められた。

「帰れない、と言わべきか……」

樂觀視していた鈴奈もそこでようやく、む、と口元を固く結んだ。一人だけ、状況が理解できていないキョウスケだけが、頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「え？ 帰れないって……何？ 家がガス爆発で吹っ飛んじまったか？」

ある意味鈴奈よりも樂觀的な発言に、他の二人と一匹は盛大にため息を吐いた。

今度はキョウスケ置いてけぼりにされていたが、当然誰も説明しようとはしない。

龍夢は、先程の恨みを晴らそうというのか、キョウスケに何を問われても頑として口を利こうとしなかった。

――後で覚えとけよテメー。ぜってー後悔させてやっからな

――果たして後悔するのはどちらですかね？

――あ、言ったな？ 後悔すんじゃねーぞコラ

――貴方は私を後悔させたいのかさせたくないのかどっちな

んですか

———馬鹿、両方に決まってんだろ

しばらく鈴奈は燈音と何かごによと話し込んでいた。
ややあって彼女らは何か結論を出したのか、改まった顔でこちらを
向く。

「そんじゃ龍夢……あとついでをついでのついでにキョウス
ケ。マオンコトも伝えたし、あたしらは行くわ」

結局鈴奈はどこかへ行ってしまうらしい。

キョウスケは半ば強制的に交代させられ、龍夢が表に出た。

「そうですか……では、桜さんをよろしくお願いしますね」

「任せておけ。『オリジン』に狙われたとしても、我々『ネツアク』
が彼女を守る」

「まあ、機会があつたら連れて来るわ。まあ楽しみにしてくれな」

「ええ鈴奈、楽しみにしてますよ」

鈴奈は頭の後ろで手を組んでケラケラと朗らかに笑う。

その碎けた笑顔が、彼女に一番似合っていた。

そこで龍夢が何かを思い出したように軽く手を叩いた。

「そういえば、まだ言ってますでしたね———公園での支援、

感謝しています。本当にありがとうございました」

ペコリと頭を下げる龍夢に、鈴奈はチラッと舌を出した。

「よせやい。照れるだろーが」

だが、まんざらでもない様子だった。

「さてと……あまり喋ってると日が暮れちまうかな。行くぞ、
燈音」

鈴奈が促し、踵を返す。

燈音は一度龍夢に頭を下げ、彼女に続いた。

「————行くって何？帰れないからこのまま観光につてか？
そりゃいいね、この辺にゃ名所いっぱいあるぞ？墓地に墓場に墓所。
ついでにお前も埋められてきたらどう————」

キョウスケが言い切る寸前に、鈴奈の華麗なるアッパーカットが彼の顎に炸裂した。

「最後までキレイに締めろやあああああああ！！！！」

キョウスケは三メートルほどの高さまで宙に浮き、その後脳天から地面へ落下した。

当然ながら彼の安否を気にする者はいなかった。

第四十四話 俺の顎が御臨終

物語内での現在時刻は、お昼の十二時辺りです。まあ既知でしょうが、念のため。

――・・・・っぐ・・・・お・・・・おおおああ・・・
・っ！！！！

キョウスケは自宅の目の前で顎を押さえ、その場にうずくまっていた。

骨にヒビ、とか、骨が折れている、とか、そんな次元ではない。骨が木っ端微塵に砕け散っているのではないだろうか――――つてなモンである。

――――自業自得です

裏にいる龍夢は、己の精神と身体の痛覚との繋がりを一時的に切り離すことで、その痛みから逃れていた。

しかし表に出ているキョウスケはそれが出来ない。よって、その激痛をダイレクトに感じている。

――――龍夢・・・・代わってくれ、頼む・・・・お、俺の・
・・・俺の顎が御臨終・・・・！！

――――ヤです。というか御臨終って・・・・もう死しているのですか、貴方の顎は

――――ああ・・・・もう屍と化してしまっている・・・・！！

———では、もう代わらなくても良いのではないですか？

———「……なんだかんだ言って、ホントは代わりたくねーだけだろお前」

———「ハイ、その通りです」

———「おうん。そんなこと言わないで」

このままではラチがあかないと判断した龍夢は、ため息を吐きつつもこう言った。

———「……ほら、いつまでも悶えていないで……さっさと家に入りましょう」

そう促され、キョウスケも何とか立ち上がってのろのろと扉の取っ手に手を伸ばす。

痛みはだんだんと引いてはいるが、まだかなり痛い。

「腫れてたら嫌だなあ……俺、猪木になっちまうよ」

扉を引く前に、そんなことを呟いてみる。

それから、アイが家にいるので扉に鍵は掛かっていない、はず。

———「とか言ってて掛かってたらおもしろいですね」

———「おもしろくねー……まあ鍵持ってるが……」

無駄な不安を背負わされたが、とりあえず扉は開いた。

「お帰り、お兄ちゃん」

玄関でクツを脱いでいる間に、アイが居間から姿を現した。いつものようにほのかな笑みを浮かべた可愛らしい顔だ。そこで――

「アイ……なんか嫌なことでもあったか？」

キョウスケのその言葉に龍夢はポカーンと口を開いた。龍夢はどれだけ注意深くアイの表情、仕草、その他諸々を見ても、いつもとの相違点が見つからないのだ。

――えーと……あの、あの、キョウスケ？とうとう精神が逝ってしまいましたか？

キョウスケは彼を無視。完全にアイへ意識を向けている。

――ああもう無視ですか、そうですか、ふーん

しかし、アイから発せられた言葉に龍夢は仰天することになる。

「……あれ？分かつちやった？」

――……ってぬわんですとおおおおおおうい！
?!?

龍夢は、おそらく今世紀最大の仰天リアクションを見せた。キョウスケはこれもまた無視。

———こ、これは……一体……???

どうやらキョウスケにしか分からない———いや、兄妹である二人にしか気付けない『何か』があるようだ。

納得のいかない龍夢も、そういう所だけは兄妹らしい、と認めざるを得ない。

「わからないでか。まあ察するに……ナオキかハゲルジジイだな」

「うん……シゲさんじゃなくて、ナオキさんなんだけど……」

ハゲルジジイ、もしくはシゲさんと呼称されるその男の人物像。

それは本作の第三十六話を見ていただけると、

何となくお分かりになると思うので今ここの説明は省かせていただく。

次に登場した際に、説明するでしょう、多分。

「ナオキね……今度会ったときにぶっ飛ばしとくわ」

「あ……お兄ちゃん、それはもう大丈夫だからいいよ?」

———既に実行済か

キョウスケは心の中でそっと呟いた。

「そうそう！お昼もう出来てるよ！私の数多くある得意料理の一つ、クリームパスタ！」

「そこはお兄ちゃんの好きな……ってして欲しかったがな」

「それ言ったら私、コーヒーゼリーしか出来ないじゃん」

「すまんすまん……じゃ、食べるか」

「うん！」

兄の手を引いて、居間へ引っ張っていく妹。

やはり兄妹ですね、と龍夢も心の中でそっと呟いた。

だが居間へ足を踏み入れた直後、キョウスケは我が目を疑った。

「んむ？……これはこれはオニイサマ、おけえりなさいませー」

居間には、何故か、どうしてか、どういう訳か、鈴奈がいた。

それもテーブルで、アイの作ったであろうクリームパスタをほおばっている。

「……………って何でお前がいるんじやあああいいい！！」

すぐさま彼女に駆け寄って怒鳴り散らす。が、鈴奈は気にもせずパスタをすすする。

第四十五話 机の上のパスタ

「あ、やっぱりお兄ちゃんの友達なの？」

アイのその問いかけにはとりあえず適当に答えておく。

「あ？・・・まあ友達と言うより知り合いな、知り合い」

鈴奈はそこだけ、そうそう、と数度うなずいて肯定した。

アイは、キョウスケと鈴奈の関係についてはもう考えないことにした。

男女の関係に関するのナオキの勘は鋭い、というか、百発百中だ。彼がああ言っていたのだから、そうに違いないのだろう。

ちなみに龍夢と鈴奈は公園でのアイとナオキ、
そして見知らぬ少女二人の存在を感知していたが、ここは知らぬフリをしているので、どうかそのつもりで。

「んで、何でお前がいるんだよ」

アイに聞こえない程度に抑えられた声でそう言うと、鈴奈は思念で返す。

——いやー、璃叉から新しく用事頼まれちゃってね、仕方ないけど、一応上からの命令だし、逆らうわけにもいかないしさー

キョウスケも龍夢に頼み、鈴奈に思念を送ってもらう。

——俺の家で昼飯食ってこいつてか!?

——いんや違う。詳しくは言えないけど、お前ん家に泊まった方が何かと都合がいいコトだ

——泊まっ……泊まるのか!?!俺ん家に!?

——アイさんにゃあもう話つけてっから大丈夫だバツとアイに顔を向けると

「あ、鈴奈さんね、紫野葉町に引っ越して、私の中学校に転校してくるんだって!でもこの辺りに空いた土地が無くて……」

と答えてくれた。

——ちなみに両親は共働きで海外にいるって設定だから、その辺ヨロシク

と鈴奈が伝えてきた。

「……それでこの家に住ませてやろうってか?」

「家賃なら払うぞーい」

ひょいっと手を挙げ、鈴奈が付け足す。

「私は別に反対する理由もないし、空いてる部屋もあるし、良いと思うんだけど……お兄ちゃんはどう？」

「……………ん……………」

キョウスケは悩んでいるような素振りをしつつ、アイには見えないように露骨に拒否感をむき出しにした表情を鈴奈に向ける。

—————そんなにイヤか

—————ああ、イヤだな

—————……………そう言えば……………

唐突に龍夢が割り込んできた。

—————キョウスケさん、前々から気になっていた事ですが、この家……………二人で住んでる割には部屋が多くありません？

—————へ？そうなのか？……………どういことなんだ、キョウスケ

鈴奈も気になったのか、彼女も追求してくる。

.....

返答が、ない。

———.....キョウスケさん？どうかしましたか？

龍夢が心配そうな声をかける。

何か不味い事でも訊いただろうか、といった言葉が脳裏を占める。

その直後、キョウスケは少しだけ———ほんの少しだけ、躊躇いを見せた。

龍夢でさえも、気のせいかと思いかけるほど短く。

そして、キョウスケは重々しく口を開き———

———

———え———な、何ですって！？それは一体———
———どういふことですかっ！？

龍夢は耳を疑い、彼らしくもなく、目を見開いてキョウスケに問い詰める。

———二度も言わん。説明もせん———これ以上詮索すんな

だがキョウスケは無理矢理話を切り上げてアイの方へ顔を向け、

「・・・・・・・・別にいいんじゃないの・・・・・・・・その代わり、親父にはお前から言っとけよ」

これでもかと言わんばかりの嫌悪感をあれほど鈴奈に見せていたというのに、突然態度を改めてしまった。

そして龍夢と鈴奈に二の句を継がせず、さっさと階段を目指す。

アイは一瞬戸惑い、慌てて机上にあるキョウスケの分のパスタを指さす。

「え・・・・・・・・ちよっとちよっとお兄ちゃん、お昼は？」

「・・・・・・・・じゃあ、夕飯にまわしてくれ」

キョウスケは踵を返し、二階へと姿を消した。

何か嫌な記憶を思い出してしまったように、どこか不機嫌だ。

今思えばキョウスケは、鈴奈の居候を許可した、というより、さっさとこの場から立ち去りたかったから適当に返した、というようでもあった。

———おい龍夢、キョウスケはなんて言ったんだ？

階段の途中で、鈴奈から龍夢にそんな言葉が届いた。

動揺していたせいか、鈴奈に思念を送るのを忘れていたからだ。

・・・・・・・・すみません。聞き逃してしまいました・・・・・・

――・・・この役立たずっ

『マルクト』の長に対しての口の利き方とは思えない台詞だが、お互いに気にしなかった。

――・・・もう一人の妹・・・ですか・・・

第四十六話 キョウスケアレルギー（前書き）

意欲がまた失せてきました。

読者のみんな！オラに力をー！

第四十六話 キョウスケアレルギー

さて、妙に不機嫌なキョウスケはさておき、一階では――――

「・・・・・・・・どうしたんだろ？ お兄ちゃん」

首を傾げてアイは言った。

彼女の様子から察するに、彼があのような態度になることは珍しいようだ。

「そんなにあたしが気に入らないのかねえ？」

丁度パスタを完食した鈴奈が頭を掻いて呟くと、アイは微かに首を横へ振る。

「・・・・・・・・違う・・・・・・・・と思うけどなあ・・・・・・・・」

二人の間柄をほとんど知らないアイでも、肯定はできない。

例えキョウスケが嫌う人物が来たとしても、彼は普通、あんな行動は取らない。

せいぜい口先でぶつぶつとグチをこぼしながらも付き合う、あるいは相手をとことん無視する程度だ。

「・・・・・・・・ちなみに姉御には何か心当たりはないのか？」

「あ、姉御？・・・・・・・・いや、ないけど・・・・・・・・」

鈴奈は顎に手をあて、ふむふむと頷く。

ややあって彼女は、先ほどまでパスタが盛ってあった皿に視線を向け、

「それにしても姉御、料理上手いねえ……あたしはチャーハンの一つも美味しく作れねえよ」

唐突に話題を変え、しょんぼりとした態度を見せる。が、それは彼女の本心なのかどうかは不明である。

しかしアイは鈴奈に背を向け、こう言ったのだった。

「ううん、料理に上手い下手は関係ないよ……大事なのは――」

そこでわざとらしく間を取った。

「……大事なのは？」

アイは一息吐き、そして鈴奈へ向き直ってビシッと人差し指を彼女に突き付けて続けた。

「――心意気だよっ！！！」

直後、ドーンと鈴奈は雷に打たれたような衝撃を受けた。

「こ……心意気……！！！」

ガタンと音を立てて立ち上がり、目を見開かせる。

「そう！心意気！でもこれは料理に限ったコトじゃないよ！勉強や

運動も同じなの！」

チツチツと立てた指先を左右に振り、得意げに話す。

「むう………」

だが鈴奈はどうも釈然としない。その理由は、ただ一つ――

―――――^{キョウスケ}本当にあの馬鹿の妹………なのか………？

あんな兄だからこそこの妹なのかもしれないが、どうしても納得いかない。

しばらく思案してある結論に辿り着いたとき、彼女の瞳は怪しげにキラリと光っていた。

昼。三時頃。

「で、鈴奈ちゃんの部屋なんだけど」

キョウスケを含む三人は、一階の居間でソファに座って談義していた。

内容は今アイが言ったとおり、鈴奈の部屋についてだ。

キョウスケはまだ少し機嫌が斜めになっているが、アイが無理矢理連れてきたのだった。

「鈴奈ちゃん、お父さんの部屋でいい？」

鈴奈は迷うことなく言い放った。

「やだ。絶対」

「ちゃんと掃除はしてるし、きれいだよ？」

「やだ。オッサンのっっていうだけで寒気がする」

「そ、そんなに嫌？」

「やだ。アレルギーなんだよ、オッサンの。オッサンアレルギー」

「ああ、そう……じゃあ私の部屋使う？」

「はいっ、よろしくお願いしまっす」

鈴奈の部屋決定。

「次にベッドなんだけど、お父さん……のは嫌だね」

「うん」

「……じゃあ——」

いったんそこで言葉を切り、己の傍らで気だるそうに座るキョウスケを一瞥する。

彼はすでに、というか最初から死んだ魚のような濁った瞳で虚空を見つめていた。

「お兄ちゃんのベッドはどう？」

鈴奈は躊躇うことなく言い放った。

「やだ。本^{マジ}気で」

「あ、やっぱり？」

「やだ。キョウスケのつていうだけで頭痛がする」

「お兄ちゃんのベッドだから嫌なの？」

「やだ。アレルギーなんだよ、キョウスケの。キョウスケアレルギー」

それに対してはアイも乾いた笑いを返すしかなかった。

どんなアレルギーですかそれは、と龍夢が言ったような気がした。

「じゃあどこがいい？まさかとは思うけど……ソファなんて言わないよね？」

鈴奈は恥ずかしがることなく言った。

「——姉御のベッドがいい」

談義の結果、キョウスケのベッドにアイが、アイのベッドに鈴奈が、そして親父のベッドにキョウスケが、それぞれ割り当てられた。

結局キョウスケは一言も喋らないでいた。
龍夢は呆れてばかりいた。

第四十七話 抜き足差し足忍び足（前書き）

遅くなりました。

第四十七話 抜き足差し足忍び足

深夜。午前0時。

キョウスケら三人はすでに、それぞれのベッドの中で寝静まっていた。

鈴奈はアイの、アイはキョウスケの、そしてキョウスケは自身の父親のベッドに。

アイと鈴奈は同じ部屋だが、キョウスケは別の部屋、すなわち父親の部屋で睡眠を取っている。

しかし————静かだ。

夜とはいえ、車の走行音、風に揺らされる木々、猫の鳴き声、様々な音があるはずだ。

なぜか、今はそれらがまるで聞こえないのだ。
皆が寝入ってしまった以上そんなことを気にする必要もないが、どうも静かすぎるのだ。

その時————キョウスケの寝入る部屋にて、その不自然な静寂が破られた。

ドアノブが回り、ガチャリと小さな音を立ててドラが開く。
開いたドアから入ってきた人影は、一つだ。

父親の部屋にあるのは、ベッド、椅子とパソコンと電気スタンドが
乗せられた机、

そして、壁を埋め尽くさんばかりに配置された大量の本棚だけだ。
本棚には広辞苑に匹敵する大きさの本がぎっしりと詰まっている。
何の本かはわからない。

部屋の広さは――――元々は広いのだろうが、置かれた本棚のせ
いでかなり狭く見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋に入ってきた者はそのまま物音を立てぬよう慎重な足取りで、
仰向けに寝ころぶキョウスケの傍らまで移動する。

不敵な笑みを浮かべ、彼の額に右手をかざした。かざした手から淡
い光がこぼれる。

その時、浮かべていた笑みがかき消えた。ベッドから伸びた手に、
右腕を掴まれたのだ。

「――――夜分遅くにいったい何のようですか、鈴奈？」

寝ころんだ姿勢のまま、訝しげな表情の龍夢が鈴奈を睨む。

鈴奈も納得いかないような表情をして、睨み返す。

「ちょ・・・・・・・・なんで起きてんだよ？」

「こちらの質問に答えなさい。何をしようとしたのです？」

鈴奈は手を振り払おうとしたが、龍夢はそれをさせない。

どうやら質問に答えるまで放すつもりはないらしい。

観念したように鈴奈は話し始めた。

「まあ、あたしの個人的な興味からだ」

「興味？」

「ああ、なんでアイさんの兄があれほどまでに馬鹿なんだ？ って思ってた。

ちよいとキョウスケの記憶でも探ってみようかな、なんて……
・
お前も気になんだろ？ あんな素晴らしい妹がいるのにさ」

それに反論しようと龍夢は口を開いたが、

「…………あ……………」

という情けない声が漏れた。実は龍夢も疑問に思っていたということだ。

しっかり者の妹に対し、だらしない兄。いや、兄がそれだからこそ、あの妹なのだろうか。

「ば、馬鹿とまで言うつもりではありませんが……………気になるいと言えは嘘になります、ね……………」

空いているもう片手をあごに当て、眉をひそめる……………その一瞬、龍夢の気が緩んだ。

その隙を逃さず、鈴奈の左手が龍夢の視界を覆う。

「……………」

鈴奈は龍夢の抵抗を許さず、そのまま手先から一気に己の意識を流し込んだ。

「記憶の旅へレッツラゴー」

微笑と共にそう言った直後、鈴奈はぱたりとキョウスケの上半身の上に倒れ、意識を失った。

第四十七話 抜き足差し足忍び足（後書き）

レツツラゴーって最近聞きませんね・・・・死語？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7369d/>

イビル・アイ 邪眼再臨

2010年10月13日04時36分発行